

山階鳥類研究所 年報

令和5(2023)年度

Annual Report
of the
Yamashina Institute for Ornithology
2023

公益財団法人 山階鳥類研究所

令和6(2024)年8月

はじめに

公益財団法人山階鳥類研究所（以下、本研究所）の令和5年度の年報を刊行します。この年報は、本研究所の研究員、専門員が令和5年度に行った研究、調査、社会活動等についてまとめたものです。

本研究所の活動は、鳥類標識調査、希少鳥類の調査や保全活動などの野外活動に加え、鳥類の様々な試料について、DNAの解析、電子顕微鏡像、X線CT画像やマルチスペクトル画像を用いた形態データの作成、安定同位体を用いた食性解析など多岐にわたっております。さらに研究所がこれまで収集した標本・資料の管理、拡充やそれらを活用した研究などが行われております。本年度は、これらの研究活動はもとより、所員会議、意見交換会、文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）研究成果発表会、一般の方向けの講演会などの活動等のほぼすべての活動が、新型コロナウイルス感染症が5類感染症へと移行したことにより、コロナ禍以前のように滞りなく実施されました。

また、本年度は文部科学省科学研究費補助金特定奨励費による「鳥の学問を発展させる資料の拡充・管理・公開に関する研究事業」の最終年度であり、研究事業の区切りの年でもありました。この事業では、これまで蓄積した標本・資料に加えて、新たな収集を行い拡充に努めるとともに、データベース化と公開、それらを活用した研究に注力いたしました。さらに、鳥類の捕獲法を映像化して後世に残すことや鳥の和名の整備なども行われています。これらの活動や研究の内容は、自然科学領域だけでなく社会科学領域にも及んでおり、本研究所に蓄積された標本・資料および様々な知識や技能・技術は、他機関との連携・人材育成にも活用されています。

以上のような本研究所の多様な活動の記録を継続して残すことは、活動の長期的な評価と将来計画に役立つものと考えます。また、活動成果を公表し、広くご意見や評価をいただくことは、公益財団法人である本研究所の責務であります。本研究所の1年間の活動を振り返り今後の活動の改善や本研究所の将来を考える機会にしていきたいと思いますので、多くの皆様にご一読いただき忌憚のないご意見を頂戴いただければ幸いです。

最後に、年報の作成、編集に尽力いただいた皆様にお礼申し上げます。

令和6年8月

山階鳥類研究所所長
小川 博

目 次

I おもなできごと	1
II トピックス	5
● 絶滅から復活した絶滅危惧種シジュウカラガンの渡り経路と繁殖地を初めて明らかにしました	6
● オーストラリアの足環が付いたベニアジサシがノラネコに捕食されました	7
● 韓国の国立野生動物疾病管理院と鳥インフルエンザに関連する渡り鳥追跡のための協定を締結しました	8
● アホウドリの保全活動と研究を継続するためのマンスリーサポーターを募集します	9
● 大学生の博物館実習、中学生の職場体験、高校生の探究活動に協力しました	10
● ヤンバルクイナ野生復帰の試み（尾崎清明 副所長）	11
● 「百瀬淳子アホウドリ基金」の創設	12
● 文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）の研究成果発表会を開催しました	13
III 事業内容	15
III-1 事業報告要約	16
III-2 事業報告事業別概要	18
III-3 旧保全研究室の事業活動	32
III-4 科学研究費補助金（特定奨励費）の研究事業	34
III-5 研究所員の論文・講演等活動成果	45
III-6 所蔵資料の利用実績・その他	53
III-7 新聞・雑誌・メディア記事掲載記録	55
IV 資料編	61
IV-1 組織図	62
IV-2 人員構成	63
IV-3 評議員名簿	64
IV-4 役員名簿	65
IV-5 特任研究員・特任専門員・客員研究員・フェロー 名簿	66
IV-6 意見交換会 記録	68
IV-7 研究成果発表会 記録	82
V 令和5（2023）年度決算資料	107
V-1 貸借対照表	108
V-2 正味財産増減計算書	110
V-3 財産目録	112
VI ご寄附・賛助等に関する資料	113

|

おもなできごと

【令和5（2023）年】

1月24日～4月9日

領土・主権展示館の企画展「近代日本の夜明けと離島の編入」に展示協力（東京都千代田区）

1月20日～5月7日

東京大学総合研究博物館インターメディアテク開館十周年記念特別展示『極楽鳥』で、山階鳥研の標本を多数展示（東京都千代田区）

4月8日～5月21日

「わけあって絶滅しました。展」（岡山会場）にアホウドリのデコイ（実物大の模型）を貸出

4月15日～2024年3月16日

「鳥のサイエンストーク」を、毎月第3土曜日（9・11月を除く）にオンラインで開催（共催：我孫子市鳥の博物館）

5月6日～6月2日

野生動物写真家・中村恵美さんの写真展「eternally～消えかけていた翼が再び空へ蘇った」に展示協力（場所：公益社団法人日本外国人特派員協会、東京都千代田区）

5月22日 「絶滅から復活した絶滅危惧種シジュウカラガンの渡り経路と繁殖地を初めて明らかにしました」日本ガンを保護する会と同時報道発表

5月31日 ドイツ・ハンブルク動物学博物館の鳥類学担当のキュレーター、ニック・フリードマン博士が調査・視察のため来所

6月1日 定時理事会（書面決議）

6月14日 「アホウドリ2022-23年の繁殖期の繁殖状況～伊豆諸島鳥島全体で確認されたひなの数が初めて1,000羽越え／小笠原諸島鴛島の新繁殖地は昨年に引き続き2羽のヒナが孵化」報道発表

6月18日 油田研究員、東京港野鳥公園での世界アルバトロステデー&シーバードウィークイベントで「オキノタユウ（アホウドリ）復活へ現在の状況と課題」と題して講演（東京都大田区、オンライン併用）

6月20日 韓国・国立野生動物疾病管理院（NIWDC）から院長ら5名が来所し、鳥インフルエンザに関する渡り鳥追跡のための協定を締結

6月21日～9月3日

沖縄県立博物館・美術館で開催される「みんなの進化展－命はつながっている－」にドードーのレプリカとキーウィーの標本を貸出（沖縄県那覇市）

6月22日 令和5年度定時評議員会・臨時理事会（東京都内）

6月23日～ 所内見学会を再開。コロナ禍前と同様、毎月第4金曜日の午前と午後の各2回実施。電話・メールでの申込制、定員20名

6月30日 「沖縄で繁殖しオーストラリアとの間を渡りするベニアジサシ（絶滅危惧種）が、ノラネコに捕食されたことが確認されました」報道発表

7月15日～9月3日

「わけあって絶滅しました。展」（広島会場）にアホウドリのデコイ（実物大の模型）を貸出

7月23日 油田研究員、親子の日@手賀沼講演2023において、アホウドリの保全活動に関するスлайドトークショーを実施（千葉県我孫子市）

8月2日 （一社）霞会館常務理事らが助成先の活動状況視察のため来訪

8月5日 澤研究員、京都市動物園で「鳥の渡りを追って－研究者の苦悩と挑戦－」と題し講演（京都府京都市）

8月28日～9月1日

東京農業大学地域環境科学部4年生1名を博物館実習生として受け入れ

9月15日～18日

日本鳥学会2023年度大会（金沢大学）において、森本研究員らが参加した研究チームがポスター賞を受賞

10月6日 文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）意見交換会（オンライン）

10月11・12日、11月28日・29日

流山市立常盤松中学校・流山市立東深井中学校より、それぞれ中学2年生2名が来所し、2

日間の職場体験学習を実施

- 10月13日 澤研究員、(公社)日本技術士会東北本部宮城県支部環境委員会主催の「第19回環境対応セミナー」で「日本に飛来するガン類の最新情報」の演者の一人として登壇(宮城県仙台市)
- 10月14日～12月10日
港区立郷土資料館の令和5年度特別展「ある図案家の仕事ー宮中の染色デザイン」において山階鳥研所蔵(学習院大学史料館寄託品)の文化資料が展示(東京都港区)
- 10月25日～29日
東京都美術館で開催された第24回全日本バードカービングコンクール(主催・日本バードカービング協会)において、台湾の黄麟鳴さんのミカドキジを題材にした「家族」に山階鳥類研究所所長賞を贈呈(東京都台東区)
- 11月1日 「アホウドリを絶滅の瀬戸際から救い出すために毎年の現地調査が不可欠です! 保全活動とモニタリングを継続するためのマンスリーサポーターの募集を開始しました」報道発表
- 11月4日～5日
ジャパン・バード・フェスティバル2023(JBF2023)(実行委員長:小川博山階鳥研所長)開催。2日間「山階鳥研 見にレクチャー」として所員10名によるミニ講演会を実施。また、我孫子市鳥の博物館と共催で「鳥学講座」を実施(千葉県我孫子市)
- 11月5日 富士山GOGOエフエムが研究所の活動について取材、鶴見文化資料ディレクターが対応し、翌年1月11日に同局「つねさんの玉手箱」で放送。
- 11月11日・12日
澤研究員、北海道標津町(11日)・別海町(12日)で教育講演会「野付湾のコクガンとは」と題して講演(主催:NPO法人野付エコネットワーク)
- 12月6日 「中国・四国地区賛助会員の集い」は開催中止となる
- 12月13日 都立保谷高等学校の1年生5名が探究の活動「人間が鳥類に与えている影響、鳥類が人間に与えている影響」をテーマとして情報収集のために来所
- 12月17～18日
標識調査に従事するバンダー育成を目的とした「鳥類標識調査講習会」を開催(千葉県我孫子市)
- 12月21日 令和5年度臨時理事会(オンライン)
- 12月24日 澤研究員、東京都足立区生涯学習センターで「絶滅寸前からよみがえった鳥『シジュウカラガン』の渡りを「追って」と題して講演(東京都足立区)

【令和6(2024)年】

- 1月7日 岩見研究員、東三河野鳥同好会の普及講演会として、豊橋市自然史博物館で「未来へ残す標本の仕事ー鳥類標本ってどんなもの?」と題して講演(愛知県豊橋市)
- 1月11日 百瀬淳子様より、アホウドリマンスリーサポーターの主旨にご共感を頂き寄附を頂く。寄附を「百瀬淳子アホウドリ基金」として運用開始
- 1月20日 澤研究員、芝浦工業大学柏中学校で「渡り鳥の研究から考える生物多様性の保全」と題して講演(千葉県柏市)
- 1月23日 澤研究員、古川学園高等学校で「渡り鳥を追う仕事ーキャリアってなに?～」と題して講演、「ガン類の渡りと生態」の授業を実施(宮城県大崎市)
- 1月29日 第一生命保険(株)が実施する、同社契約者が通知サービスをwebに切り替えた1通発信分ごとに寄附する取り組みにおいて、寄附先として鳥研が選定され、6～12月分の寄附を受けた
- 2月4日 (一社)日本鳩レース協会2023年度総合表彰式において、小川所長からレース鳩帰還率賞を贈呈
- 2月7日 文部科学省科学研究費補助金(特定奨励費)研究成果発表会を、東京大学農学部フードサイエンス棟中島董一郎記念ホールにて実施(オンライン併用)
- 2月25日 尾崎副所長、出雲市「トキも人も育つまちづくりシンポジウム」で「トキが最後の5羽から大空を舞う日まで」と題して講演し、「トキが羽ばたく未来へ 夢追い人のトークセッション」座談会に出席(鳥根県出雲市)
- 3月1日 鳥類標識調査のニュースレター「バンディングかわら版」第7号発行

3月13日 山階鳥学セミナー～捕獲技術入門編～を実施（千葉県我孫子市、主催）

3月16日～5月6日

北九州市立自然史・歴史博物館（いのちのたび博物館）春の特別展「カラース～自然の色の不思議展～」に展示協力（福岡県北九州市）

3月21日 定時理事会（オンライン）

II
トピックス

令和5年度にあった出来事から、トピックを広報誌「山階鳥研NEWS」から抜粋して紹介します

(役職名・所属名称等は、いずれも「山階鳥研NEWS」掲載当時のものです)

●絶滅から復活した絶滅危惧種シジュウカラガンの渡り経路と繁殖地を初めて明らかにしました

日本雁を保護する会（呉地正行 会長）と山階鳥研は、絶滅危惧種シジュウカラガンの渡りの中継地となっている秋田県大潟村で、2021年12月に行われた調査で捕獲された9羽に発信器を装着し、電波により動向を追跡調査していました。これらのうち2羽が、宮城県北部の仙北平野で越冬したのち、千島列島エカルマ島へ渡り、繁殖期間を過ごし、2022年10月から2023年4月にかけて再び日本に帰還、越冬しており、これまでの保護プロジェクトにおいてエカルマ島で放鳥された個体が、同島で繁殖を始め、それらの群れが定期的に日本へ渡っていることが確認できました。また、エカルマ島の南東部が主要な生息地や営巣地の可能性が高いことも明らかになりました。

日本雁を保護する会らの長年の活動により、シジュウカラガンの日本に渡来する個体群は絶滅から復活し、個体数を増加させてきましたが、その正確な繁殖地と渡り経路は不明でした。この研究で正確な繁殖地と渡り経路の情報が明らかになり、今後の適切な個体群管理が進むことが期待されます。

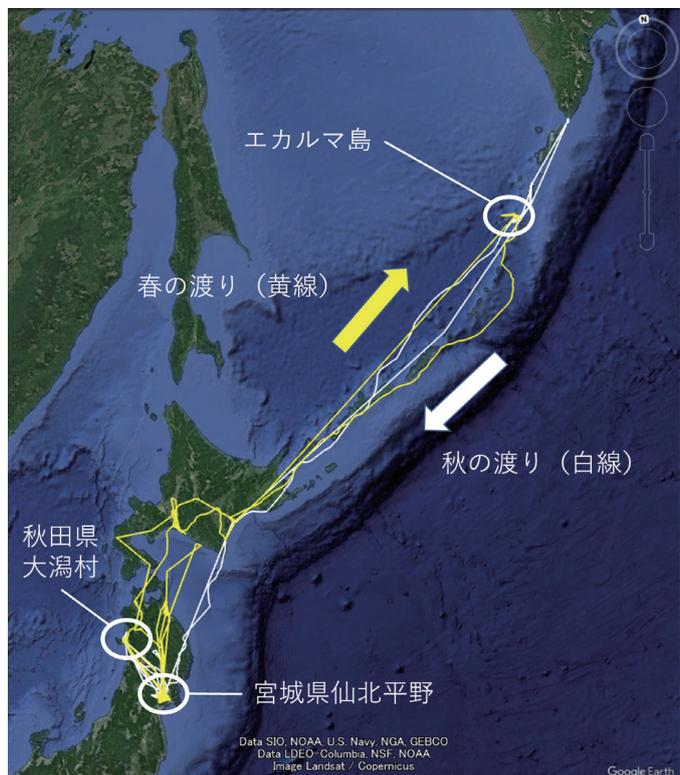
(山階鳥研NEWS 2023年7月号より)

The endangered Cackling Goose, its migration routes and breeding sites revealed

Japanese Association for Wild Geese Protection (Chairman: Masayuki Kurechi) and the Yamashina Institute for Ornithology (YIO) attached radio transmitters to nine Cackling Geese and tracked their movements. The birds were captured in December 2021 in Oogata, Akita Prefecture, which serves as a migratory stopover for the species. Two of these birds wintered in the Senboku Plain in northern Miyagi Prefecture, migrated to Ekarma Island in the Kuril Islands, spent the breeding season, and returned to Japan to winter from October 2022 to April 2023. We have confirmed that individuals released on Ekarma Island in a conservation project have bred on the island, and that flocks of these birds have been regularly migrating to Japan. We also found that the southeastern part of Ekarma Island is likely to be a major habitat and a breeding site.

Through years of work by the Japanese Association for Wild Geese Protection and others, the Cackling Goose population has been recovering from near extinction and increasing in numbers, but their breeding grounds and migratory routes had been unknown. We hoped that this study will provide more information on their exact breeding sites and migratory routes, which would facilitate appropriate population management in the future.

(Excerpt from the July 2023 issue of Yamashina Choken News)



今回判明したシジュウカラガンの渡りルート
Migratory routes of the Cackling Goose revealed in this study

●オーストラリアの足環が付いたベニアジサシがノラネコに捕食されました

ベニアジサシは、欧州やアフリカ、北米などに生息する海鳥で、日本周辺ではオーストラリアから渡来して沖縄周辺で繁殖しているものが観察できます。6月22日、沖縄県うるま市勝連（かつれん）半島の漁港で、ノラネコが防波堤の上で休息するベニアジサシを捕獲し、口にくわえて運ぶ様子が撮影されました。

沖縄県では、これまでもノラネコによってヤンバルクイナが捕食されていることがわかっていますが、ベニアジサシでの報告は初めてです。ベニアジサシの繁殖数は近年減少傾向にあり、影響が心配されます。捕食された個体に付いていた鳥類標識調査の金属足環を回収して調べたところ、約6,000km南のオーストラリア・クイーンズランド州スウェイン礁で、2002年1月12日に標識されたもので、21歳以上であることが判明しました。

ノネコやノラネコが野生鳥類を捕食することによる影響は、世界中で懸念されています。伊豆諸島御蔵島のオオミズナギドリ（IUCNのレッドリストで準絶滅危惧種）の繁殖地では1970年代後半に175万～350万羽が生息していましたが、近年10万羽程度に激減し、その一因がネコであると考えられています。ネコ1匹あたり平均で年間に313羽のオオミズナギドリを捕食するという推定もされています。

（山階鳥研NEWS 2023年9月号より）

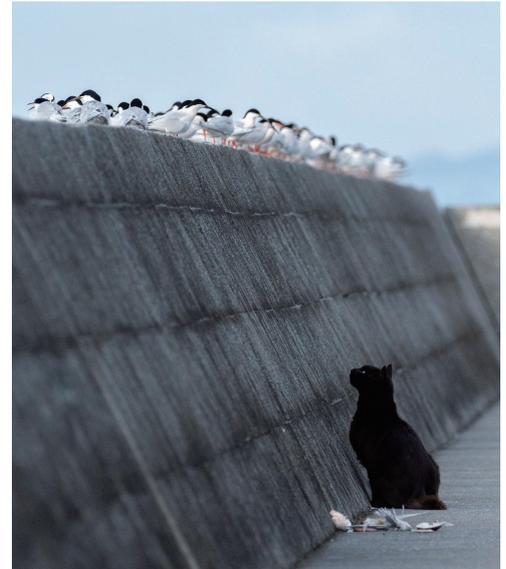
Over 21 years old Roseate Tern traveling between Australian and Okinawa was preyed upon by a feral cat

The Roseate Tern is a seabird found around the globe, and ones observed around Japan migrate from Australia and breed around Okinawa islands. On June 22, at a fishing port on the Katsuren Peninsula in Uruma, Okinawa Prefecture, a feral cat was photographed capturing a Roseate Tern resting on a breakwater and carrying it in its mouth.

In Okinawa Prefecture, it has been known that feral cats often prey on Okinawa Rails, but this is the first report of this behavior in the case of the Roseate Tern. The number of breeding Roseate Terns has been declining in recent years, and the impact is worrisome. The metal ring attached on the predated individual was recovered and examined, and it was found to be over 21 years old, having been ringed on January 12, 2002, at Swain Reefs, Queensland, Australia, approximately 6,000 km south.

The impact of feral cat predation on wild birds is a concern throughout the world. The breeding grounds of the Streaked Shearwater (near threatened on the IUCN Red List) on Mikura Island in the Izu Islands had a population of 1.75 to 3.5 million birds in the late 1970s, but in recent years the population has plummeted to about 100,000, with cats thought to be a contributing factor. It has been estimated that each feral cat preys on an average of 313 Streaked Shearwaters per year.

(Excerpt from the September 2023 issue of Yamashina Choken News)



堤防にとまるベニアジサシを狙うネコ、足元にすでに死体がある（上原勝さん撮影）

A cat aiming at Roseate Terns perched on a bank, with a few dead aside (photo by Masaru Uehara)



ベニアジサシをくわえるネコ（上原勝さん撮影）、足環が付いている（拡大）

A cat holding a tern (photo by Masaru Uehara), with rings attached (enlarged)

●韓国の国立野生動物疾病管理院と鳥インフルエンザに関連する渡り鳥追跡のための協定を締結しました

6月20日、韓国の国立野生動物疾病管理院（NIWDC）から、シン・ドンイン 院長ら5名が山階鳥研に来所し、調印式を行いました。

韓国の国立野生動物疾病管理院（NIWDC：National Institute of Wildlife Disease Control and Prevention）は鳥インフルエンザに関連する種の追跡プロジェクトを立ち上げています。韓国国内だけでなく、モンゴルなどの周辺国とも共同研究を実施しています。今回締結した協定により、今後5年間程度、鳥インフルエンザとの関連が考えられるガンカモ類やツル類などの渡り鳥を継続して追跡調査し、情報を共有する予定です。

当日は、調印式に先立ってセミナーが開催され、イ・ソンミ 研究員からは追跡プロジェクトの概要について、澤祐介研究員からはガン類における近年の追跡調査についての講演があり、双方の意見交換を行いました。

（山階鳥研NEWS 2023年9月号より）

Agreement signed with Korea's National Institute of Wildlife Disease Control and Prevention to track migratory birds related to avian influenza

On June 20, Dr. Shin-Dong In, the president of the National Institute of Wildlife Disease Control and Prevention (NIWDC) of Korea, and five others visited YIO for a signing ceremony.

NIWDC has launched a project to track species associated with avian influenza. It is conducting joint research not only within Korea, but also with neighboring countries such as Mongolia. Under the agreement signed, the two organizations plan to continue tracking and sharing information for the next five years or so on migratory birds such as ducks, geese, and cranes that may be associated with avian influenza.

The signing ceremony was preceded by a seminar in which Lee Seon-Mi, a senior researcher at NIWDC, gave an overview of the tracking project, and Sawa Yusuke, a researcher at YIO gave a talk on recent tracking studies on geese and ducks.

(Excerpt from the September 2023 issue of Yamashina Choken News)



調印式後の記念撮影（前列、左から）イ・スウン チーム長、シン 院長、峰崎善次 事務局長、尾崎清明 副所長（後列、左から）水田拓 自然誌・保全研究ディレクター、イ・シワン 韓国環境生態研究所副所長、チョン・ソル 研究員、イ・ソンミ 研究員、澤祐介 研究員

Commemorative photo after the signing ceremony. Front row, from left: Lee Suwoong (Team Leader/Director of NIWDC), Shin Dong-in (President of NIWDC), Minezaki Yoshitsugu (Secretary General of YIO), Ozaki Kiyooki (Deputy Director General of YIO). Back row, from left: Mizuta Taku (Director of Natural History and Conservation of YIO), Lee Si-Wan (Director of Korea Institute of Environmental Ecology), Jeong Sol (Senior Researcher of NIWDC), Lee Seon-Mi (Senior Researcher of NIWDC), Sawa Yusuke (Researcher of YIO)

●アホウドリの保全活動と研究を継続するためのマンスリーサポーターを募集します

アホウドリの保全活動は、現在、山階鳥研が主に環境省と東京都の予算によって、毎年、鳥島と小笠原諸島の鴛島（むこじま）で標識調査やモニタリングを含む活動を行っていますが、一定の成果が得られたことで公的予算は縮小傾向にあり、毎年の現地調査の実施が難しくなりつつあります。しかし、鳥島は、島そのものが火山島でいつ噴火してもおかしくない環境にあります。鴛島では、2008年から2012年に鳥島から移送・飼育され巣立った個体をファウンダー（創始個体）としてかつての繁殖地を再生する取り組みが実施されています。昨年、初めて移送個体の孫にあたる雛の誕生が確認されましたが、飛来数、繁殖ペア数ともに期待された増加傾向にはありません。今後、毎年複数のつがい安定して繁殖できる状況にならないと、鴛島での個体数増加にはつながりません。

また、これまで1種と考えられてきたアホウドリは、分類学的に鳥島と尖閣諸島の集団を別種とするべきという研究成果が出ており、研究が進められています。これも、過去半世紀にわたって鳥島や鴛島で孵化したヒナすべてに足環を装着した結果わかったことです。標識調査やモニタリングの継続はこういった研究や適切な保全管理にも大きな力となります。

山階鳥研では今後もアホウドリのモニタリングや保全活動を継続する必要があると考えています。おおむね10年の活動が必要ですが、予算減少のため、マンスリーサポーター（500円/月）を2,000口目標で募集します。2,000口で毎年、鳥島で1回、鴛島で3回の調査が可能となり、すべてのヒナへの足環装着、個体数・ヒナ数モニタリング、鴛島でのデコイによる誘引などの保全活動が継続できます。

（山階鳥研NEWS 2023年11月号より）

Looking for supporters for continuing conservation and research on the Short-tailed Albatross

Currently, YIO conducts conservation activities on the Short-tailed Albatross, including banding surveys and monitoring, mainly on Torishima Island and Mukojima Island of the Ogasawara Islands, funded mainly by the Ministry of the Environment and the Tokyo Metropolitan Government. However, the public funding has been cut as the number of Torishima population recovering, and it is becoming difficult to conduct annual field surveys. Torishima Island is not a large island and is a volcanic island risking catastrophic eruption at any time. On Mukojima Island, an effort is underway to restore the former breeding site by creating founder individuals that were translocated from Torishima as chicks



どんな場所でどんな調査をしているか、アホウドリがどんな生き物なのかがわかる動画を公開しています
Videos introducing the species, their breeding islands, and how we are conducting the surveys



北半球最大 空と海の覇者 アホウドリ

日本の特別天然記念物に指定されている絶滅危惧種アホウドリは、翼を広げると2m以上になる北半球最大の海鳥です。昔から夏は北太平洋の島にアホウドリが飛来して生活し、秋に繁殖のため日本近海にやってきます。繁殖のために無人島に上陸する以外は生活のほとんどを海上ですこします。

アホウドリの繁殖は冬、10月中旬ごろになると繁殖地に集まってつがいになり、卵を一つ産みます。卵は約2か月で孵化し、その後約4か月間、雛は両親から餌をもらい、5月中旬ごろに巣立つ北の海を自給します。かつて北西太平洋の島々で数百万から数千万羽が繁殖していたとされるアホウドリは、

19世紀後半の乱獲によって、わずか数十年で個体数は激減。繁殖地は伊豆諸島鳥島と尖閣諸島の2か所になりました。その後多くの人の協力で保全活動が行われ、2023年には7900羽以上にまで回復しました。しかし、今も全体の90%ほどは常に噴火の危険がある鳥島で繁殖しています。

現在、鳥島とかつての繁殖地が復元されつつある小笠原諸島 鴛島で保全活動とモニタリングが継続されています。人が絶滅の危機に追い込まれたアホウドリが再び日本の海上を大群で飛び交うようになるまで、私たちはこれからも保全管理をする責任があります。



調査・保全活動へのご支援 (マンスリーサポーター)



発行：公益財団法人 山階鳥類研究所、支援：サントリー 一般財団助成金、2023年発行

ポストカードも制作しています
We also have produced several postcards

and artificially raised to fledging from 2008 to 2012. However, both the number of visiting birds or the number of breeding pairs have not been increasing as expected. The population on Mukojima would not increase until there is a stable breeding population of several breeding pairs every year.

In addition, ongoing researches showed that the populations of Torishima and Senkaku Islands are genetically, morphologically, and ethologically distinct indicating that the two populations should be taxonomically considered separate species. This is one of findings we have gained as a result of banding (attaching rings to) all chicks hatched on Torishima Island over the past half century. Continued banding surveys and monitoring will be of great help in this kind of research and appropriate conservation of the species.

The continuation of the monitoring and conservation activities is indispensable for the future of the albatross. Due to budget constraints, we are now seeking monthly donors (500 yen/month) to support our activities. 2,000 supporters will allow us to conduct one survey on Torishima and three surveys on Mukojima each year, which would enable us to continue activities such as banding, population monitoring, installation of attracting devices at Mukojima.

(Excerpt from the November 2023 issue of Yamashina Choken News)

●大学生の博物館実習、中学生の職場体験、高校生の探究活動に協力しました

山階鳥研は、博物館実習、職場体験や探究学習などのプログラムを受け入れています。

2023年は、博物館実習は8月28日から9月1日の5日間、東京農業大学 地域環境科学部の4年生1名が実習を行い、鶴見みや古（つるみみやこ）文化資料ディレクターが指導を担当しました。今回は、山階芳麿が実際に使用していた双眼鏡に登録番号を書いたラベルを付けるといった登録作業、未登録の本や雑誌の整理、昔の写真の汚れを取り、長期保存が可能な透明なポリエチレンの袋に収納するといった保存作業などを行いました。

職場体験では、10月11、12日に流山市常盤松中学校から、11月28、29日に流山市東深井中学校から、それぞれ2年生2名を受け入れました。当日は、収蔵庫で標本を閲覧し、鶴見みや古 ディレクターの指導のもとで資料整理（写真整理、登録作業）を行い、千田万里子 専門員から鳥類標識調査について解説を受けて足環の装着データの入力作業などに取り組みました。広報の仕事では、ウェブサイトの更新、SNSへの投稿などを体験しました。

探究活動では、12月13日に都立保谷高等学校の1年生5名が「探求の活動」のため来所しました。所内を見学して山階鳥研の調査研究や資料の収集整理などの仕事についてあらましを学んだ後、探求のテーマである「人間が鳥類に与えている影響、鳥類が人間に与えている影響」について、水田拓 自然誌・保全研究ディレクターと平岡考 専門員から話を聞きました。

(山階鳥研NEWS 2023年11月号・2024年1月号・3月号より)

Cooperated with university students' museum training, junior high school students' work experience, and high school students' inquiry-based learning

YIO accepts museum training, work experience and exploratory study programs on a regular basis.

In 2023, the museum practical training was conducted for five days from August 28 to September 1 for one senior year student from the Faculty of Regional Environment Science, Tokyo University of Agriculture. Miyako Tsurumi, Director of Collection of Cultural Materials supervised the trainee. The student was involved in registration work, such as attaching labels with registration numbers to binoculars actually used by the founder of the institution, Yoshimaro Yamashina; organizing unregistered books and magazines; and preserving old photographs by removing stains and storing them in transparent polyethylene bags for long-term preservation.

As part of the work experience program, two second-year students from Tokiwamatsu Junior High School (Nagareyama City), and two second-year students from Higashihukai Junior High School (Nagareyama City) were accepted on October 11 and 12, and on November 28 and 29, respectively. The students browsed specimens in the collection room, sorted out materials (photo sorting and registration work) under the guidance of Director Miyako Tsurumi, and worked on inputting banding data after receiving an explanation on bird banding surveys from Specialist Mariko Senda. In public relations work,

they experienced updating the website and posting on SNS.

On December 13, five first-year students from Tokyo Metropolitan Hoya High School visited YIO for inquiry-based learning. After touring the institute and learning about the work of YIO, including research and collection and organization of materials, they listened to Taku Mizuta, Director of Natural History and Conservation, and Takashi Hiraoka, Public Relations Specialist, talk about the theme of their learning, “The Impact of Humans on Birds and the Impact of Birds on Humans.”

(Excerpt from the November 2023, January 2024, and March 2024 issues of Yamashina Choken News)



資料を保存袋に収納する実習生（左）と鶴見文化資料ディレクター
Trainee and Tsurumi Director, storing materials in preservation bags



熱心に見学する都立保谷高等学校の生徒たち
Students from Tokyo Metropolitan Hoya High School learning about specimens

●ヤンバルクイナ野生復帰の試み（尾崎清明 副所長）

沖縄島北部のやんばる地域では、外来種マングースなどの侵入によって減少した希少固有種ヤンバルクイナの保護増殖事業が進められており、山階鳥研は、飼育下で繁殖させたヤンバルクイナの野生復帰技術の評価するための追跡調査を実施しています。

環境省の施設で人工繁殖させたヤンバルクイナを年間8羽程度放鳥し、野生個体と生存率や繁殖生態を比較します。この調査は2014年に始まり、これまでに3ヶ所で合計89羽を放鳥し、同期間に周辺で捕獲した野生個体に小型電波発信機を装着して追跡を行いました。その結果、飼育放鳥個体は野生個体に比べ放鳥初期の生存率が低く、その原因はハブやネコ、カラスなどによる捕食にありました。そこで人工繁殖個体を放鳥前に外敵の模型などで馴化（じゅんか）訓練を実施したところ、生存率の向上が見られました。さらに、飼育放鳥個体の野生下での繁殖も確認され、野生個体との間でも繁殖成功に至っています。

この調査は、環境研究総合推進費、生物多様性保全推進交付金、環境省の業務委託のほか、2023年度からJAC環境動物保護財団の助成金を受けて実施しています。死因の究明には、NPO法人どうぶつたちの病院沖縄と国立環境研究所にご協力いただいています。

（山階鳥研NEWS 2024年3月号より）

Attempts to restore the Okinawa Rail population (Kiyooki Ozaki, Deputy Director General)

In the Yanbaru region of northern Okinawa Island, a program for Rehabilitation of Natural Habitats and Maintenance of Viable Populations



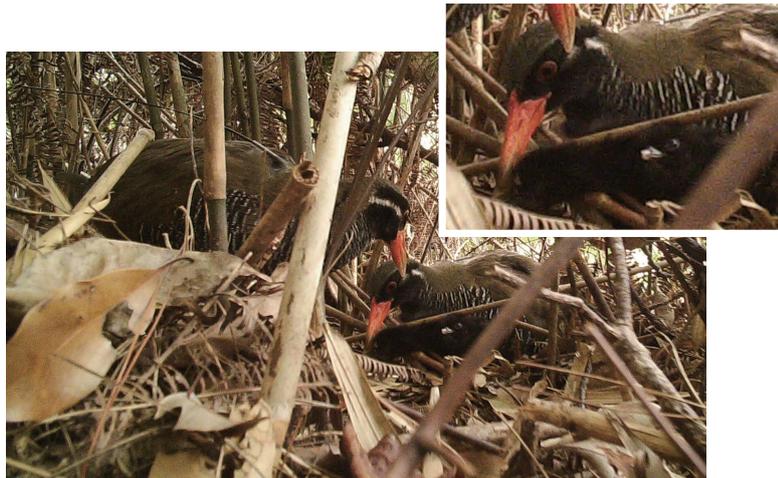
人工繁殖させた個体の放鳥
releasing of captive-bred individual

(the Ministry of the Environment) is underway for the rare endemic Okinawa Rail, which has declined due to the invasion of a non-native mongoose. YIO is conducting a follow-up survey to evaluate techniques for reintroducing captive-bred Okinawa Rails.

About eight artificially bred Okinawa Rails at a facility owned by the Ministry of the Environment have been released per year, and their survival rate and breeding behaviors are compared with those of wild individuals. This research began in 2014, and to date, a total of 89 birds have been released at three locations, and wild individuals captured in the vicinity during the same period have been tracked by attaching small radio transmitters. The results showed that the survival rate of released birds was lower than that of wild birds in the early stages of release. The cause of this was attributed to predation by Habus (native snakes), Cats, Crows, and other predators. The survival rate of released birds was improved by acclimation training using models of predators before releasing. Furthermore, breeding of released birds in the wild has been confirmed, and mating between wild individuals has also been successful.

This study is being conducted under the auspices of the Environment Research and Technology Development Fund, the Grant for the Promotion of Biodiversity Conservation, and outsourcing of the Ministry of the Environment, as well as a grant from the JAC Environmental & Animal Protection Foundation since FY2023. The NPO Okinawa Wildlife Federation and the National Institute for Environmental Studies are cooperating in the investigation of the cause of death in the wild.

(Excerpt from the March 2024 issue of Yamashina Choken News)



飼育放鳥個体同士の野外での繁殖（親鳥の下にヒナが2羽見える；右上に拡大）

(JAC 環境動物保護財団の助成金による自動カメラで撮影)

breeding of released pair in the wild (right: two chicks can be seen under the parent bird)

(photos taken with an automatic camera funded by a grant from the JAC Environmental & Animal Protection Foundation)

● 「百瀬淳子アホウドリ基金」の創設

昨年11月に募集を開始したアホウドリマンスリーサポーターに共感してくださった賛助会員の百瀬淳子さんから、鳥島やアホウドリへの想いと応援メッセージとともに、アホウドリ調査へのご支援をいただきました。これを「百瀬淳子アホウドリ基金」として運用し、今後のアホウドリ保全のための活動に役立てていきます。

これにともない、2月7日東京都内で、総裁 秋篠宮皇嗣殿下から百瀬淳子さんに「百瀬淳子アホウドリ基金」への感謝状が贈呈されました。

(山階鳥研NEWS 2024年5月号より)

Establishment of “Junko Momose Albatross Fund”

Junko Momose, a supporting member of YIO who appreciated our conservation activities of the Short-tailed Albatross has generously donated to our Monthly Supporter program, which we launched last November, along with her thoughts and messages for Torishima and the albatrosses. We will invest this donation as “Junko Momose Albatross Fund” and use it for future activities of the conservation of

albatrosses.

On February 7, a letter of appreciation for the “Junko Momose Albatross Fund” was presented to Ms. Momose in Tokyo by His Imperial Highness Crown Prince Akishino, the President of YIO.

(Excerpt from the March 2024 issue of Yamashina Choken News)



百瀬順子淳子さんのご自宅玄関の額絵。右はアホウドリ（吉田博・画）、左はシロエリオオハム（朝鮮大学校教授からの寄贈品）

Framed pictures at the entrance of Junko Momose’s home. On the right is the short-tailed albatross (painted by Hiroshi Yoshida), and on the left is the Pacific Loon (donated by a professor of Korea University)

●文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）の研究成果発表会を開催しました

2月7日、東京大学農学部中島ホールにおいて、文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）による「鳥の学問

はじめに浅井芝樹 研究員が3年間の成果報告と、令和6～8年度の計画から次年度分について説明を行いました。次に、澤祐介 研究員が「鳥学の発展を支える捕獲技術の収集～安全かつ効率的な捕獲調査の普及を目指して～」と題して、鳥の捕獲方法について実際の動画を交えて解説を行いました。最後に、山階鳥研の資料データや標本を使って研究を行った名古屋大学大学院環境学研究科の明田卓巳さんが、「羽ばたき運動の骨格形態指標の模索－鳥類の羽ばたき運動はいつ始まったのか－」と題して、山階鳥研の資料データを使うようになったきっかけから研究の成果までを、実例とともに紹介しました。

活発な質疑応答の後、6名の総括班からご意見をいただき、山階鳥研の継続した取り組みを評価いただき、今後へのアイデアや既存の施設・設備へのアドバイス、各機関との連携の必要性などが話題にあがりました。総合討論では、山階鳥研と社会とのつながり、おもしろい研究とは何か、金銭的な問題点など活発な議論が行われました。この発表会には総裁の秋篠宮皇嗣殿下が臨席されました。

（山階鳥研NEWS 2024年5月号より）

Presentation of researches funded by Grant-in-Aid for Scientific Research (Specially Designated Research Promotion) from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology

On February 7, the final year of the research project on “Expansion, Management, and Publication of Materials for Advancing the Study of Birds[TY1][広 山2]” funded by a Grant-in-Aid for Scientific Research from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) was held at Nakajima Touichiro Memorial Hall, Faculty of Agriculture, the University of Tokyo.

First, YIO researcher Shigeki Asai reported the results of the three-year project and explained the plan for the next year from FY2024 to 2026. Next, YIO researcher Yusuke Sawa gave a talk on bird capture methods with videos under the title of “Collection of capture techniques to support the development of bird studies - Aiming at the dissemination of safe and efficient capture surveys. Finally, Mr. Takumi Akeda of the Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, who conducted research using data

and specimens from YIO, gave a presentation entitled “The Search for Skeletal Morphometric Indicators of Wingstroke Movements: When Did Wingstroke Movements evolve?” He introduced his research, from the reasons for the use of data from specimens of YIO and the results of his study, along with examples.

After a lively question-and-answer session, the six members of the supervising team of the project gave their opinions, recognizing YIO’s ongoing efforts and discussed topics such as ideas for the future, advice for existing facilities and equipment, and the need for collaboration with other institutions. During the general discussion, there was lively exchanges on the connection between the YIO and society, what constitutes interesting research, and financial issues. The president of the institute, His Imperial Highness Crown Prince Akishino, attended the presentation.

(Excerpt from May 2024 issue of Yamashina Choken News)



当日会場の様子
On the day of the event

Ⅲ 事業内容

III-1

事業報告 要約

【公益目的事業】

I 一般会計による事業	研究責任者／担当者
1 アホウドリの人為的コロニー計画に関する研究	富田直樹
2 アホウドリ保護支援事業	富田直樹
3 皇居調査－吹上御苑を中心とした皇居内鳥類相を明らかにする	浅井芝樹、小林さやか、岩見恭子、齋藤武馬、黒田清子
4 普及・広報事業 (1) PR誌刊行事業、webサイト編集事業 (2) 講習会等事業 (3) 顕彰事業	平岡 考
5 山階武彦助成事業（対象6名）	事務局
II 文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）による研究事業	研究責任者
事業名：鳥の学問を発展させる資料の拡充・管理・公開に関する研究事業 0班：総括班 1班：拡充班 2班：管理班 3班：公開班	0班：小川博（所長） 1班：水田 拓 2班：鶴見みや古 3班：小川博（所長）
III 科学研究費補助金（除 特定奨励費）による研究事業	研究代表者／分担者
1 「安定同位体比による希少猛禽類の歴史的な食性復元・シカ残滓がもたらす個体群への影響」－基盤研究C（基金）、分担事業「サンプル収集、安定同位体比分析、データ解析」	代表者 岩見恭子 分担者 富田直樹
2 「失われた標本の価値を回復する研究－山階芳麿コレクション」－基盤研究C（基金）	代表者 小林さやか
3 「希少種カリガネの越冬生態が個体群動態に及ぼす影響に関する研究」－基盤研究C（基金）	代表者 澤 祐介
4 「隠蔽種が明らかとなった特別天然記念物アホウドリの生殖隔離に関連する行動学的研究」－基盤研究C（基金）	代表者 富田直樹
5 「適応放散のメカニズムを解明する－分散力の進化的変化に注目して」－基盤研究B（補助金）	代表者 山崎剛史
6 「鳥類標本の羽から探る生態と種分化」－基盤研究B（補助金）、分担事業「分析資料収集、野外調査」	代表者 武山智博（岡山理科大学准教授） 分担者 岩見恭子、富田直樹、水田 拓
7 「鳥類における化学防御の時空間ダイナミクスとその進化の解明」－基盤研究B（補助金）、分担事業「分析資料収集、野外調査」	代表者 吉川徹朗（大阪公立大学准教授） 分担者 岩見恭子、齋藤武馬
8 「海鳥類を利用した日本周辺の水銀暴露ホットスポット海域の解明」－基盤研究B（補助金）、分担事業「野外調査」	代表者 新妻靖章（名城大学農学部教授） 分担者 富田直樹
9 「野鳥行動解析のためのマルチモーダル生態環境理解・解析技術の構築」－基盤研究A（補助金）、分担事業「野外研究」	代表者 中臺一博（東京工業大学工学院教授） 分担者 森本 元

10 「足元にある未知生態系：コケ類の生態系機能と適応進化を動物との相互関係から読み解く」－基盤B（補助金）、分担事業「野外研究」	代表者 今田弓女（愛媛大学理工学研究科助教） 分担者 森本 元
11 「道路上の構造物は、意図せぬうちに鳥類にどれくらいの営巣場所を提供しているのか？」－基盤研究C（基金）、分担事業「野外調査、行動解析」	代表者 三上 修（北海道教育大学教授） 分担者 森本 元
IV 環境省・農林省等による事業	責任者
1 国際水産資源動態等調査解析事業「日本周辺で繁殖するアホウドリ類の分布回遊経路の解明」	富田直樹
V 民間助成金・その他による事業	責任者
1 キャノン財団研究助成プログラム「鳥類学と航空工学の協同による飛翔の新たな理解と応用」	責任者 岩見恭子、富田直樹
2 公益財団法人JAC環境動物保護財団「ヤンバルクイナ保全のための生態研究」	責任者 尾崎清明
3 公益信託サントリー世界愛鳥基金活動助成「絶滅危惧種アホウドリの保全及び学術研究のための普及啓発」	責任者 澤祐介
4 韓国環境生態研究所「鳥インフルエンザ感染経路解明のための渡り性水鳥追跡」	責任者 澤祐介
5 米国魚類野生生物局「Endangered species – Short-tailed Albatross estimates」	責任者 富田直樹
6 公益財団法人中辻創智社「アマミヤマシギの食性解析に基づく生息環境の包括的理解と保全策への活用」	責任者 水田拓
VI 保全研究室 受託・請負事業	責任者
受託事業2件（環境省1件、東京都1件）、請負事業7件（環境省関連6件、国立大学法人0件、民間1件） 合計9件（詳細別紙）	水田 拓

【収益事業】	
不動産賃貸事業（東京都渋谷区南平台町に所有するマンション3室の賃貸）	事務局

III-2

事業報告 事業別概要

【公益目的事業】

1. 一般会計による事業

1. アホウドリの人為的コロニー計画に関する研究（継続）

責任者：富田直樹（研究員）

事業費：170千円

伊豆諸島鳥島の繁殖地や繁殖期以外の利用海域に飛来するアホウドリにアルゴスGPS発信機を装着して周年の分布や移動経路を解明するための発信機の通信料を支出した。他に環境省保護増殖事業、国際水産資源動態等調査解析事業、科学研究費補助金等で、伊豆諸島鳥島において、令和6（2024）年2月から3月にかけて22日間のアホウドリ新コロニー調査を行った。定点観察の結果、アホウドリの雛587羽（2023年3月：537羽）が確認された。この結果、今年度の鳥島総雛数は1,173羽（同1,088羽）で前年比7.8%（同8.9%）の増加となった。新コロニーではアホウドリの同時着地数が1,129羽（同1,043羽）を記録した。これらの結果から、アホウドリの鳥島推定個体群は概ね8,600羽以上となり、順調に増加していることが確認された。

2. アホウドリ保護支援資金

責任者：富田直樹（研究員）

事業費：262千円

アホウドリの周年の分布や移動経路を解明するため、アルゴスGPS発信機の通信料の他、聶島のモニタリング調査で使用するプレハブ小屋の修理材料費やアホウドリマンスリーサポーターの広報活動費等で支出した。

3. 皇居調査-吹上御苑を中心とした皇居内鳥類相を明らかにする

担当者：齋藤武馬（研究員）、黒田清子（フェロー）、小林さやか（研究員、以下同）、浅井芝樹、岩見恭子

事業費170千円

皇居内の鳥類相を調べるため、月1回の調査日を設け、9:00から12:00の間に約4.3kmのコースを3人の調査員で歩き、確認された鳥種を個体数とともに記録するセンサス調査を実施した。実施日は、4/4、5/9、6/6、7/4、8/1、9/5、10/3、11/10、12/5、1/10、2/9、3/5であった。

同様の目的で、標識調査を5月23～24日と10月23～24日の2回実施した。

4. 普及・広報事業 責任者 棚橋伸（事務局長）

事業費総額6,105千円

(1) PR誌刊行・ウェブサイト編集事業 事業費4,932千円

(1-1) PR誌

広報紙「山階鳥研NEWS」を5、7、9、11、1、3月に刊行した。各号は3,000部印刷した。NEWSの目次をウェブサイトの「刊行物」ページに掲載し、個別の記事や情報を転載している（次項目参照）。

(1-2) ウェブサイト

ウェブサイトについて、令和5年度は、随時行った「イベント情報」の更新と結果報告、論文の発行や人事異動・組織再編に伴うお知らせ、事業案内、助成事業とレポート、FAQ/Q&Aなどの更新を行った。さらにプライバシーポリシーを公開した。また、「山階鳥研NEWS」から

- ・ 絶滅危惧種のガン類の渡り調査を行っています
- ・ 皇居と赤坂御用地でオオタカとフクロウの繁殖が確認されました
- ・ 80年前の手紙から紐解くハワイ・ビショップ博物館との交流
- ・ 昆明・モンテリオール 生物多様性枠組について その1 背景／その2 検討過程／その3 主要

要素

- ・ アホウドリ伊豆諸島鳥島ヒナの数が初めて1,000羽超え、小笠原諸島聳島の新繁殖地で2羽のヒナが孵化
- ・ 所員エッセー 富士山における鳥類研究のこれまでと展開
- ・ 所員エッセー ネコに捕食されたベニアジサシに足環が付いていた
- ・ オーストラリアの足環が付いたベニアジサシがノラネコに捕食されました
- ・ アホウドリの保全活動と研究を継続するためのマンスリーサポーターを募集します
- ・ 所員エッセー ラジオ番組『朝の小鳥』を引き継いで
- ・ 音楽家・松平頼則と父頼孝ー茨城県立歴史館企画展「音楽家・松平頼則とその時代」開催によせてー
- ・ 所長年頭の挨拶
- ・ 野生生物保全のための移送に関する国際会議に参加して
などの記事をピックアップして掲載した。

(1-3) ブログ、SNS、YouTube 動画

「山階鳥研 広報ブログ」では、1年で34件の情報発信を行った。2015年秋に開始したSNSサービスのFacebook、Twitter (X) は引き続き発信を行い、年度末の時点でFacebookのファンは3,376人のファン、Twitter (X) のフォロワーは7,450人だった。

動画投稿サイトYouTubeに19本のコンテンツを新たに公開した。「公益財団法人山階鳥類研究所 Yamashina Institute for Ornithology」チャンネルを開設してあったが、トップページから必要なコンテンツにアクセスできるように整備した。内包するオリジナルコンテンツへはチャンネルからダイレクトにアクセスできるほか、ウェブサイト（アホウドリサポーターランディングページ）からのリンク、Twitter (X) またはFbの投稿からのリンク、鳥のサイNSTOCKの情報開示サイトからのリンクがある。チャンネル登録者数は2024年3月31日現在で1,110人、総視聴回数10,738、総再生時間1,836であった。

(1-4) 報道発表

下記4件のリリースを行った。

- ・ 5月22日 絶滅から復活した絶滅危惧種シジュウカラガンの渡り経路と繁殖地を初めて明らかにしました
- ・ 6月14日 アホウドリ2022-23年の繁殖期の繁殖状況について報道発表をしました。
- ・ 6月30日 沖縄で繁殖しオーストラリアとの間を渡りするベニアジサシ（絶滅危惧種）が、ノラネコに捕食されたことが確認されました。
- ・ 11月1日 アホウドリを絶滅の瀬戸際から救い出すために毎年の現地調査が不可欠です！ 保全活動とモニタリングを継続するためのマンスリーサポーターの募集を開始しました。

(2) 講習会等事業 事業費 617千円

(2-1) 所内見学会

所内見学会は、講堂で約1時間半、スライドと口頭説明で山階鳥類研究所について紹介するもので、従来、原則として第4金曜日の午前と午後に行ってきた。新型コロナウイルス感染症予防の観点から開催を見合わせてきたが、5月8日に同感染症が「5類感染症」に移行したのに伴い、6月より再開した。さらに、同感染症の流行以前におこなってきた、おもに環境保全や生物学関係の団体や学校教科の一環としての学生生徒の見学希望について、第4金曜日以外であっても日程その他の調整がつく範囲で限定的に対応することも再開した。これらの見学会の参加人数の上限を20名とした。令和5年度はこれらの見学会を合計14回行い、合計70名の参加者があった。個人のほか、団体として（一社）半導体産業人協会の参加があった。

(2-2) ジャパン・バード・フェスティバル

ジャパン・バード・フェスティバルは我孫子市、日本鳥類保護連盟、山階鳥類研究所、市民団体等で構成する実行委員会が我孫子市内を会場に実施するイベントである。令和5年度は11月4日と

5日に開催した。

過去3年度は、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、オンラインや会場を縮小しての開催であったが、令和5年度はコロナ前と同じ会場での開催となり、4年ぶりに、講堂で研究員が研究紹介をする「山階鳥研 見にレクチャー」を実施した。10タイトル、21講演。2日間でのべ496名の入場者があった。

鳥学講座は、山階鳥類研究所と我孫子市鳥の博物館の共催により、鳥類学の第一線で活躍する研究者が分かりやすく研究を紹介するもので、ジャパン・バード・フェスティバルの参加行事として開催している。今回の講座は11月4日（土）に「小笠原諸島の海鳥は、増えたり、減ったり、海を越えたり、越えなかったり」と題して我孫子市生涯学習センターアピスタ1Fホールで開催した。参加者は、1階の会場に150名、2階のライブビューイング会場に48名、合計198名であった。

(2-3) 鳥のサイエンストーク

山階鳥類研究所職員または我孫子市鳥の博物館の学芸員が研究の成果などについて、約30分のオンラインレクチャーでわかりやすく紹介する。従来対面形式で開催してきたが、新型コロナウイルス感染症予防の観点からオンライン配信の形で実施したところ好評であったため、継続している。

9月と11月を除いて毎月第3土曜日に開催する。回数は10回で、タイトル、日付と演者ならびに、当日の最大視聴者数、見逃し配信の期間と再生数は次のとおり。見逃し配信は通常2週間行うが、演者の希望によって行わない場合や1ヶ月行った場合がある。演者の氏名に*を付したのは我孫子市鳥の博物館の学芸員、無印は山階鳥類研究所の研究員または専門員である。

- ・ 白い羽色異常はどういう仕組みで起きる？（浅井芝樹、4月15日、59名、2週間、610回）
- ・ ガン類はどんな環境を使っているか～発信器でわかること～（澤祐介、5月20日、47名、2週間、506回）
- ・ 宮内庁埼玉鴨場の50年間のカモ類捕獲数推移（仲村昇、6月17日、46名、2週間、390回）
- ・ ゴジュウカラってどんな鳥？（油田照秋、7月15日、68名、2週間、644回）
- ・ 実は2種いたアホウドリ、名前はどうか？（山崎剛史、8月19日、86名、2週間、931回）
- ・ ジシギの尾羽を調べてみたら（小田谷嘉弥*、10月21日、130名、2週間、910回）
- ・ アマミヤマシギはどれくらい生きるか、どれくらい移動するか（水田拓、12月16日、62名、2週間、592回）
- ・ 北西太平洋の美しい海鳥アホウドリの歴史と未来（平岡考、1月20日、62名、1ヶ月、1317回）
- ・ 鳥の学術標本作り・中級編2（岩見恭子、2月17日、119名、なし）
- ・ 独立種となったオオムシクイは北海道のどこで繁殖するのか？（齋藤武馬、3月16日、67名、2週間、854回）

(2-4) 問い合わせ対応

山階鳥類研究所では、一般、行政、警察、マスメディア等から電話、電子メール、郵送等で多数の問い合わせを受ける。令和5年度は、新型コロナウイルス感染症が5月8日から「5類感染症」となったが、引き続きウェブサイトには、電話での問い合わせに対しては極力電子メールに切り替えていただくようお願いする旨記載した。ただし質問対応ボランティアによる対応は、6月以降、2019年度以前の日数に復旧した。この結果、一旦受けた後に別の部署に回したものも含め、331件の問い合わせに対応した。これは所内の別の部署で直接受けた問い合わせ件数を含まない。内訳を「令和5年度広報対応質問内訳」表（次ページ）に示した。

(3) 顕彰事業 事業費 556千円

山階芳廬賞は、我が国の鳥学研究の発展と鳥類の保護活動に寄与された個人あるいは団体を顕彰する目的で設けられた賞で、現在は隔年に贈呈している。自薦または他薦による公募と選考委員会内部からの推薦との両方から受賞者を決定する。応募締切を令和5年11月30日とした応募要領をウェブサイトに掲載し、「山階鳥研NEWS」においては11月号で告知した。共催の朝日新聞紙上でも告知が掲載された。今回の公募では推薦がなかったため、選考委員会内部からの推薦をもとに、令和5年12月20日にはオンラインで、令和6年2月20日にはオンラインと対面のハイブリッド形式で選考委員会を開催し選考した。その結果、第23回山階芳廬賞を内藤靖彦 国立極地研究所・総合研究大学院大学名誉教授に贈呈することを決定した。

令和5年度広報対応質問内訳（分野別、科別、質問者別、通信手段別）

		件数	内訳(%)			件数	内訳(%)	
分野	生態	99	30%	ホオジロ	5	2%		
	識別同定	96	29%	メジロ	5	2%		
	救護／保護	18	5%	ウグイス	4	1%		
	形態・構造・体色・器官	15	5%	エナガ	4	1%		
	鳥害	10	3%	シギ	4	1%		
	監修	4	1%	ムクドリ	4	1%		
	標識	3	1%	ウ	3	1%		
	保全	3	1%	チドリ	3	1%		
	名称・文化・歴史・伝説 (伝承)	3	1%	ツル	3	1%		
	鑑定	2	1%	ミズナギドリ	3	1%		
	分類	2	1%	インコ	2	1%		
	学名・英名・和名	1	0%	カッコウ	2	1%		
	飼育	1	0%	チメドリ	2	1%		
	鳥インフルエンザ	1	0%	ペンギン	2	1%		
	鳥の生物学一般	1	0%	渡り鳥(全般)	2	1%		
	標本	1	0%	ウミツバメ	1	0%		
	その他	71	21%	キツツキ	1	0%		
	合計	331	100%	コウノトリ	1	0%		
	対象分類群(科)	カモ	24	7%	セキレイ	1	0%	
		ヒタキ	21	6%	ヒヨドリ	1	0%	
ハト		17	5%	モズ	1	0%		
タカ		14	4%	その他	83	25%		
キジ		13	4%	(計)	331	100%		
ツバメ		13	4%	質問者	個人	216	65%	
アホウドリ		12	4%	報道出版関係(うちNHK 関係32件)	88	27%		
カラス		9	3%	一般事業会社、諸団体	15	5%		
サギ		9	3%	官公庁・警察	8	2%		
鳥類全般／鳥一般		9	3%	教育関係(学校、博物館、 動物園など)	4	1%		
アトリ	8	2%	合計	331	100%			
カワセミ	8	2%	通信手段	電話	134	42%		
カモメ	7	2%	e-mail/FAX	188	59%			
スズメ	7	2%	手紙・葉書	8	3%			
クイナ	6	2%	来所面談	1	0%			
シジュウカラ	6	2%	合計	331	100%			
ハヤブサ	6	2%						
フクロウ	5	2%						

5. 助成事業 事業費 1,604千円

山階武彦助成として、令和5年度助成対象者6名に対し、計1,611千円の助成を行った。うち1名から未使用分として7,440円が返金されたので、事業費は1,604千円となった。

申請者氏名 所属	テーマ・目的(研究・発表・調査等の)	会議名・事業名・開催地・助成額
1 池内 俊雄 イケウチ トシオ 日本雁を保護する会	テーマ：日本のガン類の追跡プロジェクト(発表) 目的：近年日本でも急速に進んでいるガン類の標識・生態調査の結果を共同研究者と発表し、東アジアにおける日本のガン類の重要性を伝える。	会議名：20th Meeting of the Goose Specialist Group 開催地：モンゴル ウランバートル 助成額：176,000円－7,440円(未使用分返金)=168,560円
2 小田谷 嘉弥 オダヤ ヨシヤ 我孫子市鳥の博物館 学芸員	テーマ及び目的：標識調査講習会での指導およびチュウジシギの野外調査	事業名：モンゴル Khurkh Bird Ringing Stationにおける鳥類標識調査 調査地：モンゴル Khurkh Bird Ringing Station 助成額：235,000円
3 風間 麻未 カザマ マミ うみねこんぶプロジェクト 代表理事 (NPO法人格取得準備中)	テーマ：北海道枝幸町のウミネココロニーに侵入するドブネズミの防除策の検討 目的：現地に長期滞在し、ネズミの侵入経路と時期の特定、および防除作業を行うため	調査名：ウミネココロニーに侵入するドブネズミの侵入経路・時期の特定及び侵入防止策の検討 調査地：北海道枝幸郡枝幸町 助成額：300,000円
4 田中 博人 タナカ ヒロト 東京工業大学工学 院 機械系 准教授	テーマ：T. Fujii, J. Dang, H. Tanaka “Hummingbird-Bat Hybrid Wing by 3-D Printing” 目的：発表が目的。ハチドリホバリング中の翼変形を再現する人口の柔軟翼の3Dプリントによる実現である。その設計には山階鳥研(山崎剛史博士)との共同研究であるチャムネエメラルドハチドリの風切羽の曲げ剛性計測の結果が使われている。本成果は、しなやかな風切羽の翼構造としての機能の理解や、鳥標本の工学・社会応用につながる。こうした研究は生物多様性を基盤としているため、研究と応用の発展は野生鳥獣の保護への理解と促進につながる。	会議名：2023 IEEE International Conference on Robotics and Automation(ICRA 2023) 開催地：英国 ロンドン 助成額：300,000円
5 檜橋 真理環 ナラハシ マリア 九州大学大学院 地球社会統合科学府	テーマ：繁殖期におけるミャンマーでの鳥類の捕獲及びDNAサンプルの採取調査 目的：国立科学博物館とミャンマー森林研究所の共同プロジェクトによる計6回の鳥類捕獲調査から得られたDNAを分析し、DNAバーコードを登録してミャンマーの鳥類の遺伝的な特徴を明らかにしてきた。すでに、隠蔽種候補や同所的にハプロタイプが異なる種を見つけているが、これまでの調査は全て非繁殖期の調査であった。繁殖期に現地調査を行い、繁殖集団のサンプリングを行うことで、繁殖集団の遺伝的特徴を明らかにし、保護すべき繁殖集団の特定を行う。	調査名：ミャンマーでの鳥類の捕獲及びDNAサンプルの採取調査 調査地：ミャンマー 助成額：300,000円
6 渡邊 拓巳 ワタナベ タクミ 東京大学大学院 理学系研究科 地球惑星科学専攻	テーマ：Development and evolution of the jaw joint and middle ear structures in the dinosaur-bird lineage 目的：恐竜-鳥類系統の形態進化に関する研究成果発表のため(ポスターセッション)	会議名：International Congress of Vertebrate Morphology 2023 開催地：オーストラリア ケアンズ 助成額：300,000円

事業費計：1,603,560円(予算1,611,000円)

II. 文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）による研究事業

研究事業名：鳥の学問を発展させる資料の拡充・管理・公開に関する研究事業

（採択年度 令和3～5年度3年間 各年度事業費56,000千円）

目的：

当研究所には、鳥に関わるあらゆる学問を支える基盤として、国内はもとより世界的にも第一級の重要性を持つ資料を保有している。このため当研究所は、鳥の学問を探究する研究者にとって欠くことのできない研究の拠点となってきた。これらの資料を拡充しながら管理維持し、公開していくことは社会的使命と考え、その実現のために次の目的を設定した。

① 資料の拡充

所蔵標本の地域的・年代的偏りを是正するためさらなる収集を行う。また、標本作製により副次的に得られるデータ収集を積極的に行う。

② 資料の管理

資料類が将来にわたって受け継がれるよう、適切に管理保管する。

③ 資料の公開

当研究所が保有する資料の一層の活用の促進、当研究所が蓄積してきた知識・技術を社会に還元する。

実施体制：

- (0) 総括班 責任者 小川博（所長）
- (1) 拡充班 責任者 水田拓（自然誌・保全研究ディレクター）
- (2) 管理班 責任者 鶴見みや古（文化資料ディレクター）
- (3) 公開班 責任者 小川博（所長）

令和5年度実施状況：

(0) 総括班

令和5年度意見交換会の開催

開催日：令和5年10月6日（金）オンライン開催

出席者：特任研究員、総括班メンバー、客員研究員、フェロー、外部有識者、総裁、職員等

令和5年度研究成果発表会の開催

開催日：令和6年2月7日（水）

会場：東京大学農学部フードサイエンス棟 中島董一郎記念ホール

出席者：公官庁幹部、総括班メンバー、特任研究員、客員研究員、フェロー、総裁、顧問、理事・監事、評議員、職員等

(1) 拡充班

資料の拡充：標本2,097点、組織サンプル558個体分、DNA溶液82個体分、図書資料（単行本・雑誌）1,276冊を入手した。このほか、John GouldのThe Birds of Australia, 1848および1869全8冊の復刻版の寄贈を受けた。捕獲技術の記録として、小笠原諸島における海鳥捕獲方法、かすみ網の網場整備方法、くくり罠での捕獲方法等を記録した。

データの拡充：DNAバーコードデータ70点、安定同位体比データ50点を作成した。

(2) 管理班

資料の保守業務：標本庫・書庫の適切な環境管理を実施した。図書資料175点の修理を行うと共に、破損・劣化が見られた2,555点を適切な管理のために中性紙保存箱や封筒に保存した。

資料の整理業務：標本728点を標本収蔵庫に配架し、液浸標本848点を専用保管庫に配架した。組織サンプル558個体分とDNA82個体分、既存図書296点について整理を行い、単行本・雑誌1,276冊を書庫に配架した。雑誌については93冊を合本製本した。重複図書396冊を処理した。写真、書類などの鳥学資料5,059点について資料管理データベースへ登録し、373点の撮影とリスト化を行った。また、内田清之助鳥学資料1,698点へ登録番号を付与し、廣居忠量写真コレクション6,280点についてデジタル化およびリスト化を行ってアーカイバル容器等へ収納した。

利用者対応：標本閲覧者は145件（のべ202人）、標本貸出は2件（のべ72点）、標本撮影1件（3点）

を受け入れた。図書閲覧者は17件(のべ17人)を受け入れた。組織サンプルは2件について提供した。博物館等2館に写真等6点、鷹狩り研究者に鷹狩り関連画18点を提供した。文献複写依頼24件(132文献)を受け付けた。標本データベースデータ 60,865点について研究利用申請1件を許諾した。

(3) 公開班

資料の情報公開：『標本データベース』を運営し、3,351個体の標本データを追加した。閲覧者数はのべ667,375人であった。X線CT画像データ、電子顕微鏡画像データ、紫外線画像データはそれぞれ207件、83件、53件のデータをアップロードした。カモ目・キジ目の新しい種和名を整理した報文は『山階鳥類学雑誌』に掲載された。また、ヨタカ類については印刷中である。提供可能な組織サンプル14,451点のリストをアップロードした。DNAバーコードデータ70点のデータを配信した。『蔵書検索システム』を運営し、1,548件のデータを追加公開した。閲覧者数はのべ300人であった。

その他の情報公開：『山階鳥類学雑誌』第55巻1号、2号を発行した。J-Stageで公開された全文PDFへのアクセス数は22,788件であった。一般向けセミナーをオンラインで9回開催し、同時アクセスの最大数は9回合計で616であった。一部については見逃し配信も行い、当日分と見逃し配信分を合わせた視聴回数は6,157回であった。11月にはジャパンボードフェスティバルで、イベントの一部としてセミナーを開催した。一般からの質問331件に対応した。

他機関との連携・人材育成：2024年3月に山階鳥類研究所で野外調査従事者を育成するための講習会を初心者向けで開催し、20人が受講した。2023年11月にガンカモ類等大型水鳥類の捕獲技術講習会を秋田県大潟村で開催し、5人が受講した。福島県で5月～8月に陸鳥を対象とした野外調査実習を12回開催し、のべ25人が受講した。海鳥を対象とした野外調査実習を、5月に青森県八戸市のウミネコ繁殖地で2回、2024年2～3月に伊豆諸島鳥島で1回開催し、それぞれのべ6人と2人が受講した。福島県の野外調査実習で得られたデータと青森県のウミネコ繁殖地の野外調査実習で得られたデータはモニタリングデータとしての価値があるため、山階鳥類学雑誌へ3年分を取りまとめた報文を投稿し印刷中である。標本作製講習会については、2023年4月に長崎大学水産学部の学生1名をインターンで受け入れて実習を行い、10月に早稲田大学人間科学部で講習会を実施し、2名が受講、2024年3月に神奈川県立生命の星・地球博物館で講習会を実施し、16人が受講した。我孫子市鳥の博物館の標本データを『標本データベース』の運営管理と一貫して維持管理した。

III. 科学研究費補助金(除 特定奨励費)による研究事業

1 「安定同位体比による希少猛禽類の歴史的な食性復元・シカ残滓がもたらす個体群への影響」

- ・ 基盤研究 C (一般) 令和3年度～令和5年度
- ・ 研究代表者：岩見恭子(研究員)
- ・ 研究分担者：富田直樹(研究員)
- ・ 分担事業：研究統括、サンプル収集、安定同位体比分析、データ解析
- ・ 令和5年度分担金 直接経費：940千円(岩見)、440千円(富田)

本研究課題は、北海道における希少猛禽類の保全・管理の施策に寄与できるように、希少猛禽類のエゾシカ残滓への依存性や利用個体の特性を定量的に評価することを目的とする。長期にわたり蓄積された博物館標本を用いて希少猛禽類の歴史的な食性を安定同位体比によって復元し、人為的な餌への依存性と個体群動態との関係を解明する。令和5(2023)年度は、これまで安定同位体比データが不足していた1930年から1950年代に採集されたワシ類及び希少猛禽類の標本(仮剥製や展示用標本など)から羽毛を採取し、分析を行った。展示用標本は採集年などの情報がないものが多いため、炭素年代測定によって補うことに成功した。

2 「失われた標本の価値を回復する研究—山階芳麿コレクション」

- ・ 基盤研究 C (基金) 令和3年度～令和6年度
- ・ 代表者：小林さやか(研究員)
- ・ 令和5年度 直接経費：408千円

本研究では、古い標本の歴史的背景を調査する過程で標本に関連する資料や文献を見出して、個々の標本に「正しい情報」を与え、情報が不明確とされてきた古い標本と、その証拠となる資料の双方の研究資源としての価値を向上させることを目的としている。古い標本は、長期間の保存の過程で、本来保有していたはずの「いつ」、「どこで」採集されたかという情報が、ラベルの誤読、管理

者の変更で伝達されなかったなどの理由で、不明確な場合がある。本研究では、山階芳麿コレクション約3万点について、採集旅行ごとに標本群を構築し、構築した標本群ごとに歴史的背景を調査し、各標本がいつ、誰によって、どのような目的で採集されたものかを解明する。この結果、得られた情報は論文発表したり、「山階鳥類研究所標本データベース」に反映させることで、山階芳麿コレクションの価値を向上させ、自然科学に貢献することができる。

令和5年度は、昨年度入力した標本情報をもとに同じ採集や寄贈者ごとの標本群を構築し、各標本群の調査を進めた。

3 「希少種カリガネの越冬生態が個体群動態に及ぼす影響に関する研究」

- ・ 基盤研究 C（基金）令和4年度～令和6年度
- ・ 代表者：澤祐介（研究員）
- ・ 令和5年度 直接経費：1,300千円

カリガネはIUCNレッドリストでVUに指定され世界的に減少が続いているが、日本の越冬個体群は個体数が増加しており、その越冬数は2019年には東アジア地域個体群の4.5%を占めるなど、世界的にも重要な個体群である。さらに、越冬期の採食地における農地への依存の割合が高いなど他の個体群にはない特徴的な生態をもつ。本研究では、日本の個体群増加要因の検証に向け、農地環境における越冬生態の解明及び追跡による繁殖地の特定を目的とする。

令和5年度は、これまでに捕獲し発信器追跡を行っているカリガネ9羽について、継続して発信器追跡を行った。さらに食性解析のため、カリガネの糞をサンプリングした。

4 「隠蔽種が明らかとなった特別天然記念物アホウドリの生殖隔離に関連する行動学的研究」

- ・ 基盤研究 C（一般）令和3年度～令和5年度
- ・ 研究代表者：富田直樹（研究員）
- ・ 分担事業：研究統括、行動解析
- ・ 令和5年度 直接経費：40千円

本研究は、アホウドリの保全単位の再検討を目指して、繁殖開始や渡り時期のずれ、求愛行動などの生殖隔離を引き起こす生態的要因を個体レベルで検証する。令和5（2023）年度は、鳥島で同所的に繁殖する鳥島タイプと尖閣タイプのアホウドリが非繁殖期に利用する海域が異なる傾向にあることを明らかにし、成果は国際的学術誌Endangered Species Research(オンライン)に公開された。

5 「適応放散のメカニズムを解明する—分散力の進化的変化に注目して」

- ・ 基盤研究 B（補助金）令和4年度～令和7年度
- ・ 代表者：山崎剛史（研究員）
- ・ 令和5年度 直接経費：1,700千円

令和5年度には、高知工科大学小林豊教授とともに、分散力の進化的変化を仮定することで、既存理論よりうまく適応放散を説明する新理論を報告する論文を投稿した。また、東京農業大学米澤隆弘准教授、東京大学杉田典正研究員とともに、この新理論に従う進化が実際に起きた事例の可能性のある八重山諸島のオサハシブトガラスについて、ゲノム解析を進めた。また、東京大学の荻原直道教授とともに、分散力に強い関連性を持つと推測される鳥類の飛翔力を、翼の形態的特徴から推測する手法の開発を進めた。

6 「鳥類標本の羽から探る生態と種分化」

- ・ 基盤研究 B（一般）令和3年度～令和7年度
- ・ 研究代表者：武山智博 岡山理科大学 准教授
- ・ 研究分担者：岩見恭子（研究員）・富田直樹（研究員）・水田拓（自然誌・保全研究ディレクター）
- ・ 分担事業：分析資料収集・野外調査
- ・ 令和5年度 直接経費：550千円（岩見）、100千円（富田）、210千円（水田）

博物館等に収蔵されている生物標本は、分類学や過去の生息地の解析等に不可欠であるが、学術的な利用目的は限られている。近年、新たな標本の活用方法として、遺伝的多様性の復元などが模索されているが、標本の損傷を最小限に留める制約上、応用範囲は限定的である。令和5（2023）年度は、鳥類標本の学術的価値を維持した羽試料の採取方法の確立を目的として、小中型のスズメ

目標本の部位ごとの羽試料の採取方法の検討および安定同位体比分析を進め、これらの成果を日本鳥学会大会で発表した。また、安定同位体比分析により絶滅危惧種の食性を把握し、その保全に資するために、琉球列島の絶滅危惧種について羽毛および血液サンプルを採取した。

7 「鳥類における化学防御の時空間ダイナミクスとその進化の解明」

- ・ 基盤研究 B (一般) 令和5年度～令和9年度
- ・ 研究代表者：大阪公立大学 吉川徹朗 准教授
- ・ 研究分担者：岩見恭子 (研究員)・齋藤武馬 (研究員)
- ・ 分担事業：分析資料収集・野外調査
- ・ 令和5年度 直接経費：570千円 (岩見)、340千円 (齋藤)

シキミなどの有毒植物の種子を食べ貯食散布するシジュウカラ科の鳥類ヤマガラが、これらの植物の毒を羽毛などの体組織に蓄積している。令和5年度は、ヤマガラの植物毒蓄積の生態と進化を、野外調査・標本調査・化学分析・室内実験を融合したアプローチで解明するため、各地のヤマガラの死体標本から羽毛と血液サンプルを採取し、分析に使用した。また、捕獲調査を行い、野外個体の羽毛と血液の採取も併せて行った。

8 「海鳥類を利用した日本周辺の水銀暴露ホットスポット海域の解明」

- ・ 基盤研究 B (一般) 令和2年度～令和5年度
- ・ 研究代表者：新妻靖章 名城大学農学部 教授
- ・ 研究分担者：富田直樹 (研究員)
- ・ 分担事業：野外調査
- ・ 令和5年度 直接経費：250千円

本研究では、ウミネコを研究対象種とし、日本沿岸の複数のウミネコ繁殖地から親鳥の血液、羽根と餌生物を採集し、水銀汚染の影響を受けている範囲と程度を明らかにする。次に、窒素安定同位体比および水銀濃度の測定とバイオリギングの手法による移動軌跡の計測を組み合わせ、日本周辺海域で水銀汚染のホットスポットを特定する手法を開発する。令和5 (2023) 年度は、国内で繁殖するウミネコの水銀濃度測定のため、血液と羽毛の組織採取を行った。

9 「野鳥行動解析のためのマルチモーダル生態環境理解・解析技術の構築」

- ・ 基盤研究 A (補助金) 令和2年度～令和4年度、令和5年度延長
- ・ 代表者：中臺一博 東京工業大学 工学院 教授
- ・ 分担者：森本元 (研究員)
- ・ 分担事業：野外研究
- ・ 令和5年度 直接経費 (令和3年度繰越)：550千円

本研究課題は、ロボット分野で研究開発されてきた「ロボット聴覚技術」を発展させ、視覚処理技術や機械学習技術と統合、生態学・環境学に適用可能な「マルチモーダル環境理解技術」を確立し、野生動物の観測データを質・量ともに数百倍に引き上げる次世代野生動物観測技術の開発を行う分野横断的なプロジェクトである。本研究課題は、東京工業大学の中臺教授を代表者とし、山階鳥研の森本元研究員を含む5名の分担者によって構成される研究体制で3年間 (令和2～令和4年度) 実施される。森本研究員は分担者として、この新技术を応用した野外調査研究を担う。主に富士山地域において、都市鳥や山地鳥類の生態モニタリングを、専用に開発された録音機器を用いて行った。研究用に開発された新型録音機器の様々な条件による試行的運用を引き続き実施した。新型コロナウイルスの影響および (社会情勢変化に伴う半導体不足等の影響も受けた) 機器開発の遅延により、令和5年度は令和4年度の繰り越しにより延長実施となり、学会発表・報告会での講演などが実施された。

10 「足元にある未知生態系：コケ類の生態系機能と適応進化を動物との相互作用から読み解く」

- ・ 基盤研究 (B) (一般) 令和3年度～令和6年度
- ・ 研究代表者：今田弓女 京都大学 助教
- ・ 研究分担者：森本元 (研究員)
- ・ 分担事業：野外研究

- ・ 令和5年度分担金 直接経費：150千円
 森林生態系におけるコケの役割はほとんど未知であるが、さまざまな節足動物や鳥類と深く関わっており、コケならではの生態系を形成していることが近年、分かってきた。そこで本研究は、コケが多様な動物といかに相互作用しつつ適応進化してきたかにせまるプロジェクトである。本研究課題は、愛媛大学の今田助教を代表者とし、山階鳥研の森本元研究員を含む4名の分担者によって構成される研究体制で4年間（令和3～令和6年度）実施される。森本研究員は分担者として、長年の山地鳥類生態研究を活かし鳥類との関係を探る。本年度は代表者の鳥類研究の補助および代表者が指導する学生らと議論を重ねるとともに、苔を利用した営巣に関する野外調査を実施した。また、共著論文の作成・投稿を実施した。

11 「道路上の構造物は、意図せぬうちに鳥類にどれくらいの営巣場所を提供しているのか？」

- ・ 基盤研究 C（基金）令和3年度～令和5年度
- ・ 代表者：三上修 北海道教育大学 教育学部 教授
- ・ 分担者：森本元（研究員）
- ・ 分担事業：野外調査、行動解析
- ・ 令和5年度 直接経費：50千円
 本研究課題は、北海道教育大の三上修教授を代表者、石川県立大の上野裕介准教授と山階鳥研の森本元研究員を分担者とした研究体制で3年間（令和3～令和5年度）実施された。本研究は電柱といった道路沿いの人口構造物の存在が、鳥類へどのような生息環境を提供しているのかを総合的に評価する研究課題である。電柱や道路標識といったロードサイドの様々な構造物は、日本の全国のあらゆる都市にも必ず存在する主要な構成要素の一つであり、このような環境を都市鳥は巧みに利用している。その実態を明らかにすべく、計画3年目である今年度は、道路沿線における野外調査を昨年度に引き続き実施するとともに、共同で関連研究のとりまとめを実施した。また、共著論文の作成・投稿も行った。

IV. 環境省・農林水産省による研究事業

1 国際水産資源動態等調査解析事業

- ・ 活動名：日本周辺で繁殖するアホウドリ類の分布回遊経路の解明
- ・ 責任者：富田直樹（研究員）
- ・ 事業期間：令和1（2019）年度から実施、申請・決定は1年単位
- ・ 令和5年度 補助金額：2,300千円
 混獲生物の資源評価における基礎的知見の収集、包括的アプローチとして繁殖場における繁殖状況調査を実施する。令和5（2023）年度は、鳥島で繁殖するクロアシアホウドリ6羽にGPSアルゴス発信機を装着し、移動経路や採餌海域を追跡中である。

V. 民間助成金・その他補助金等による研究事業

1 キヤノン研究助成 新産業を生む科学技術

- ・ 活動名：鳥類学と航空工学の協同による飛翔の新たな理解と応用
- ・ 責任者：岩見恭子・富田直樹（研究員）
- ・ 助成期間：令和4～令和6年度
- ・ 令和5年度助成額：3,275千円
 鳥類学と航空工学の研究者が共同で未知なる鳥のしくみや生存戦略を探求し、エネルギー効率や機動性といった飛行性能だけでなく耐故障性や低騒音といった課題を解決する新たな技術を創成するとともに、これまでにない新しいサービスの提供を目指す。そのために、バイオリソングによって取得する鳥の飛行データを参照しながら、機構を内蔵した「動く剥製」を開発して、風洞実験を実施する。生きた鳥の飛行データと剥製の風洞実験で得られた空力・飛行特性から、鳥類学・航空工学双方の研究を新たな段階に推し進める。令和5（2023）年度はセンサーを内蔵した大型及び小型鳥類の剥製を用いて風洞実験を実施し、風速や迎え角を変えたときの揚力と抗力の時系列データを取得した。

2 公益財団法人JAC環境動物保護財団

- ・ 活動名：ヤンバルクイナ保全のための生態研究
- ・ 責任者：尾崎清明（副所長）
- ・ 助成期間：令和5年度（2023年度）
- ・ 令和5年度助成額：2,000千円

ヤンバルクイナの生態、特に繁殖生態を明らかにする目的で、電波発信機と自動撮影カメラによる調査を実施した。電波発信機では個体の生存期間、行動範囲や営巣行動等を追跡し、自動撮影カメラでは主に繁殖中の天敵による影響や卵の孵化率、雛の生存等をモニタリングした。その結果、今年度、新に飼育放鳥10個体と野生7個体を加えた。5番の営巣状況を自動撮影カメラでモニタリングし、飼育個体同士の野外での繁殖成功を初めて確認した。また、電波発信機で追跡し、死亡が確認できた10例のうち、死因はネコによる捕食がトップの3例確認された。これらの知見は環境省の保護増殖検討会に提供した。本研究で明らかになる生態はヤンバルクイナの保全、保護増殖事業に役立つものと期待される。

3 公益信託サントリー世界愛鳥基金（鳥類保護団体への活動助成部門）

- ・ 活動名：絶滅危惧種アホウドリの保全及び学術研究のための普及啓発活動
- ・ 責任者：澤祐介（研究員）
- ・ 助成期間：令和5年度（2023年度）
- ・ 令和5年度助成額：2,300千円

一時は絶滅が宣言されるまで減少したアホウドリは、伊豆諸島鳥島や小笠原諸島鴛島での懸命な保全活動の結果、現在は7,000羽以上に回復した。さらに学術研究でも、鳥島と尖閣諸島のアホウドリが分類学上異なる2つの集団であるなど、重要な発見をしてきた。本活動は、これらの成果を幅広い層へ発信し、アホウドリの保全活動、モニタリングを継続するための基盤を構築することを目的とした。アホウドリの保全活動への寄付をオンライン上で募るウェブサイトを構築し、クレジットカード決済の仕組みを導入した。

4 韓国環境生態研究所

- ・ 活動名：鳥インフルエンザ感染経路解明のための渡り性水鳥追跡
- ・ 責任者：澤祐介（研究員）
- ・ 助成期間：令和5年度（2023年度）
- ・ 令和5年度助成額：1,486千円

近年、高病原性鳥インフルエンザが世界各地で流行しており、日本を含む東アジアにおいても、その動態の解明と対策は喫緊の課題となっている。高病原性鳥インフルエンザの感染が懸念されるガンカモ類、ツル類などの渡り性水鳥を対象に、発信器追跡を行う。

令和5年度は、マガン20羽、ヒシクイ5羽、マナヅル1羽、ナベヅル1羽、マガモ13羽の合計40羽を追跡した。

5 米国魚類野生生物局（U. S. Fish and Wildlife Service）

- ・ 活動名：Endangered Species -Short-tailed Albatross estimates
- ・ 責任者：富田直樹（研究員）
- ・ 助成期間：令和5（2023）年度、申請・決定は1年単位
- ・ 令和5年度助成額：10,742千円

本研究は、アホウドリの保全状況の再検討のために必要な個体群動態の基礎データを得ることを目的として、伊豆諸島鳥島のアホウドリ繁殖地における抱卵期のつがい数をカウントした。令和5（2023）年11月に調査を行った結果、合計1,574つがいが確認された。

6 公益財団法人中辻創智社 2023年度研究費助成

- ・ 活動名：アマミヤマシギの食性解析に基づく生息環境の包括的理解と保全策への活用
- ・ 責任者：水田拓（自然誌・保全研究ディレクター）
- ・ 助成期間：令和5年度（2023年度）
- ・ 令和5年度助成額：1,000千円

琉球列島の固有種であるアマミヤマシギは、森林伐採や外来生物の影響により絶滅が危惧されている鳥類であり、生態学的知見に基づく保全策の検討が急務である。本種は従来夜行性と考えられており、生態調査は主に夜間に行われていたが、最近の研究により昼間にも活発に活動していることがわかってきている。したがって、本種が利用する環境を十全に理解するためには夜間の調査だけでは不十分で、昼間にどこにいるのかを把握する必要がある。しかし、昼間に本種を能動的に観察するのは困難で、これまで昼間の利用環境の情報は得られていなかった。本研究では、アマミヤマシギの餌生物を調べ、それら餌生物の生息環境が本種の利用環境であると考え、その把握を試みる。具体的には、胃内容物の分析とDNAメタバーコーディングによる食性解析を組み合わせる実施し、本種の食性とその季節変化を調べる。これらの情報を本種の保全策の立案に役立てることを目指す。

VI. 受託・請負事業

令和5年度の受託および請負事業は以下の通りである。

	発注者	受託・請負事業等の名称	金額(円)	備考
1	環境省自然環境局 生物多様性センター	令和5年度鳥類標識調査委託業務	38,525,000	受託随意契約
2	東京都小笠原支庁	令和5年度アホウドリ保全調査委託(単価契約)	5,037,120	受託競争入札
3	環境省	令和5年度シギ・チドリ類追跡業務	4,950,000	請負随意契約
4	環境省自然環境局 生物多様性センター	令和5年度重要生態系監視地域モニタリング推進事業 小島嶼(海鳥)調査業務	13,400,000	請負参加者確認公募
5	環境省自然環境局 生物多様性センター	令和5年度鳥類標識足環の購入	985,600	請負随意契約
6	関東地方環境事務所	令和5年度国内希少野生動植物種(アホウドリ)保護増殖業務	979,000	請負随意契約
7	九州地方環境事務所 沖縄奄美自然環境事務所	令和5年度ヤンバルクイナ野生復帰技術確立のための試験実施等業務	990,000	請負随意契約
8	九州地方環境事務所 沖縄奄美自然環境事務所	令和5年度ヤンバルクイナ発信器納入業務	799,700	請負随意契約
9	株式会社総合環境計画	北陸新幹線、中池見湿地環境調査	354,200	請負(再委託)
	合計9件		66,020,620	

(注1) 第9項 株式会社総合環境計画からの請負事業は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構からの再委託である。

令和5年度 事業報告 旧保全研究室 補足説明

鳥類標識センター(旧保全研究室)が行っている鳥類標識調査講習会(通称バンダー講習会)について:

- イ) バンダーとは、山階鳥類研究所が環境省から委託を受けて行っている鳥類標識調査(バンディング)を支えるボランティア調査員のことである。バンダー講習会は、このバンダーを育成するために山階鳥類研究所が行っているものである。
- ロ) 講習は2回の実技講習と1回の講義講習で構成されており、実技講習は山階鳥類研究所職員または実技講師(後述する指導資格を取得したベテランバンダー)が実施する鳥類標識調査中に、候補者が講師より個人指導を受ける形で行われる。講義講習は年1回山階鳥類研究所で山階職員により行われ、鳥学の基礎から捕獲方法、種や性齢の識別、データ入力、法令、海外情報など調査に必要な広範囲な内容が含まれる。
- ハ) 今年度は8～11月に北海道、新潟県、富山県、福井県、山梨県で行われた実技講習に9名、12月に山階鳥類研究所で行われた講義講習に7名が参加した。すべての講習を修了した7名が令和6年4月から新バンダーとして活動を開始する。残り2名は引き続き次年度に受講する予定となって

いる。

- ニ) バンダー資格を取得できる環境を全国各地に整備するために、実技講師を育成するための講習会（名称：実技講師研修会）を実施した。これは、すでに活動しているベテランバンダーへ新規バンダーの育成に携わってもらうことを目的とし、山階職員同様にバンダー講習会の実技講師を担う資格を取得してもらうためのものである。実技講師資格を取得したバンダーは、バンダー資格取得候補者の判定講習会の実施を担う。実技講師研修会の役目はこれだけでなく、将来的に実技講師資格取得を希望している既存バンダーや、自身の知識や技術の向上を望む既存バンダーの学習の場として機能するとともに、バンダーになることを志望する者の学びの場としても役割も持つ。今年度は10月に北海道と新潟県で開催し、実技講師候補者またはそうした知見を求める既存バンダー3名に対し研修を実施した。

VII. その他

1 職場体験学習生受け入れ

10月11、12日に流山市常盤松中学校から2年生2名、11月28、29日に流山市東深井中学校から2年生2名の職場体験を受け入れ、それぞれ収蔵庫の見学や資料整理、鳥類標識調査のデータ入力作業、ウェブサイトやブログの更新、SNSへの投稿等を体験させた。

2 我孫子市教育委員会との連携協定締結

これまでに積み重ねてきた我孫子市との協力関係を一層深めるため、令和3年3月23日付けで連携に関する協定書を締結した。

連携の内容は、(1) 鳥類・自然環境に関する研究・調査に関すること、(2) 鳥類・自然環境に関する情報や資料に関すること、(3) 活動についての情報発信に関すること、(4) その他、本協定の目的に関する事項であり、実績事項の整理確認を記録・継続している。

3 京都市動物園との連携記念講演会

京都市動物園と、双方の野生動物に関する研究及び教育の事業をさらに発展させるための連携協定を平成30（2018）年11月12日に締結している。8月5日に澤祐介研究員が「鳥の渡りを追って－研究者の苦悩と挑戦－」と題して講演した。この催しは京都市動物園が主催して実施した。

4 Bernice Pauahi Bishop Museum（米国、ハワイ州）との連携協定

平成31年締結した連携協定に基づき、継続してハワイミツスイ類の適応放散の研究と保護に焦点を定めた連携を継続した。

ビショップ博物館の脊椎動物コレクションの協力得て、以下の成果を得た。

日本鳥学会2023年度大会 ポスター発表、タイトル：ビショップ博物館所蔵の書簡からわかった80年前の標本交換、発表者：小林さやか

令和6年1月に水田ディレクターが訪問し情報交換を行った。

5 芝浦工業大学柏中学高等学校との教育連携協定締結

芝浦工業大学柏中学高等学校と相互の教育交流を通じ、生徒の視野を広げ、進路に対する意識及び学習意欲を高めるとともに、中等教育の活性化を図ることを目的とする教育連携協定を締結している。

これに基づき、1月20日に澤祐介研究員が「渡り鳥の研究から考える生物多様性の保全」と題した講演を行った。また2023年11月に生物部1年生3名及び教員1名とラインセンサスを行い、芝浦工業大学柏中学高等学校周辺の鳥類観察について説明した。

【収益事業】

東京都渋谷区南平台町に所有するマンション3室を賃貸し、その収益を公益目的事業の用に供した。

1. 103号室

専有面積：104.81平方メートル

賃料月額：350千円

敷金：700千円（賃料の2ヶ月相当額）

更新料：350千円（令和3年から発生、賃料の1ヵ月分相当額）

契約期間：令和5年9月23日～令和7年9月22日（2年間 令和5年から更新）

2. 104号室

平成29年5月1日をもって収益事業財産となった（旧公益目的事業財産）

専有面積：122.57平方メートル

賃料月額：580千円

敷金：1,740千円（賃料の3ヵ月相当額）

更新料：580千円（賃料の1ヵ月分相当額、令和5/3年受領 今年度はなし）

契約期間：令和5年3月16日～令和7年3月15日（2年間令和5年から更新）

3. 204号室

専有面積：113.27平方メートル

以下の通り住宅賃貸借契約より定期借家契約に移行した

【前契約】

賃料月額：360千円

敷金：720千円（賃料の2ヶ月相当額）

更新料：180千円（賃料の0.5ヶ月分 今年度は新契約にて収受）

契約期間：令和3年11月20日～令和5年11月19日（2年間）

【新契約】

賃料月額：370千円（10千円の値上げ）

敷金：720千円

更新料：185千円（賃料の0.5ヶ月分）

契約期間：令和5年11月20日～令和7年11月19日（2年間）

* 排水管不良あり、明渡し時にリニューアルを検討中

以上

III-3

旧保全研究室の事業活動

令和5年度は以下の内容で業務を受託または請負、調査・研究を行った。

()内は業務の委託者および担当者。

1. 鳥類標識調査・モニタリング

- ・ 鳥類標識調査委託業務（環境省自然環境局生物多様性センター）

鳥類の渡り状況の推移を把握するため、全国各地のボランティア調査員約400名の協力を得て、野鳥を捕獲し個体識別用金属足環を装着、放鳥した。主要ステーションでは定量評価の可能な調査を実施し、得られた放鳥回収データをデータベース化した。鳥類観測ステーションの建築物および物品・消耗品類の点検を行った。検討会を実施し、事業の評価と改善点の検討を行った。ボランティア調査員育成のための講習会を開催した。個体識別用金属足環および捕獲用かすみ網を購入し、全国の協力調査員に配布・貸与した。広報資料・業務報告書・調査報告書を作成した（水田・仲村・森本・富田・油田・澤・千田・浅井）

- ・ 重要生態系監視地域モニタリング推進事業（海鳥調査）（環境省自然環境局生物多様性センター）
検討会を開催し、調査結果等について検討した。

東京都恩馳・祇苗島・八丈小島・鳥島・聳島列島、高知県蒲葵島・宿毛湾、福岡県沖ノ島・小屋島、宮崎県枇榔島の各海鳥繁殖地において、繁殖数および個体数をモニタリングした。調査結果を過年度のデータと比較解析し、経年変化を明らかにした。2004~2023年度調査結果のとりまとめ方法を検討した。業務報告書・調査報告書を作成した。（富田・油田・澤）

- ・ 鳥類標識足環の購入（環境省自然環境局生物多様性センター）

鳥類標識調査に必要な個体識別用金属足環を購入し、全国の協力調査員に配布した。（仲村）

2. 保全

[ヤンバルクイナ]

- ・ 野生復帰技術確立のための試験実施等業務（環境省九州地方環境事務所 沖縄奄美自然環境事務所）
発信機を装着した飼育繁殖個体の追跡調査を行い、行動圏や繁殖実態等を分析・考察した。追跡個体の異常が確認された場合は個体捜索や救護を実施した。（尾崎）
- ・ クイナ用発信機の購入（環境省九州地方環境事務所 沖縄奄美自然環境事務所）
ヤンバルクイナ追跡のための小型発信機の選定と入手を行った。（尾崎）

[アホウドリ]

- ・ アホウドリ保全調査委託（東京都小笠原支庁）
アホウドリ繁殖地の再形成を図るため、雛移送が実施された聳島において、飛来状況等のモニタリングを実施した。調査結果の整理・解析を行い、報告書にとりまとめた。（油田）
- ・ 国内希少野生動植物種（アホウドリ）保護増殖業務（環境省関東地方環境事務所）
伊豆諸島鳥島において、アホウドリのヒナをカウントし、繁殖ペア数及び個体数を推定した。業務報告書を作成した。（富田）

[シギ・チドリ類]

- ・ シギ・チドリ類追跡事業（環境省自然環境局野生生物課）
国内外のシギ・チドリ類渡り経路追跡のため、千葉県三番瀬、佐賀県有明海、北海道コムケ湖、千葉県／茨城県利根川下流域、宮城県鳥の海、北海道ウトナイ湖、沖縄県宮古島において、シギ・チドリ類を捕獲し、カラーフラッグを付けて放鳥した。また全国から寄せられたカラーフラッグ観察情報および回収情報の解析を行った。ハマシギの遺伝解析を行った。（水田・仲村・千田・斎藤）

[ノジコ]

- ・ 北陸新幹線、中池見湿地環境調査（株式会社総合環境計画）

令和5年度中池見ノジコ標識調査の結果をもとに、生息環境ごとの飛来個体数の比較を行った。着工前・着工中の結果と比較し、新幹線等の影響を分析した。ノジコの繁殖地の記録と比較し、個体数の増減傾向の特異性を解析した。（仲村）

III-4

科学研究費補助金（特定奨励費）の研究事業

令和5年度科学研究費助成事業（特定奨励費）状況報告書

1. 研究事業名等	鳥の学問を発展させる資料の拡充・管理・公開に関する研究事業					
学術研究 諸団体の名称	公益財団法人山階鳥類研究所					
学術研究諸団体 の代表者 職名・氏名	職名		理事長			
	氏名	(フリガナ)	ミブモトヒロ			
		(漢字等)	壬生 基博			
研究事業期間	令和3年度～令和5年度(3年間)					
交付(予定)額 (単位：千円)	令和3年度	令和4年度	令和5年度	総計		
	56,000	56,000	56,000	168,000		
令和4年度 実支出額 (単位：円)		合計	費目別内訳			
			物品費	旅費	人件費・謝金	その他
	【計画額】 (交付申請書 に記載の使用 内訳)	56,000,000	7,262,000	2,287,000	35,523,000	10,928,000
【実支出額】 ()内は利子 で内数	56,000,241 (241)	8,740,954	1,764,461	34,243,804	11,251,022	
事務担当者 連絡先	職名		事務局長			
	氏名	(フリガナ)	タナハシ ノブ			
		(漢字等)	棚橋 伸			
	電話番号：04-7182-1101					
	E-mail：tanahashi@yamashina.or.jp					

研究事業の目的

【文部科学省提出事業計画調書からの抜粋】

山階鳥類研究所は、創設者である山階芳麿（やましな・よしまろ、1900–1989）が1932（昭和7）年に設立した山階家鳥類標本館を前身とする、アジアで最も古い鳥学専門の学術研究機関である。およそ90年にわたるその歴史の中、当研究所は一貫して鳥の学問を支える多様な資料の収集に取り組み、関連分野の発展を支えてきた。

その中心となる鳥類標本資料については、国内最大の約7万点を有しており、世界の鳥種のほぼ半数をカバーしている（特に日本・韓国・台湾・太平洋地域の標本に富んでおり、この地域産の標本所蔵数は世界最大である）。多数の絶滅種や希少種の標本、新種や新亜種の報告の際の証拠であるタイプ標本をはじめ、ミヤコショウビンの標本やカムリツクシガモ雄の標本といった世界で当研究所のみが所蔵しているものもある。

世界的な稀覯書を含む4万冊を超える図書資料も充実している。例えば、下図は19世紀のイギリスで活躍したジョン・グールドの鳥類図譜である。石版印刷で刷られたモノクロの図に職人が1点1点色を塗ることにより、カラーの図譜に仕上げられた貴重なものである。



ジョン・グールドの「アジア鳥類図譜」
(1849-1883)より「オシドリ」。

このように当研究所は、鳥に関わるあらゆる学問、自然科学はもとより、人文科学や芸術なども支える基盤として、第一級の重要性を持つ多様な資料を所蔵している。このため当研究所は、鳥の学問を探究する研究者にとって、欠くことのできない研究の拠点となってきた。これらの資料を拡充しながら管理維持し、公開していくことは、当研究所の社会的使命と考え、平成13年度に初めて科学研究費補助金特定奨励費に採択されてから、およそ20年にわたりその任にあたってきた。本事業の目的は、今後もこれらの使命を果たすべく、資料のさらなる拡充を目指すとともに、それらを適切に管理し、必要とする研究者に供することのできる形で公開していくことである。

これまでの事業では、標本作製に加えて組織サンプルの採取やCT画像のような副次的なデータ収集を積極的に行い、それらを研究者に提供することで、分類学や古生物学などの学問分野で成果を上げてきた。本事業では、さらに標本から安定同位体比のデータも収集することで、鳥類の基本的な生態の解明につながる研究の基盤作りを行う予定である。他方、資料の整備に伴って、所蔵標本の地域的・年代的偏りがあることなども明らかになっており、その是正も課題として挙がっている。本事業では、標本から多様な副次的データの収集を行うことと、標本の偏りを補うべくさらなる収集を行うことで資料を拡充していく（**拡充班**）。また、それらの資料類が将来にわたって受け継がれるよう、これまでの資料同様に適切に管理保管する（**管理班**）。さらに、管理する多様な資料の活用を促進するためにデータを公開する。当研究所が保有する知識や技術を社会へ還元することもまた、鳥の学問を発展させる大きな礎となる。本研究事業を完遂するため、他機関との連携にも積極的に取り組み、幅広い鳥の学問の普及と貢献を目指す（**公開班**）。



絶滅鳥カムリツクシガモの標本
(雌雄)。手前が世界に1つだけの雄標本。

研究事業期間を通して行う研究事業の内容

【文部科学省提出事業計画調書からの抜粋】

「2. 研究事業の目的」に対応する3つの研究項目(1) 拡充班、(2) 管理班、(3) 公開班を設ける。また、(0) 総括班を組織し、進捗状況の自己点検と全体の総括にあたらせる。(1)～(3)の具体的な事業内容は以下の通りである。

(1) 拡充班：野外採集、寄贈受け入れ、国内外の博物館等との交換、購入等により、(a) 標本、(b) 組織サンプル(肉片・血液・羽毛等)、(c) 図書および鳥学資料の拡充を図る。(a) 標本の拡充では、野外で鳥類を安全に捕獲する技術が記録されないまま衰退している現状を鑑み、これらの技術を継承する目的で、鳥類の捕獲技術を映像資料として記録し、収集することも試みる。また、所蔵する標本に付随する組織サンプルや羽毛などを活用して、(d) DNA塩基配列で種の同定を行うためのDNAデータバンク登録用データ(DNAバーコードデータ)と、安定同位体比データの収集に取り組む。安定同位体比データは、鳥の体内に含まれる窒素や炭素の安定同位体比を調べるもので、どんな餌を採っているかといった食性の指標となる。当研究所が所蔵する古い標本から得られるデータにより、時代の変遷とともに食性がどう変化しているかを捉えることができると期待される。当研究所は多様な標本を所蔵しているため、種や年代を網羅した形でデータ収集して公開することにより、このような学術分野へ多大な貢献ができる。

拡充班で収集した標本や資料、およびデータは、(2) 管理班で保管管理され、(3) 公開班で公開する。

(2) 管理班：研究所が所蔵する(e) 標本、(f) 組織サンプル、(g) 図書および鳥学資料について、研究者の利用に供するため、管理番号を与えて各資料の情報をデジタル化し、標本庫・冷凍庫・書庫などに配架する。これらの資料の劣化を防ぐため、温湿度管理や清掃などの日常的管理業務に従事する。鳥学資料は、当研究所創設者の山階芳麿の研究資料や、研究者の遺族から寄贈をうけた鳥学研究に関する文書、写真類などであり、唯一無二の資料が多い。これらも研究者の利用に供するために管理番号を与えて写真撮影を行い、状態を記録した上で保管庫に配架する。

標本、組織サンプル、図書および鳥学資料の利用を希望する研究者をサポートする。

(3) 公開班：当研究所が所蔵する資料、データの情報公開を進める。標本については、当研究所が運営するウェブサイト(h) 『標本データベース』^{*1}で、標本の基礎的な情報である採集地、採集日などとともに、該当標本とそのラベルの写真を随時配信する。また、標本から得られるデータとして、X線CT画像、走査電子顕微鏡画像、紫外線画像についても標本データベースを通じて公開し、誰もが自由にダウンロードし、研究できるようにする。標本データベースで表記している和名や分類体系は、『世界鳥類和名辞典』(山階, 1986)に従っているが、分類学の進展に伴い最新の学説に合わせることを求められているため、引き続き改訂作業を行う。改訂作業により考案された新和名や分類体系は、山階鳥類学雑誌上にて公表する。また、和名以外にも各分野の研究の進展によって標本データベースで公開された標本情報を改訂できる場合もあるため、随時修正も行う。組織サンプルについては、当研究所ウェブページの(i) 『組織サンプルの利用』^{*2}で収蔵状況を公開する。また、拡充班で収集した(d) DNAバーコードデータについては、Consortium for Barcode of Lifeが運営するデータベース『Barcode of Life Data System (BOLD)』^{*3}で公開する。拡充班で収集した(g) 図書および鳥学資料については、(j) 『蔵書検索システム』^{*4}で収蔵状況を公開する。

^{*1} <https://decochan.net>; ^{*2} https://www.yamashina.or.jp/hp/hyohon_tosho/soshiki_sample.html;

^{*3} <http://www.boldsystems.org>; ^{*4} <https://jmapps.ne.jp/zhycrkj2/>

当研究所に蓄積された鳥学の知識・技術を社会に還元するため、以下の事業を行う。(k) 学術雑誌『山階鳥類学雑誌』の年2回刊行、(l) 一般向けセミナーの開催と質問窓口の開設、(m) 他機関との連携の強化を目的として、人材育成のための講習会・実習を開催する。連携博物館とのコンソーシアムによるデータベース構築のノウハウなどについて自己評価し、改良を行う。

研究事業を行う組織

【文部科学省提出事業計画調書から抜粋のうえ一部改変】

研究事業の内容	研究責任者	研究者及び補助者
(0) 総括班	小川 博 (所長)	遠藤秀紀 (東京大学教授) 奥野卓司 (山階鳥類研究所シニアフェロー) 尾崎清明 (山階鳥類研究所副所長) 高木昌興 (北海道大学教授) 林 良博 (山階鳥類研究所専務理事/国立科学博物館顧問) 真鍋 真 (国立科学博物館副館長・標本資料センターコレクションディレクター・分子生物多様性研究資料センター長) 美濃導彦 (理化学研究所情報統合本部本部長) 綿貫 豊 (北海道大学教授) 高橋敏之 (山階鳥類研究所所員・経理事務担当)
(1) 拡充班	水田 拓 (自然誌・保全研究ディレクター・拡充班の統括)	岩見恭子 (標本/同位体データ担当) 小林さやか (標本担当) 森本 元 (標本/図書担当) 水田 拓 (捕獲技術方法の収集担当) 仲村 昇 (捕獲技術方法の収集担当) 澤 祐介 (捕獲技術方法の収集担当) 浅井芝樹 (組織サンプル担当) 齋藤武馬 (組織サンプル/DNAバーコード担当) 鶴見みや古 (図書/鳥学資料担当) 富田直樹 (同位体データ担当)
(2) 管理班	鶴見みや古 (文化資料ディレクター・管理班の統括)	岩見恭子 (標本担当) 小林さやか (標本/鳥学資料担当) 齋藤武馬 (組織サンプル担当) 浅井芝樹 (組織サンプル担当) 鶴見みや古 (図書/鳥学資料担当)
(3) 公開班	平岡 考 (広報ディレクター・公開班の統括)	山崎剛史 (標本データベース担当) 岩見恭子 (標本データベース/講習会担当) 小林さやか (標本データベース担当) 森本 元 (標本データベース/鳥学資料の公開担当/講習会担当) 鶴見みや古 (図書/鳥学資料の公開担当) 浅井芝樹 (雑誌刊行担当) 平岡 考 (セミナー/質問対応担当) 千田万里子 (講習会/質問対応担当) 齋藤武馬 (質問対応担当) 澤 祐介 (質問対応担当) 水田 拓 (講習会担当) 仲村 昇 (講習会担当) 油田照秋 (講習会担当) 富田直樹 (講習会担当)

事業計画調書の抜粋（上段）と今年度成果（下段）

(1) 拡充班

【事業計画における令和5年度事業の内容】

【資料の拡充】 (a-1) 標本：野外で捕獲または遺体として拾得した鳥体からの作製で380点の増加を目指す。他機関との交換、購入、寄贈受け入れ等により、さらに増加する場合もある。(a-2) 鳥の捕獲技術の記録：捕獲現場での作業時に動画を撮影し、さまざまな捕獲技術を映像で記録する。(b) 組織サンプル：標本材料として保管している冷凍鳥体からの作製、他機関との交換、寄贈受け入れ等により、400点の増加を目指す。(c) 図書資料：購入、寄贈、他機関との交換等により、1,000点の増加を目指す。ただし、収集目標点数は、特に寄贈資料数によって大きく変動する可能性がある。

【データの拡充】 (d-1) DNAバーコードデータ：分析が比較的容易なDNAバーコード領域の塩基配列をすべての生物について決定してデータベース化することにより、生物種を正確に同定できるシステムの構築を目指す国際プロジェクト Barcode of Life に協力する。日本産鳥類をおもな対象として、70点のデータを揃える。(d-2) 安定同位体比データ：炭素と窒素の安定同位体比データを収集する。標本の羽毛を用い、分析は京都大学などの共同利用施設で行う。日本産鳥類をおもな対象として、50点のデータを作成する。

【事業の進展状況及び主な成果】

【資料の拡充】 (a-1) 標本については、収集した遺体・卵殻からの新規作成と寄贈受け入れにより、2,097点を入手した。(a-2) 捕獲技術の記録として、小笠原諸島における海鳥捕獲方法、かすみ網の網場整備方法、くくり罠での捕獲方法等を記録した。(b) 野外採集、冷凍保管遺体からの採取、寄贈受け入れにより、558個体分の組織サンプルを入手した。また、新たに82個体についてDNA抽出を行った。(c) 図書資料については、購入・寄贈・交換により、単行本・雑誌を1,276冊入手した。この他に、イギリスの鳥類研究者Jhon GouldのThe Birds of Australia, 1848および1869 全8冊の復刻版(Lansdown Press, 1972-1975, Elephant folio)の寄贈を受けた。

【データの拡充】 (d-1) DNAバーコードデータ70点を作成した。(d-2) 安定同位体比データ50点を作成した。

事業計画調書の抜粋（上段）と今年度成果（下段）

(2) 管理班

【事業計画における令和5年度事業の内容】

【資料の保守業務】 標本庫・書庫について、温湿度管理、害虫・カビの発生状況のモニタリングと発生時の速やかな除去、清掃、破損資料の探索と修理を行う。

【資料の整理業務】 未整理の (e) 標本、(f) 組織サンプル、(g) 図書および鳥学資料（今年度の新規収集品のほか、前年度までの収集品のうち、以下の作業が未完了のもの）について、次の作業 (1) ～ (5) を進める。(1) 資料に管理番号を与える（番号を記したラベルの装着作業等を含む）。(2) 管理に必要な情報（標本資料の場合、管理番号・種名・性別・齢・採集地名・採集年月日・採集者名・採集方法・標本の種類等の情報）をデジタル化する。(3) 標本と、古文書・古写真・書籍原画等の資料については、写真撮影を行い、資料の状態を記録する。(4) 図書については、既存資料と重複する資料の譲渡・交換・廃棄等を行う。(5) これら一連の作業を終えた資料を保管庫（標本庫・冷凍庫・書庫等）に配架する。令和5年度には、標本1,000点、組織サンプル400点、図書資料1,000点、鳥学資料300点について、これらの作業を行う。

【利用者対応】 国内外の研究者から資料の利用申請を随時受け付け（閲覧または貸出）、速やかに計画を審査し、適切と判断される場合には、利用の許可を与える。また、資料の利用に伴う業務も本班が行う（閲覧の場合は資料の準備、利用状況の監視、後片付け等、貸出の場合は借用書の取り交わし、梱包・発送、返却物の殺虫・殺カビ処理等）。

【事業の進展状況及び主な成果】

【資料の保守業務】 標本庫・書庫、ともに適切な環境管理を実施した。破損資料の修復については、図書資料175点の修理を行うと共に、破損・劣化が見られた2,555点を適切な管理のために中性紙保存箱や封筒に保存した。

【資料の整理業務】 (e) 標本については、728点を標本収蔵庫に配架した。また、昨年度寄贈された液浸標本848点について専用保管庫に配架した。(f) 組織サンプルについては、558個体分を整理・配架し、82個体分のDNA溶液も整理・配架した。(g-1) 図書資料については、既存図書296点について整理を行うとともに、単行本、雑誌1,276冊を書庫に配架した。重複図書396冊について処理を行った。(g-2) 鳥学資料（写真、書類など）5,096点について資料管理データベースへの登録（テキストのみ）を行った。また、373点を撮影してリスト化した。この他に、鳥学者内田清之助鳥学資料1,698点へ登録番号を付与し、廣居忠量写真コレクション6,280点をデジタル化およびリスト化したうえで、それぞれアーカイバル容器等へ収納した。

【利用者対応】 利用者対応として、(e) 標本については、閲覧者は145件（のべ202人）を受け入れた。標本貸出は2件（のべ72点）、標本撮影1件（3点）であった。(f) 組織サンプルについては2件について提供した。(g) 図書資料については、閲覧者は17件（のべ17人）を受け入れた。博物館等2館に写真等6点、鷹狩り研究者に鷹狩関連画18点を提供した。文献複写依頼24件（132文献）を受け入れた。これら他に標本データベースデータ60,865点について研究利用申請1件を許諾した。

事業計画調書の抜粋（上段）と今年度成果（下段）

(3) 公開班

【事業計画における令和5年度事業の内容】

【資料の情報公開】 (h-1) 標本：ウェブサイト『標本データベース』を運営して1,000点の標本データ（標本の種類（剥製・骨格・卵・巣等）、標本番号、種名、性別、採集地名、採集年月日等のテキスト情報、標本写真、標本ラベル写真）を追加し、適宜修正などを行う。(h-2) 鳥体内部構造のX線CT画像：標本の材料である冷凍鳥体や標本をX線CTシステム（リース品）で150点撮影し、標本データベースに追加する。(h-3) 羽毛の走査電子顕微鏡画像：骨格標本作製時に除去される羽毛を活用して75点のデータを作成し、標本データベースに追加する。撮影は東京大学総合研究博物館の機材を借りて実施する。(h-4) 羽色の紫外線画像：鳥類は紫外線を知覚できるため、紫外線画像は鳥類が見ている世界を理解する一助となる。現有の紫外線画像撮影装置と剥製標本を用いることにより、50点のデータを作成し、標本データベースに追加する。(h-5) 和名の整備：改訂した内容を報文にまとめ、『山階鳥類学雑誌』上で公表する。(i-1) 組織サンプル：当研究所ウェブページの『組織サンプルの利用』に収録状況を示すエクセルファイルをアップロードする（更新頻度年1回）。(i-2) DNAバーコード：ウェブサイト『Barcode of Life Data System (BOLD)』に70点のデータを追加し、公開する。(j) 図書および鳥学資料：ウェブサイト『蔵書検索システム』を運営し、1,500点の書誌情報を追加するとともに、管理班で整理作業が済んだ鳥学資料については公開を目指す。

【その他の情報公開】 (k) 学術雑誌『山階鳥類学雑誌』を2回刊行する。(l-1) 一般向けセミナーを我孫子市鳥の博物館（千葉県）にて年8回開催する。また、我孫子市が中心となって11月上旬に開催されるジャパンバードフェスティバルにおいても、同様のセミナーを行う（当研究所かオンラインにて）。(l-2) 一般からの質問を受け付ける窓口（電話・Eメール）を開設する。

【他機関との連携・人材育成】 (m) 人材育成のための講習会等を開催する。(m-1) 野外調査従事者を育成するための講習会については、受講希望者の要望に基づいて開催場所を決定し、開催する。(m-2) 野外調査実習は、かすみ網による陸鳥の捕獲をテーマにしたものを福島県にて6回、(m-3) 海鳥の捕獲をテーマにしたものを青森県や伊豆諸島で開催する。なお、これらの実習は、平成30～令和2年度の特定奨励費事業と同じ場所・方法で実施される。したがって、この実習で得られるデータは、繁殖モニタリングデータとしての価値を持ち、すべて令和5年度に『山階鳥類学雑誌』の誌面上で報告される。(m-4) 鳥類標本の作製技術を伝える実習は、当研究所と地方にて年2回開催する。(m-5) 我孫子市鳥の博物館の標本データを『標本データベース』に公開するため、『標本データベース』の改良や修正をする。

【事業の進展状況及び主な成果】

【資料の情報公開】 (h-1) 『標本データベース』を運営し、閲覧者数はのべ667,375人であった。3,351個体の標本データを追加した。(h-2, h-3, h-4) X線CT画像データ、電子顕微鏡画像データ、紫外線画像データはそれぞれ207件、83件、53件のデータをアップロードした。(h-5) カモ目・キジ目の新しい種和名を整理した報文は『山階鳥類学雑誌』に掲載された。また、ヨタカ類については印刷中である。(i-1) 提供可能な組織サンプル14,451点のリストをアップロードした。(i-2) DNAバーコードデータは『Barcode of Life Data System (BOLD)』上で、70点のデータを配信した。(j) 『蔵書検索システム』を運営し、1,548件のデータを追加公開した。閲覧者数はのべ300人であった。

事業計画調書の抜粋（上段）と今年度成果（下段）

【その他の情報公開】 (k) 『山階鳥類学雑誌』の第55巻第1号と第2号を発行した。J-Stageで公開された全文PDFへのアクセス数は22,788件であった。(l-1) 一般向けセミナーをオンラインで9回開催し、同時アクセスの最大数は9回合計で616であった。一部については見逃し配信も行い、当日分と見逃し配信分を合わせた視聴回数は6,157回であった。11月には、ジャパンバードフェスティバルでイベントの一部としてセミナーを開催した。(l-2) 一般からの質問331件に対応した。

【他機関との連携・人材育成】 (m-1) 野外調査従事者を育成するための講習会については、2024年3月に山階鳥類研究所で初心者向けに対面・座学形式で開催し、20人が受講した。また、ガンカモ類等大型水鳥類の捕獲技術講習会を2023年11月に秋田県大潟村で開催し、5人が受講した。(m-2) 陸鳥を対象とした野外調査実習は、福島県南相馬市及び飯館村の2地点において5月～8月に各6回計12回の捕獲実技講習を実施し、のべ25人が参加した。(m-3) 海鳥を対象とした野外調査実習は、青森県八戸市のウミネコ繁殖地で5月に2回開催し、のべ6人が受講した。2024年2～3月に伊豆諸島鳥島の海鳥繁殖地で1回開催し、2人が受講した。福島県の野外調査実習で得られたデータと青森県のウミネコ繁殖地の野外調査実習で得られたデータはモニタリングデータとしての価値があるため、3年分を取りまとめた報文を山階鳥類学雑誌へ投稿し、印刷中である。(m-4) 標本作製講習会は、2023年4月3日、4日に長崎大学水産学部の学生1名をインターンで受け入れ、山階にて実習を行なったほか、学生2名を対象に早稲田大学人間科学部にて2023年10月27日、28日の2日間海鳥の解剖及び標本作製実習を行った。さらに神奈川県立博物館で2024年3月30日に講習会を実施し、16人が受講した。(m-5) 我孫子市鳥の博物館の標本データについては『標本データベース』に組み込まれているため、『標本データベース』の運営管理の中で維持管理した。

【資料の維持管理・拡充・公開により今年度発表された研究業績等一覧】

【論文】

1. Aoki D, Matsui S, Esashi M, Nishiumi I, Nagata J, Takagi M (2023) Population genetics of recent natural colonization by the bull-headed shrike (*Lanius bucephalus*; Aves) suggests the importance of recurrent immigration on remote islands. *Biological Journal of the Linnean Society*: blad105.
2. 今村知子・高倉昌哉・齋藤武馬 (2023) DNA 分析および外部形態に基づいて同定されたニシオジロビタキ *Ficedula parva* の国内記録. *日本鳥学会誌* 72(2): 247-254.
3. Mizumura H, Kubota K, Nishiumi I, Imanishi S, Mochizuki M, Higuchi H (2023) Hybridization and backcrossing between the endangered brown shrike (*Lanius cristatus superciliosus*) and the common bull-headed shrike (*L. bucephalus bucephalus*). *Biological Journal of the Linnean Society*: blad117.
4. Tada S, Tsuihiji T, Matsumoto R, Hanai T, Iwami Y, Tomita N, Sato H, Tsogtbaatar K (2023) Evolutionary process toward avian-like cephalic thermoregulation system in Theropoda elucidated based on nasal structures. *Royal Society Open Science* 10: 220997.
5. Tatani M, Yamasaki T, Tanaka H, Nakata T, Chiba S (2023) What makes the diverse flight of birds possible? Phylogenetic comparative analysis of avian alula morphology. *Biological Journal of the Linnean Society*: blad085.
6. Wu S-M, Worthy TH, Chuang C-K, Lin C-H (2023) New Pleistocene bird fossils in Taiwan reveal unexpected seabirds in East Asia. *Acta Palaeontologica Polonica* 68(4): 613-624.
7. Yamamoto Y, Asai S, Saitoh T, Kobayashi S, Hiraoka T, Momose K, Urano E, Ohta N, Kakizawa R, Yamagishi S (2023) Complete genomes of endangered Japanese birds. *Journal of the Yamashina Institute for Ornithology* 55(2): 103-113.
8. 山崎剛史・亀谷辰朗 (2023) カモ目・キジ目の新しい種和名. *山階鳥類学雑誌* 55(2): 137-151.

【一般向け解説記事(雑誌など)】

9. 小林さやか (2023) 所員エッセー 80 年前の手紙から紐解くハワイ・ビショップ博物館との交流. *山階鳥研 NEWS* 35(3): 5.
10. 山崎剛史 (2023) おすすめの本 目に見えない多様性を見る. *BIOSTORY* 40: 110.

【書籍】

11. Yamasaki Y, Gunji M, Masuda Y, Fukuhara A (2023) Biological Mechanisms. In: Suzumori K, Fukuda K, Niiyama R, Nakajim K (eds) *The Science of Soft Robots –Natural Computing Series*: 39-58. Springer, Singapore.
12. 山階鳥類研究所著 (2023) *山階鳥類研究所のおもしろくてためになる鳥の教科書*. 山と溪谷社, 東京.

【学会発表等】

13. 岩見恭子・富田直樹・兵藤不二夫・武山智博 (2023) 鳥類標本の学術的価値を維持した羽試料の採集方法の検討. *日本鳥学会 2023 年度大会* (9 月 15 日~18 日, 金沢大学).

14. 岸本直子・和田大地・玉山雅人・岩見恭子・富田直樹・池田忠繁・棚橋美治・片桐一彰 (2023) ウミネコ剥製の風洞実験. 第 61 回飛行機シンポジウム (11 月 15~17 日, 北九州国際会議場).
15. 小林さやか (2023) ビショップ博物館所蔵の書簡からわかった 80 年前の標本交換. 日本鳥学会 2023 年度大会 (9 月 15 日, 金沢大学).
16. 小林さやか・岩見恭子・加藤ゆき (2023) 第 5 回標本集会 江戸時代の鳥を知ろう. 日本鳥学会 2023 年度大会, 自由集会 (9 月 15 日, 金沢大学).
17. 西田澄子・鶴見みや古・北村亘 (2023) 大正・昭和期における籠抜け及び意図的放鳥による飼鳥の野外への逸出. 日本鳥学会 2023 年度大会, ポスター発表 (9 月 15 日~18 日, 金沢大学).
18. 齋藤武馬・西海功 (2023) 「2. 掲載予定種の分類の検討結果」目録編集委員会 みんなで作ろう! 目録 8 版 (その 4). 日本鳥学会 2023 年度大会, 自由集会 (9 月 15 日, 金沢大学).
19. 高橋佑太・池田忠繁・棚橋美治・和田大地・玉山雅人・岩見恭子・富田直樹 (2023) ウミネコの 3D プリンタ模型の横風特性解析. 第 61 回飛行機シンポジウム (11 月 15~17 日, 北九州国際会議場).
20. 山崎剛史・江田真毅・杉田典正・西海功 (2023) 鳥島のアホドリは未記載新種か? 日本鳥学会 2023 年度大会 (9 月 17 日, 金沢大学).
21. 山崎優佑・山崎剛史 (2023) 飛べないクイナが非対称の風切羽を持ち続ける理由. 日本鳥学会 2023 年度大会 (9 月 17 日, 金沢大学).

【展示会への協力】

22. インターメディアテク特別展示「極楽鳥」(2023 年 1 月 20 日~5 月 7 日, インターメディアテク).
23. 領土・主権展示館企画展「近代日本の夜明けと離島の編入 | 明治日本のフロンティア」(2023 年 1 月 24 日~4 月 9 日, 領土・主権展示館).
24. 国立科学博物館企画展「科博の標本・資料でたどる日本の哺乳類学の軌跡」(2023 年 4 月 25 日~2023 年 8 月 16 日, 国立科学博物館企画展示室).
25. 北九州市立自然史・歴史博物館 2023 年度夏の特別展「恋するいきもの展」(2023 年 7 月 3 日~9 月 18 日, 北九州市立自然史・歴史博物館).
26. 沖縄県立博物館・美術館企画展「みんなの進化展~命はつながっている」(2023 年 6 月 21 日~9 月 3 日, 沖縄県立博物館・美術館).
27. 豊橋市自然史博物館第 37 回特別企画展「カイジュウ博 2023-海で暮らす仲間たち-」(2023 年 7 月 14 日~9 月 3 日, 豊橋市自然史博物館).
28. 三重県総合博物館第 35 回企画展「鳥のひみつ調べ隊! ~みて・きいて・ふれて~」(2023 年 10 月 7 日~12 月 10 日, 三重県総合博物館企画展示室).
29. 領土・主権展示館地方巡回展「近代日本の夜明けと離島の編入 | 明治日本のフロンティア」(2023 年 10 月 9 日~10 月 15 日, 川口総合文化センター・リリア).
30. 茨城県立歴史館企画展 3 「音楽家・松平頼則 (よりつね) とその時代」(2023 年 10 月 28 日~12 月 7 日, 茨城県立歴史館).

進捗状況の確認結果に対する対応事項

令和4年度進捗状況確認

(指摘事項)

本事業については、事業計画が十分に実施されていることが確認できる。特に拡充班では想定を超える数の標本・DNA資料が登録され、アーカイブ資料の充実が認められる。また、着実な標本データベースの運営、学術雑誌の刊行、人材育成についても計画通りに進められていることを確認した。さらに、採択時の審査結果の所見における指摘事項にも対応した取組が実施されている。

問題点として挙げられている、資料を拡充・管理し研究利用する人材の育成や、管理するための知識・技術の継承について引き続き取り組むとともに、事業計画に沿って着実に研究事業を実施していくことが望まれる。

(対応状況)

資料の拡充、アーカイブの充実、標本データベースの運営、学術雑誌の刊行、人材育成については、引き続き重要課題として取り組み、本事業の主体として実施するよう計画した。

本事業計画では「学術上価値が高く、散逸することにより我が国の学術研究の進展に悪影響を及ぼす恐れのある資料の収集、保管及び公開」を長期的に継続する視点に立ち、特に当該分野における人材育成に重点をおく内容とした。また、学術上価値が高く、散逸することにより学術研究の進展に悪影響が及ぶものとして、直接の資料の範囲にとどまらず、鳥類の捕獲技術も含めた。捕獲技術なくして、標本材料の収集や鳥類の生態学・形態学上の知識収集は進まないためである。そこで、人材育成の項目では捕獲技術の講習・実習をさらに強化し、捕獲した鳥類の扱い方に関する講習・実習を含めた。なお、本事業計画では、事業内容とその価値についての一般向け普及啓発としてインターネットによる情報発信を強化したが、このことにより、当該研究分野への幅広い関心が高まれば、資料の収集・管理・公開といった活動の支持・支援が得られ、長期的には潜在的な人材の確保といった側面も期待できると判断したためである。

令和3年度進捗状況確認

(指摘事項)

本研究事業については、資料及びデータの整理・拡充、情報公開などが計画どおり順調に進んでおり、COVID-19の影響を受けつつも我が国の鳥類研究を支える基盤的な活動として適切に事業が実施されていることを確認した。

採択時の審査結果の所見で指摘された顕微鏡画像のメタデータの整備拡充、英語によるデータベース構築、これらのデジタル発信などについても真摯に取り組んでいる。人材育成のための取組の効果についても説明があった。過去に指摘された全国の鳥類資料を有する施設とのネットワークの拡充に関して、経時的な自己評価や分析についての取組に期待したい。

(対応状況)

顕微鏡画像のメタデータについては令和5年度中にリストを公開する。データベースへの英語付記は既に対応した(いずれも令和3年度状況報告書にて報告済み)。人材育成の効果については、令和4年10月に追加資料として回答し、本事業の講習会・実習を受けた複数の人が技術者・研究者として活躍している旨を報告した。

鳥類資料を有する施設とのネットワーク拡充については、まずパイロットケースとして連携している我孫子市鳥の博物館の収蔵標本の公開を行った。その他の機関の実務的な要望を調査するため、実習等で連携している5機関の鳥類標本担当者からヒアリングを行った。その結果、各機関では所蔵資料の公開以前に、おもに予算措置等の制限から資料整備が進んでいない実態が明らかとなってきた。したがって、当該事業で整備した『標本データベース』と同等の資料公開は現状では不可能との結論に至った。むしろ、各機関では当研究所の資料整備方法の技術共有がおもな要望であった。そこで現在では技術共有のための交流や人材育成のための講習会・実習へシフトしている。

III-5

研究所員の論文・講演等活動成果

1. 原著論文・創設（査読あり）

- 平岡考, 永井真理子, 永井次郎 (2023) 日本におけるコシジロイソヒヨドリの写真を伴う3例目の記録で雌の初記録となる観察. *Strix* 39: 179-186.
- Iijima D, Kobayashi A, Morimoto G & Murakami M (2023) Drivers of functional and phylogenetic structures of mountain bird assemblages along an altitudinal gradient from the montane to alpine zones. *Global Ecology and Conservation* 48 (2023) e02689. <https://doi.org/10.1016/j.gecco.2023.e02689>
- 今村知子, 高倉昌哉, 齋藤武馬 (2023) DNA分析および外部形態に基づいて同定されたニシオジロビタキ *Ficedula parva* の国内記録. *日本鳥学会誌*. 72: 247-254.
- 小森日菜子, 小林さやか, 川田伸一郎 (2024) 国立科学博物館所蔵ヤマイヌ剥製標本はニホンオオカミ *Canis lupus hodophilax* か? . 国立科学博物館研究報告A類 (動物学) 50 (1) : 33-48. doi: 10.50826/bnmnszool.50.1_33
- 三上かつら, 森本元, 上野裕介, 三上修 (2023) サーマルイメージングカメラをもちいた固定式視線誘導柱の表面温度測定と小鳥類の営巣調査の試み. *Bird Research* 19: T1-T10. <https://doi.org/10.11211/birdresearch.19.T1>
- 森本元 (2024) 報告: 鳥類モニタリングにおける代替技術としてのマイクロアレイ利用の検討 ~非工学系生態学者の悪戦苦闘~. 人工知能学会第二種研究会資料. 2024 (Challenge-064) : 3-9. https://doi.org/10.11517/jsaisigtwo.2024.Challenge-064_03
- 成田章, 富田直樹 (2024) 2023年の八戸市大久喜の弁天島におけるウミネコの繁殖状況, *青森自然誌研究*. 29: 125-128
- Rancilhac L, Enbody ED, Harris R, Saitoh T, Irestedt M, Liu Y, Lei F, Andersson L & Alström P (2023) Introgression underlies phylogenetic uncertainty but not parallel plumage evolution in a recent songbird radiation. *Systematic Biology*, syad062, <https://doi.org/10.1093/sysbio/syad062>
- 澤祐介, 柴田昭三, 田澤和夫 (2023) 北海道における夏季のミカドガンの滞在および換羽の記録, *山階鳥類学雑誌*. 55: 64-70.
- Tatani M, Yamasaki T*, Tanaka H, Nakata T & Chiba S (2023) What makes the diverse flight of birds possible? Phylogenetic comparative analysis of avian alula morphology *Biological Journal of the Linnean Society* 144 (2) : 278-288, <https://doi.org/10.1093/biolinnean/blad085> (*責任著者)
- Tomita N, Sato F, Thiebot J-B, Nishizawa B, Eda M, Izumi H, Konno S, Konno M & Watanuki Y (2024) Incomplete isolation in the nonbreeding areas of two genetically separated but sympatric short-tailed albatross populations. *Endangered Species Research* 53: 213-225. DOI: <https://doi.org/10.3354/esr01302>
- Yamamoto Y, Asai S, Saitoh T, Kobayashi S, Hiraoka T, Momose K, Urano E, Ohta N, Kakizawa R & Yamagishi S (2023) Complete mitochondrial genomes of endangered Japanese birds. *Journal of the Yamashina Institute for Ornithology* 55: 103-113. DOI: <https://doi.org/10.3312/jyio.55.103>

2. 著書（論文集・分担執筆・翻訳・監修含む）

- 笠原里恵 (著), 森本元 (監修) (2023) 知って楽しいカワセミの暮らし. 緑書房, 東京.
- 澤祐介 (2023) 渡り性の水鳥をバイオロギングで追う (分担執筆). In: 水辺を守る一湿地の保全管理と再生一. 太田貴大, 大畑孝二, 佐伯いく代, 富田啓介, 藤村善安, 皆川智子, 矢崎友嗣, 山田浩之 (編), 朝倉書店, 東京.
- 浅井芝樹, 尾崎清明, 小林さやか, 鶴見みや古, 平岡考 (分担執筆) (2023) In: 山階鳥類研究所のおもしろくてためになる鳥の教科書 (ヤマケイ文庫). 山階鳥類研究所 (著), 山と溪谷社, 東京.
- Yamasaki T, Gunji M, Masuda Y & Fukuhara A (2023) Biological Mechanisms. In: Suzumori K, Fukuda K, Niiyama R & Nakajima K (eds.) *The Science of Soft Robots. Design, Materials and Information Processing*. 39-58. Springer.

3. 報告その他（査読なし）

山崎剛史, 亀谷辰朗 (2023). カモ目・キジ目の新しい種和名. 山階鳥類学雑誌55 (2) : 137-151.

4. 学会発表等

Hayashi H, Nishizawa B, Tomita N, Ochi D (2024) Sex-related variation in the distribution and relation with longline fisheries of Black-footed Albatrosses. 2024 Pacific Seabird Group 51th Annual Meeting (21-23 February, Seattle)

平岡考・小山仁 (2023) 東京都区部における巣立ち後間もないと思われるミゾゴイ幼鳥の観察例. 日本鳥学会 2023年度大会, ポスター発表 (9月16~17日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)

岩見恭子, 富田直樹, 兵藤不二夫, 武山智博 (2023) 鳥類標本の学術的価値を維持した羽試料の採集方法の検討. 日本鳥学会 2023年度大会, 口頭発表 (9月17日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)

岸本直子, 岩見恭子, 富田直樹 (2023). 風洞実験に供する鳥剥製の胴体内部の設計・製作. 日本航空宇宙学会・構造部門 第65回構造強度に関する講演会 (8月10日, 島根県民会館, 松江市)

岸本直子, 和田大地, 玉山雅人, 岩見恭子, 富田直樹, 池田忠繁, 棚橋美治, 片桐一彰 (2023) 鳥の剥製を使った風洞実験. 日本航空宇宙学会・回転翼航空機部門 第61回飛行機シンポジウム, 口頭発表 (11月16日, 北九州国際会議場, 北九州市)

岸本直子, 岩見恭子, 富田直樹, 玉山雅人, 和田大地 (2023) 鳥剥製の風洞実験における変形計測. 第60回日本航空宇宙学会 関西・中部支部合同秋期大会, 口頭発表 (11月25日, 関西大学千里山キャンパス, 吹田市)

小林さやか (2023) ビショップ博物館所蔵の書簡からわかった80年前の標本交換. 日本鳥学会 2023年度大会, ポスター発表 (9月16~17日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)

小林さやか, 岩見恭子, 加藤ゆき (2023) 第5回標本集会 江戸時代の鳥を知ろう. 日本鳥学会 2023年度大会, 自由集会 (9月16日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)

西田澄子, 鶴見みや古, 北村亘 (2023) 大正・昭和期における籠抜け及び意図的放鳥による飼鳥の野外への逸出. 日本鳥学会 2023年度大会, ポスター発表 (9月16~17日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)

西海功, 金井裕, 山崎剛史, 小田谷嘉弥, 亀谷辰朗, 齋藤武馬, 平岡考, 平田和彦, 池長裕史, 板谷浩男, 梶田学, 大西敏一, 西沢文吾, 先崎理之, 高木慎介, 梅垣佑介 (目録編集委員会) (2023) 目録編集委員会 みんなで作ろう! 目録8版 (その4). 日本鳥学会 2023年度大会, 自由集会 (9月15日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)

西野綾乃, 立本完吾, 井上雄介, 石嶋慧多, 黒田雄大, Milagros Virhuez Mendoza, 原田倫子, 朴ウンシル, 下田宙, 高野愛, 仲村昇, 森本元, 松野啓太, 前田健 (2023) 渡り鳥によるマダニ媒介ウイルスの拡散. 第5回SFTS研究会, 口頭発表 (9月2日, 宮崎大学, 宮崎市)

尾崎清明, 渡久地豊, Paul O'Neil, 富田直樹 (2023) ベニアジサシの繁殖及び越冬状況. 日本鳥学会 2023年度大会, 口頭発表 (9月16日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)

Sawa Y (2023) Tracking project for 6 Goose species wintering in Japan. BOUsci23 – Global flyways: a synthesis of bird migration research (21-22 November, Online)

澤祐介, 池内俊雄, 田村智恵子, 仲村昇 (2023) GPS発信器追跡によるカリガネの渡りと環境利用. 日本鳥学会 2023年度大会, 口頭発表 (9月16日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)

Sawa Y, Ikeuchi T, Tamura C, & Shimada T (2023) Migratory routes and population status of Brent Goose in East Asia. 20th International Goose Specialist Group Meeting (16-18 August, Ulaanbaatar, Mongol)

竹重志織, 澤祐介, 島谷健一郎, 加藤和弘 (2024) 高解像度GISデータから解明する水鳥の移動空間として重要な河川の特徴. 日本生態学会 第71回全国大会, ポスター発表 (3月16~17日, 横浜国立大学, 横浜市)

竹重志織, 澤祐介, 島谷健一郎, 加藤和弘 (2023) 水鳥の移動空間として重要な河川の特徴—景観・局所スケールでの評価. 日本鳥学会 2023年度大会, ポスター発表 (2023年9月16~17日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)

高橋 佑太, 池田忠繁, 棚橋美治, 和田大地, 玉山雅人, 岩見恭子, 富田直樹 (2023) ウミネコの3Dプリンタ模型の横風特性解析. 日本航空宇宙学会・回転翼航空機部門 第61回飛行機シンポジウム, 口頭発表 (2023年11月16日, 北九州国際会議場, 北九州市)

- 田中智, 辻本大地, 井鷲裕司, 小田谷嘉弥, 小西広視, 仲村昇 (2023) オオアカハラは遺伝的・形態的に分化した「亜種」なのか?. 日本鳥学会 2023年度大会, ポスター発表 (2023年9月16~17日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)
- 富田直樹, 今野怜, 今野美和, 澤祐介, 佐藤文男 (2023) 鳥島初寝崎のアホウドリ新営巣地の安定と個体群の増大. 日本鳥学会 2023年度大会, ポスター発表 (2023年9月16~17日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)
- 鳥飼久裕, 川口秀美, 水田拓 (2023) 標識調査から得られたアマミヤマシギの生存期間と島内での移動の記録. 日本鳥学会 2023年度大会, 口頭発表 (9月16日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)
- 山崎剛史, 江田真毅, 杉田典正, 西海功 (2023) 鳥島のアホウドリは未記載新種か?. 日本鳥学会 2023年度大会, 口頭発表 (9月17日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)
- 山崎優佑, 山崎剛史 (2023) 飛べないクイナが非対称の風切羽を持ち続ける理由. 日本鳥学会 2023年度大会, 口頭発表 (9月17日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市)

5. シンポジウム・研究会等講演

- 水田拓 (2023) 日本の鳥類標識調査ーその意義と今後の展望. 2023年度日本鳥類標識協会大会シンポジウム「君たちはどう標識(つけ)るかー標識調査の価値を高めるためにー」(12月23日, オンライン)
- 尾崎清明 (2024) トキが最後の5羽から大空を舞う日まで, トキも人も育つまちづくりシンポジウム (2月25日, 朱鷺会館, 出雲市)
- 尾崎清明, 渡久地豊, 米田重玄 (2023) ノグチゲラの標識調査で分かることー換羽と齢査定ー. 日本鳥類標識協会大会 (12月23日, オンライン)
- Sawa Y (2024) Present data on counts of Eastern population of Lesser White fronted goose in the wintering ground in Japan. The first meeting in frames of the Memorandum of Understanding on Strategic Cooperation for Lesser-White-fronted Goose Eastern Population Conservation (29 Mar. Online)
- 玉山雅人, 和田大地, 岸本直子, 池田忠繁, 棚橋美治, 高橋佑太, 岩見恭子, 富田直樹, 片桐一彰, 出口智弘 (2023) 鳥形態風洞試験の紹介. 第99回風洞研究会義 (2023年5月26日, 日本飛行機株式会社)
- 山崎剛史 (2023) 鳥の翼の柔らかさを可視化する. 第1回ソフトロボットシンポジウム (2023年11月8日, ビレッジ安曇野)

6. 一般講演・研修会等

- 青木大輔, 澤祐介 (2023) 小鳥の渡り経路を描く: 渡り追跡の全国展開を目指して. 日本鳥学会 2023年度大会 自由集会 (9月16日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市).
- 浅井芝樹 (2023) 絶滅した飛べないクイナ復活の謎. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月4日, 我孫子市)
- 浅井芝樹 (2023) 白い羽色異常はどういう仕組みで起きる?. 我孫子市鳥の博物館・山階鳥類研究所による鳥のサイエンストーク (4月15日, オンライン)
- 平岡考 (2023) アフターファイブに学ぶ鳥類学. 山階鳥類研究所特定賛助法人懇親会 (2023年11月6日, 赤坂東邸)
- 平岡考 (2024) 北西太平洋の美しい海鳥アホウドリの歴史と未来. 我孫子市鳥の博物館・山階鳥類研究所による鳥のサイエンストーク (1月20日, オンライン)
- 岩見恭子 (2023) 未来へ残す標本の仕事ー鳥類標本ってどんなものー. 豊橋市立自然史博物館・東三河野鳥同好会. (2024年1月7日, 豊橋市立自然史博物館, 豊橋市)
- 岩見恭子 (2023) 鳥類標本ってどんなもの?. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月4日, 我孫子市)
- 岩見恭子 (2023) 標本製作技術講習会(海鳥の解剖と標本製作). 長崎大学水産学部学生インターン1名.(4月3~4日, 山階鳥類研究所)
- 岩見恭子 (2023) 標本製作技術講習会(海鳥の解剖と標本製作). 早稲田大学人間科学部野生動物生態学研究室学生2名. (10月27~28日, 早稲田大学所沢キャンパス)
- 岩見恭子 (2024) 標本製作技術講習会. 神奈川県立生命の星・地球博物館. 博物館学芸員ほか16名. (3月30~31日, 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原市)

- 岩見恭子 (2024) 鳥の学術標本作り・中級編2. 我孫子市鳥の博物館・山階鳥類研究所による鳥のサイエンストーク (2月17日, オンライン)
- 小林さやか (2023) 背景を知れば面白い標本の話. ジャパンバードフェスティバル. 山階鳥研見にレクチャー (11月4日, 山階鳥類研究所, 我孫子市)
- 水田拓 (2023) アマミヤマシギはどれくらい生きるか, どれくらい移動するか. 我孫子市鳥の博物館・山階鳥類研究所による鳥のサイエンストーク (12月16日 オンライン)
- 水田拓 (2023) 鳥に足環をつけてわかること. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月5日, 我孫子市)
- 仲村昇 (2023) 鳥の木登り, ヒトの木登り. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月4日, 我孫子市)
- 仲村昇 (2023) 宮内庁埼玉鴨場の50年間のカモ類捕獲数推移. 我孫子市鳥の博物館・山階鳥類研究所による鳥のサイエンストーク (6月17日, オンライン)
- 仲村昇 (2023) 鳥類標識調査講習会・実技講習 (5月23-25日, 6月5-7日, 6月22-24日, 7月3-5日, 7月18-20日, 8月9-11日, 南相馬市・飯館村)
- 仲村昇 (2023) 鳥類標識調査講習会・実技講習・実技講師講習 (10月1-3日, 浜頓別ステーション, 浜頓別町)
- 仲村昇 (2023) 鳥類標識調査講習会・実技講習 (10月10-13日, 風蓮湖ステーション, 根室市)
- 仲村昇 (2023) 鳥類標識調査講習会・実技講習 (10月16-18日, 婦中ステーション, 富山市)
- 仲村昇 (2023) 鳥類標識調査講習会・講義講習 (12月17-18日, 山階鳥類研究所, 我孫子市)
- 尾崎清明 (2023) ベニアジサシで分かったこと, 分からないこと. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月4日, 我孫子市)
- 齋藤武馬 (2024) 独立種となったオオムシクイは北海道のどこで繁殖するのか?. 我孫子市鳥の博物館・山階鳥類研究所による鳥のサイエンストーク (3月16日, オンライン)
- 澤祐介 (2024) 渡り鳥の研究から考える生物多様性の保全. 芝浦工業大学柏中学高等学校スーパーサイエンスハイスクール特別講義 (1月20日, 柏市).
- 澤祐介 (2023) 絶滅寸前から蘇った鳥「シジュウカラガン」の渡りを追って. あだち100年大学 (12月24日, 足立区生涯学習センター, 足立区).
- 澤祐介 (2023) 日本に飛来するガン類の渡りルートと重要生息地. 令和5年度東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ渡り性水鳥フライウェイ全国大会 (12月8日, 栗原市).
- 澤祐介 (2023) 野付湾のkokogonとは. 特定非営利活動法人野付エコ・ネットワーク教育講演会 (11月11, 12日, 標津町, 別海町).
- 澤祐介 (2023) 日本に飛来するガン類の最新情報. 日本技術士会東北本部宮城県支部第19回環境対応セミナー (10月13日, 仙台市).
- 澤祐介 (2023) ガンカモ類の捕獲と発信器装着実習. 日本鳥学会2023年度大会 鳥の学校 第14回テーマ別講習会 (9月15日, 金沢大学角間キャンパス, 金沢市).
- 澤祐介 (2023) 鳥の渡りを追って -研究者の苦悩と挑戦-. 京都市動物園・山階鳥類研究所連携記念講演会 (8月5日, 京都市動物園, 京都市).
- 澤祐介 (2023) ガン類はどんな環境を使っているか～発信器でわかること～. 我孫子市鳥の博物館・山階鳥類研究所によるサイエンストーク (5月20日, オンライン).
- 千田万里子 (2023) 標識センター 足環解読捜査班の事件ファイル. ジャパンバードフェスティバル・山階鳥研見にレクチャー (11月5日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 千田万里子 (2023) 野生動物保全技術実習・学外選択実習・鳥類捕獲実習 (酪農学園大学環境共生学類野生動物学コースとの実習) (8月22日, オンライン).
- 千田万里子 (2023) 鳥類標識調査講習会・講義講習 (12月17-19日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 鶴見みや古 (2023) 眠れる書庫の鳥学資料…これってなに?. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月5日, 我孫子市)
- 山崎剛史 (2023) 実は2種いたアホウドリ, 名前はどくなる?. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月5日, 我孫子市)
- 山崎剛史 (2023) 実は2種いたアホウドリ, 名前はどくなる?. 我孫子市鳥の博物館・山階鳥類研究所による鳥のサイエンストーク (8月19日, オンライン)
- 油田照秋 (2023) アホウドリ類報告会 小笠原のアホウドリ, クロアシアホウドリ, コアホウドリ (4月

29日,小笠原ビジターセンター,東京都小笠原村)

油田照秋 (2023) オキノタユウ (アホウドリ) 復活へ 現在の状況と課題. 世界アルバトロスデー&シーバードウィーク. イベント2023 (6月18日, 東京港野鳥公園, 東京都大田区+オンライン)

油田照秋 (2023) ゴジュウカラってどんな鳥?. 我孫子市鳥の博物館・山階鳥類研究所によるサイエンストーク (7月15日, オンライン)

油田照秋 (2023) アホウドリ これまでとこれから. 我孫子市親子の日 (7月23日, 我孫子市生涯学習センター, 我孫子市)

油田照秋 (2023) 小笠原諸島を再びアホウドリの島に!. ジャパンバードフェスティバル. 山階鳥研見レクチャー (11月4~5日, 山階鳥類研究所, 我孫子市)

7. 一般雑誌・新聞等への執筆

平岡考 (2024) 持続可能な観察, 撮影を. 我孫子市鳥の博物館友の会会報 オオバン 137: 1-2.

平岡考 (2023) 審査講評 (マスターズ・上級・中級クラス). 第24回全日本バードカービングコンクール作品集, 日本バードカービング協会, p. 5.

小林さやか (2023) 所員エッセー 80年前の手紙から紐解くハワイ・ビショップ博物館との交流. 山階鳥研ニュース 35 (3) : 5.

森本元 (2023) 所員エッセー 富士山における鳥類研究のこれまでと展開. 山階鳥研ニュース 35 (4) : 3.

尾崎清明 (2023) ベニアジサシ豪から飛来ー山階研「ネコ捕食初確認」愛護団体「適正飼養を」. 沖縄タイムス2023年7月1日 (コメント).

尾崎清明 (2023) ノラネコ絶滅危惧の鳥捕食ーうるまの漁港飛来したベニアジサシー. 沖縄タイムス2023年6月28日 (資料提供).

尾崎清明 (2023) 所員エッセー ネコに捕食されたベニアジサシに足環がついていた. 山階鳥研ニュース 35 (5) : 3.

尾崎清明 (2024) ヤンバルクイナ野生復帰の試み. 山階鳥研ニュース 36 (2) : 2.

富田直樹 (2024) 小島嶼 (海鳥) 休息中のベニアジサシを襲うノラネコ. モニタリングサイト1000ニュースレター 17: 7.

山崎剛史 (2023) おすすめの本 目に見えない多様性を見る. BIOSTORY 40: 110.

8. 特許・知的所有権等

なし

9. 査読

浅井芝樹

山階鳥類研究所『山階鳥類学雑誌』(1回)

尾崎清明

日本鳥学会『Ornithological Science』(1回), 日本鳥学会『日本鳥学会誌』(1回), ヒトと動物の関係学会誌 (1回), USGS Fundamental Science Practices (1回)

小林さやか

山階鳥類研究所『山階鳥類学雑誌』(1回), 日本動物分類学『タクサ』(1回)

齋藤武馬

日本鳥学会『日本鳥学会誌』(1回), 山階鳥類研究所『山階鳥類学雑誌』(1回)

澤祐介

日本鳥学会『日本鳥学会誌』(2回)

富田直樹

日本鳥学会『日本鳥学会誌』(2回), 日本鳥学会『Ornithological Science』(3回), 日本動物学会『Zoological Science』(1回)

水田拓

日本鳥学会『Ornithological Science』(3回), 日本生態学会『保全生態学研究』(1回), 山階鳥類研究所『山階鳥類学雑誌』(1回)

油田照秋

日本鳥学会『Ornithological Science』(1回), Ecology and Evolution (1回), Animal Cognition (1回)

10. 社会的活動(行政、学会などの団体の委員等)

浅井芝樹

- ① 山階鳥類学雑誌編集委員(庶務幹事)
- ② 我孫子市谷津ミュージアム事業推進専門家会議委員
- ③ 我孫子市環境審議会委員

岩見恭子

- ① Ornithological Science(日本鳥学会・英文誌)編集事務
- ② 日本獣医生命科学大学 非常勤講師
- ③ 展示協力: 写真提供および海鳥のプラスチック汚染資料貸出. 豊橋市自然史博物館第37回特別企画展「カイジュウ博2023-海で暮らす仲間たち-」(2023年7月14日~9月3日)

小川博

- ① 我孫子市鳥の博物館名誉館長
- ② 東京農業大学名誉教授
- ③ 日本家禽学会評議員
- ④ 生き物文化誌学会理事
- ⑤ (一財)家畜資源学術標本基金理事
- ⑥ 家畜資源研究会副理事長
- ⑦ 我孫子市鳥の博物館展示リニューアル基本計画検討委員会委員長
- ⑧ ジャパン・バード・フェスティバル実行委員長
- ⑨ 山階芳麿賞選考委員長

尾崎清明

- ① 環境省希少野生動植物種専門家科学委員会委員
- ② 環境省絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会委員鳥類分科会
- ③ 環境省トキ野生復帰検討委員
- ④ 環境省ノグチゲラ保護増殖事業ワーキンググループ委員
- ⑤ 環境省ヤンバルクイナ保護増殖事業ワーキンググループ委員
- ⑥ 環境省奄美大島, 徳之島, 沖縄北部及び西表島世界遺産候補地科学委員会委員
- ⑦ 環境省ライチョウ保護増殖事業検討会検討員
- ⑧ 新潟県「トキの野生復帰に向けた川づくりアドバイザー会議」アドバイザー
- ⑨ (公財)東京動物園協会理事
- ⑩ (公財)東京動物園協会高碕賞選考委員
- ⑪ 周南市ツル保護協議会委員および専門委員
- ⑫ 野田市コウノトリの保全に関する有識者会議委員
- ⑬ 関東エコロジカルネットワーク推進協議会, コウノトリ飼育・放鳥条件整備専門部会委員
- ⑭ 日本鳥学会評議員
- ⑮ (公財)山階鳥類研究所理事
- ⑯ 日本鳥類標識協会会長・評議員

小林さやか

- ① 日本鳥類標識協会会計幹事
- ② 日本鳥学会和文誌編集委員

齋藤武馬

- ① 日本鳥学会評議員
- ② 日本鳥学会鳥類分類委員会副委員長
- ③ 日本鳥学会目録編集委員会編集委員
- ④ 山階鳥類学雑誌編集委員
- ⑤ 日本鳥類標識協会評議員
- ⑥ 日本鳥類標識協会『日本鳥類標識協会誌』編集幹事・編集委員
- ⑦ 令和5年度環境省レッドリストの見直しに係る現地調査. 北海道日高山系現地調査(2023年7月3日～7月10日)

澤祐介

- ① 日本鳥類標識協会評議員
- ② 日本鳥類標識協会ホームページ委員会副委員長
- ③ 日本鳥類標識協会庶務幹事
- ④ 日本鳥学会保護委員委員長
- ⑤ 日本鳥学会企画委員
- ⑥ 日本鳥学会風力発電等対応ワーキンググループ
- ⑦ 龍谷大学非常勤講師

千田万里子

- ① 日本鳥類標識協会庶務幹事

鶴見みや古

- ① 千葉市環境影響評価審査会委員
- ② ヒトと動物の関係学会評議員
- ③ 日本野鳥の会理事
- ④ 我孫子市鳥の博物館展示リニューアル基本計画検討委員会委員

富田直樹

- ① 日本鳥類標識協会 庶務幹事
- ② 日本鳥類標識協会「日本鳥類標識協会誌」編集委員
- ③ 日本鳥学会英文誌「Ornithological Science」編集委員
- ④ 日本獣医生命科学大学非常勤講師
- ⑤ 八戸市天然記念物蕪島ウミネコ繁殖地緊急調査検討会議委員
- ⑥ 「東京都の保護上重要な野生生物種（鳥しょ部）2011年版」の「伊豆諸島」の改定に向けた専門部会委員
- ⑦ 展示協力：写真提供および海鳥のプラスチック汚染資料貸出. 豊橋市自然史博物館第37回特別企画展「カイジウ博2023－海で暮らす仲間たち－」（2023年7月14日～9月3日）

仲村昇

- ① 国土交通省河川水辺の国勢調査 スクリーニング委員会委員
- ② 国土交通省河川水辺の国勢調査 アドバイザー
- ③ 日本鳥類標識協会庶務幹事
- ④ 国交省利根川下流人と自然の調和する川づくり委員会委員
- ⑤ 国交省鳥衝突防止対策検討会委員
- ⑥ 国交省利根川河口周辺の河川改修に関する検討委員会委員
- ⑦ (一財) 航空保安協会理事

平岡考

- ① 日本鳥学会日本産鳥類記録委員
- ② 日本鳥学会鳥類分類委員

- ③ 日本鳥学会目録編集委員
- ④ 我孫子市国際交流協会理事
- ⑤ 松戸市緑推進委員
- ⑥ ジャパン・バード・フェスティバル実行委員
- ⑦ 東京動物園友の会「どうぶつと動物園」編集委員
- ⑧ 我孫子市鳥の博物館展示リニューアル基本計画検討委員会委員

水田拓

- ① 奄美希少野生生物保護増殖検討会検討委員
- ② 鳥インフルエンザ等野鳥対策に係る専門家グループ会合専門家
- ③ 奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産地域森林管理タスクフォース検討会委員
- ④ 奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産地域ロードキル対策タスクフォース会議委員
- ⑤ 奄美大島森林生態系保全管理検討会委員
- ⑥ 千葉県環境影響評価委員会委員
- ⑦ 日本鳥学会英文誌編集委員長
- ⑧ 山階鳥類学雑誌編集委員
- ⑨ 「野生動物と社会」学会誌編集委員
- ⑩ マダガスカル研究懇談会ニュースレター編集委員
- ⑪ 日本鳥類標識協会庶務幹事
- ⑫ マダガスカル研究懇談会世話役
- ⑬ 日本鳥学会代議員
- ⑭ UniBio Press 理事
- ⑮ NPO 法人奄美野鳥の会理事
- ⑯ 日本鳥類保護連盟評議員
- ⑰ バードリサーチ調査研究支援プロジェクト審査員
- ⑱ 公益信託商船三井モーリシャス自然環境回復保全・国際協力基金運営委員
- ⑲ 中央環境審議会自然環境部会臨時委員
- ⑳ 山階武彦助成事業選考委員会委員
- ㉑ 東邦大学非常勤講師
- ㉒ 東邦大学客員教授

山崎剛史

- ① 日本鳥学会目録編集委員会副委員長
- ② 日本鳥学会鳥類分類委員会委員
- ③ 日本鳥学会英文誌編集委員
- ④ 日本鳥学会渉外担当（自然史学会連合担当）
- ⑤ 山階鳥類学雑誌編集委員

油田照秋

- ① 山階鳥類学雑誌 編集委員
- ② 日本鳥類標識協会 庶務幹事
- ③ 日本鳥類標識協会誌 編集委員
- ④ 世界アルバトロスデー実行委員

山階鳥類研究所

- ① 2030 生物多様性枠組み実現日本会議（J-GBF）
- ※山階鳥研が委員会に構成委員の関係団体として参画

III-6

所蔵資料の利用実績・その他

1. 標本

標本閲覧者数 145件（のべ202人）

2. 図書資料

図書資料閲覧者数 16件

文献複写 16件245文献

資料貸出・提供

- ・ 領土・主権展示館 地方巡回展 in 首都圏 川口会場 企画展「近代日本の夜明けと離島の編入－明治日本のフロンティア－」（2023年10月9日～10月15日）に領土・主権展示館「近代日本の夜明けと離島の編入－明治日本のフロンティア－」展（2023年1月24日～4月9日）に情報提供して作成したパネル一式、アホウドリ羽毛布団写真、アホウドリの胃内容物写真、鳥島千歳浦写真を提供。
- ・ 港区立郷土歴史館 令和5年度特別展「ある図案化の仕事－宮中の染織デザイン」（2023年10月14日～12月10日）に銀製花盛器1点（学習院大学史料館寄託）を貸出。
- ・ 茨城県立歴史館 企画展3「音楽家・松平頼則（よりつね）とその時代」（2023年10月28日～12月7日）に原画1点を画像提供。
- ・ 領土・主権展示館 地方巡回展 in 福岡 企画展「近代日本の夜明けと離島の編入－明治日本のフロンティア－」（2024年3月1日～3月10日）に「近代日本の夜明けと離島の編入－明治日本のフロンティア－」展（2023年1月24日～4月9日）に情報提供して作成したパネル一式、アホウドリ羽毛布団写真、アホウドリの胃内容物写真を提供。

3. 広報

- ・ NHKアーカイブス『NHK特集「悲劇の巨鳥 アホウドリはよみがえるか」』が2023年6月5日（BSP/BS4K）、6月16日（BS4K再放送）に再放送され、事前に、その中で山階芳麿の出演があるほか、山階芳麿の写真、昭和4年の鳥島の映像が使われていることの連絡受け。
- ・ 「わけあって絶滅しました。展」（広島マリーナホップ、2023年7月15日～9月3日）にアホウドリのデコイ1点を貸出。
- ・ 「『現代の名工』に学ぶバードカービング&バードウォッチング」（猛禽類保護センター鳥海イヌワシみらい館、2023年7月30日、講師：内山春雄山階鳥研特任専門員）の当日配布資料のために、山階鳥研ウェブサイト掲載の「アホウドリのデコイの木型と内山春雄氏（1990年）」、「アホウドリの誘致のため伊豆諸島鳥島に設置されたデコイ」の2点の写真を貸出。
- ・ 「海の宝アカデミックコンテスト2023」（主催：北海道大学大学院水産科学研究院）に高校生が応募する電子紙芝居のために、往年の小笠原諸島父島で撮影されたアホウドリの乱獲の状況を示した写真（NHKウェブサイト「サイカル」掲載。山階鳥研所蔵）1点を貸出。
- ・ 日本テレビ「ゼロイチ」（2023年9月23日放送）の「気になる新人さん」コーナーのため、山階鳥研のブログ掲載のエトピリカの嘴の鞘がはずれることを示す写真1点を貸出。
- ・ 読売新聞の絶滅危惧のウモウダニの記事のため、アホウドリの写真1点を貸出。
- ・ 「霞会館150年史」（2024年6月1日発行、霞会館）のためにジャン・デラクール賞メダル、山階芳麿博士肖像、カンムリツクシガモ標本等の写真計5点を貸出。
- ・ 日本海洋教育学会大会第一回大会（2024年2月11～12日）で高校生が行うポスター発表のため、アホウドリの保護活動その他の写真4点を貸出。

4. データアクセス数

本年度のアクセス数は標本データベースがのべ667,375人、蔵書検索（OPAC）のべ300人であった。

5. 鳥類標識調査データ利用状況

鳥類標識調査データ利用申請書の提出を求め、審査し必要なデータの提供を行っている。

今年度は56件の申請があり、目的別にみると研究目的が38件、行政資料が4件、教育・啓発目的が9件、保全保護関係が1件、アセスメント関係が4件であった。

6. その他

博物館実習生受入

- ・ 東京農業大学 地域環境科学部 地域創成科学科4年生1名

III-7

新聞・雑誌・メディア記事掲載記録

●新聞・テレビニュース・ネットニュース等での報道や協力

山階鳥研または所員個人が記事にコメントをした場合はそのことを記した。山階鳥研の関係者名について特に記述がない場合は、山階鳥研またはその所員の活動についての報道であるか、山階鳥研が何らかの形で記事や催しに協力した記事であることを示す。日付は発行日、放送日のほか対応した日の場合がある。

<書籍紹介>

- ・ 私の1冊, 江戸の野鳥保護 思いはせる (読賣新聞 千葉版, 2023/4/7, 小川博所長取材受)

<皇居鳥類相調査>

- ・ 皇居の森 野鳥育む オオタカ, フクロウ繁殖 (読賣新聞 (夕刊), 2023/4/5)
- ・ 皇居の森は野鳥の「ゆりかご」…オオタカやフクロウも繁殖, 天皇陛下の妹・黒田清子さんら確認 (読賣新聞オンライン (ネット), 2023/4/5)
- ・ Imperial estate forests shelter rare birds (The Japan News, 2023/4/13)
- ・ Japan's Imperial Palace Forests Prove Haven for Rare Birds (The Japan News (ネット), 2023/4/13)

<ヤンバルクイナ関連>

- ・ 脅かされる鳥の未来 ヤンバルクイナに新たな脅威 (信濃毎日新聞 (夕刊), 2023/5/11, 尾崎清明副所長コメント)
- ・ 2023年度助成先視察レポート ヤンバルクイナの保全活動(公益財団法人 JAC環境動物保護財団ウェブサイト (ネット), 2023/6/15)
- ・ 名護にクイナ「画期的」県が写真公表 絶滅リスク減に期待 (沖縄タイムス (朝刊), 2023/9/28, 尾崎清明副所長コメント)
- ・ クイナ 東村平良に「戻った」大城さん撮影 (沖縄タイムス (朝刊), 2023/9/30, 尾崎清明副所長コメント)

<ガン類関連>

- ・ シジュウカラガンの“渡り”ルートが判明 日露米の共同放鳥地が新繁殖地に (環境展望台 (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 絶滅危惧種・シジュウカラガン 繁殖地と渡りルートを初解明!さらなる繁殖拡大を (宮城・大崎市) (FNNプライムオンライン (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 渡り鳥, 2000キロを行き来 (愛媛新聞ONLINE (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 「千島列島エカルマ島まで渡り再び日本に戻ってきた」絶滅危惧種シジュウカラガンの渡り経路判明 宮城 (TBS NEWS DIG (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000キロを行き来 (カナコロ (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (岩手日報 (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (沖縄タイムス (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (河北新報ONLINE (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (北國新聞DIGITAL (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (共同通信 (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)

- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (京都新聞 (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (高知新聞PLUS DIGITAL (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (神戸新聞NEXT (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (埼玉新聞 (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (佐賀新聞 (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (山陽新聞デジタル (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (下野新聞SOON (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (千葉日報オンライン (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (中國新聞デジタル (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (デイリースポーツonline (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (徳島新聞 (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (奈良新聞 (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 (西日本新聞me (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (nippon.com (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (福島民報 (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (北海道新聞デジタル (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (47NEWS (ネット), 2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 絶滅危惧ガン 経路初確認 (日本経済新聞 (ネット), 2023/5/23, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 絶滅危惧ガン, 経路初確認 宮城一千島列島, 2000 キロ行き来 (日経電子版 (ネット), 2023/5/23, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 (茨城新聞クロスアイ (ネット), 2023/5/23, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (信濃毎日新聞デジタル (ネット), 2023/5/23, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡り鳥, 2000 キロを行き来 絶滅危惧種のガン, 経路を初確認 (ライブドアニュース (ネット), 2023/5/23, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 渡りルート 2000 キロ 初の解明 絶滅危惧種シジュウカラガン 保護する会, 繁殖活動に利用 (河北新報, 2023/5/23, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ シジュウカラガンの渡りルート 2000 キロ, 初の解明 宮城県栗原市の保護する会, 繁殖活動に利用へ (河北新報ONLINE (ネット), 2023/5/23, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ シジュウカラガンが宮城「七北田低地」へ舞い降りる日 (産経新聞 (ネット), 2023/6/8, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ 野付湾で天然記念物コクガンの調査 国内最大級の渡りの中継地(NHK北海道NEWS WEB(ネット), 2023/11/12, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ コクガン繁殖地はロシア・レナ川河口 山階鳥類研究所の研究者が特定 (北海道新聞 (ネット), 2023/11/13, 澤祐介研究員の調査の紹介)

- ・ コクガン繁殖地はロシア・レナ川河口 山階鳥類研究所の研究員が特定（北海道新聞（ネット）, 2023/11/13, 澤祐介研究員の調査の紹介）
- ・ 標識つけたコクガン見つかる（三陸新報（ネット）, 2023/12/28, 澤祐介研究員協力）

<鳥類標識調査関連>

- ・ 大分市の高島でウミネコの標識調査 バンダーの中村さんら, 長年地道に活動（大分合同新聞（ネット）, 2023/6/16）
- ・ この貝どこから来た? 渡り鳥に乗って4千キロ, 日本への過酷な旅（朝日新聞デジタル（ネット）, 2023/8/7）
- ・ 元気力 渡り鳥に足環 世界と文通（朝日新聞デジタル（ネット）, 2023/10/25）
- ・ 鳥の識別方法学ぶ 北区・福島潟 後継育成の講習（新潟日報, 2023/10/31）
- ・ 新潟市北区の福島潟で鳥類観測ステーションがリニューアル, 渡り鳥を調査中…だけじゃない! 実は全国で10カ所の「1級」施設, 専門家で育てる“虎の穴”の顔も（新潟日報デジタルプラス（ネット）, 2023/11/5）

<鳥インフルエンザ日韓共同研究関連>

- ・ 韓日の専門機関・自治体 鳥インフルエンザで共同対応へ（聯合ニュース（ネット）, 2023/6/19）
- ・ 韓日の専門機関・自治体 鳥インフルエンザで共同対応へ（wowKorea（ネット）, 2023/6/19）
- ・ 野鳥の鳥インフル対策で出水市が韓国の国立機関と協定（朝日新聞デジタル（ネット）, 2023/6/23）
- ・ 出水市 ツル経由地の韓国と協定 調査結果などの情報を共有へ（NHK NEWS WEB（ネット）, 2023/6/23）

<ベニアジサシ関連>

- ・ ノラネコ 絶滅危惧の鳥捕食 うるまの漁港 飛来したベニアジサシ「屋外ネコ減を」専門家警鐘（沖縄タイムス, 2023/6/28, 尾崎清明副所長資料提供）
- ・ ノラネコ, 絶滅危惧種を10分で食べ終える 防波堤に並ぶベニアジサシ狩る うるま市の漁港「屋外ネコ減を」専門家が警鐘（沖縄タイムス（ネット）, 2023/6/28）
- ・ ベニアジサシ 豪から飛来 山階研「ネコ捕食 初確認」愛護団体「適正飼養を」（沖縄タイムス（朝刊）, 2023/7/1, 尾崎清明副所長メント）
- ・ 沖縄でネコに食べられたベニアジサシは「長寿」の21歳 オーストラリアから来た絶滅危惧種の鳥だった（沖縄タイムス（ネット）, 2023/7/2）

<山階賞関連>

- ・ 「第23回山階芳麿賞」を公募（朝日新聞, 2023/10/21）
- ・ 「第23回山階芳麿賞」を公募（朝日新聞デジタル（ネット）, 2023/10/21）
- ・ 「第23回山階芳麿賞」を公募（朝日新聞社ウェブサイト（ネット）, 2023/10/21）

<アホウドリ関連>

- ・ 山階鳥研, アホウドリ完全復活プロジェクトの寄付サポーターを緊急募集（環境展望台（ネット）, 2023/11/1）
- ・ 絶滅危惧種アホウドリ 現地調査・保全活動のサポーター募集開始（山階鳥類研究所）（いきものわ（ネット）, 2023/11/13）
- ・ アホウドリ復活に支援を 山階鳥研, 資金難で募集（デーリー東北デジタル（ネット）, 2024/1/6）
- ・ アホウドリ復活支援を 山階鳥研 資金難で寄付募る（琉球新報デジタル（ネット）, 2024/1/7）
- ・ アホウドリ復活へ支援を 山階研 資金難 保全活動ピンチ（沖縄タイムス, 2024/1/8）
- ・ アホウドリ復活へ支援を 山階研 資金難 保全活動ピンチ（沖縄タイムス+プラス（ネット）, 2024/1/8）
- ・ アホウドリ復活に支援を/山階鳥研 資金難で募集（紀伊民報AGARA（ネット）, 2024/1/10）
- ・ アホウドリ保全 資金難 個体数増え公的予算縮小「完全復活に向け支援を」（日本経済新聞（夕刊）, 2024/1/13）

- ・アホウドリ保全, 資金難 個体数増え公的予算縮小「完全復活に向け支援を」(日経電子版(ネット), 2024/1/13)
- ・アホウドリ復活に支援を 我孫子の山階鳥研, 資金難で募集(千葉日報(ネット), 2024/1/21)
- ・事業見直しでアホウドリの保全活動危機, サポーター2千人募集(朝日新聞デジタル(ネット), 2024/3/15)

<ニホンオオカミ関連>

- ・How a 13-year-old discovered a possible Japanese wolf specimen (The Japan Times (ネット), 2024/2/22, 小林さやか研究員研究成果紹介)
- ・Girl uncovers possible Japanese wolf specimen (The Japan Times, 2024/2/26, 小林さやか研究員研究成果紹介)
- ・はく製は絶滅したニホンオオカミか 気づいたのは都内の中学生 (NHK NEWS WEB (ネット), 2024/2/27, 小林さやか研究員研究成果紹介)
- ・「ニホンオオカミのはく製かもしれない」中学生の研究でわかる (NHK NEWS WEB EASY(ネット), 2024/2/28, 小林さやか研究員研究成果紹介)
- ・国立科学博物館のはく製「ニホンオオカミ」では?“東京都内の中学生が最初に気づく『ピピッときました』”(NHK 首都圏ナビ(ネット), 2024/2/28, 小林さやか研究員研究成果紹介)
- ・はく製は絶滅したニホンオオカミか 中学生が論文発表 (NHKサイカルジャーナル(ネット), 2024/3/8, 小林さやか研究員研究成果紹介)
- ・「おわーって感じ」国立科学博物館のはく製の正体を小4の時に見抜く 都内の女子中1生がニホンオオカミの論文発表 (FNNプライムオンライン(ネット), 2023/3/25, 小林さやか研究員研究成果紹介)

<山階鳥研(所員)コメント>

- ・恐竜が仲間と意思疎通 体色や鳴き声を使って求愛・連絡 常識超える新・恐竜図鑑①(日本経済新聞(ネット), 2023/4/22, 森本元研究員コメント)
- ・中アのライチョウ 進む繁殖(信濃毎日新聞, 2023/11/26, 尾崎清明副所長コメント)
- ・ライチョウ, 中央アルプスで繁殖進む ひなを守る「ケージ保護」が一定の成果(信濃毎日新聞デジタル(ネット), 2023/11/26, 尾崎清明副所長コメント)
- ・水鳥が謎の「コマネチ」ポーズ, 何のため? 福岡・久留米市の高良川で撮影(西日本新聞me(ネット), 2023/11/29, 尾崎清明副所長コメント)
- ・大陸からの「迷子」か, タンチョウ幼鳥ひらり…京都・与謝野(読賣新聞オンライン(ネット), 2024/1/20, 尾崎清明副所長コメント)

<その他新聞取材記事>

- ・トキと野鳥だけ診る動物病院, 繁殖の「第一人者」が開設…保護センター退職後も「ライフワークに」(読賣新聞オンライン(ネット), 2023/5/20)
- ・トキを守る これからも 保護センター32年勤務・金子獣医師 退職後 佐渡に専門病院(読賣新聞, 2023/5/21)
- ・シマフクロウの森再生を 浜中の団体が環境意見交換会【浜中】(釧路新聞, 2023/12/2)
- ・シマフクロウの森再生を 浜中の団体が環境意見交換会【浜中】(釧路新聞電子版(ネット), 2023/12/2)
- ・秋篠宮さま 村本さんお見舞い 朱鷺資料館 月内は休館(北陸中日新聞(朝刊), 2024/1/11)
- ・秋篠宮さま 村本さんお見舞い 朱鷺資料館 月内は休館(中日新聞(ネット), 2024/1/11)
- ・トキすみ続ける出雲へ 専門家講演や座談会(山陰中央新報, 2024/2/26)
- ・トキすみ続ける出雲へ 専門家講演や座談会(山陰中央新報デジタル(ネット), 2024/2/26)

<テレビ・ラジオへの出演・コメント・協力>

- ・日本テレビ「News Every」(2023/4/5, 習志野市の鳥, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)
- ・日本テレビ「世界の果てまでイッテQ」(2023/4/6, インドネシアの鳥, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)

- ・ NHK「ヴィランの言い分“その嫌われもの”, 本当に“悪”なのか!？」(2023/4/15, カラス, 森本元 研究員, 制作協力・画像提供)
- ・ 仙台放送「絶滅危惧種・シジュウカラガン 繁殖地と渡りルートを初解明!さらなる繁殖拡大を〈宮 城・大崎市〉」(2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ khb東日本放送「絶滅の恐れシジュウカラガン 渡りのルートと繁殖地が判明」(2023/5/22, 澤祐介 研究員の調査の紹介)
- ・ tbc東北放送「千島列島エカルマ島まで渡り再び日本に戻ってきた」絶滅危惧種シジュウカラガン の渡り経路判明 宮城」(2023/5/22, 澤祐介研究員の調査の紹介)
- ・ テレビ東京「ありえへん∞世界」(2023/5/22, シチメンチョウ等, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)
- ・ NHK「ニュースLIVE!ゆう5時」(2023/5/24, カナリア諸島, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)
- ・ NHK「ハワイの暮らし優しい時間」(2023/6/1, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)
- ・ NHK「さわやか自然百景」(2023/6/29, 北海道赤岩青巖峡の鳥, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)
- ・ NHK「ハワイの暮らし優しい時間」(2023/7/15, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)
- ・ NHK「さわやか自然百景」(2023/7/28, 釧路町の鳥, 平岡考専門員, 鳥の生態について相談対応)
- ・ テレビ朝日「科捜研の女 season23」(2023/8/23, 鳥と話す殺人犯!?, 水田拓自然誌・保全研究Dなど, 情報提供など)
- ・ NHK「さわやか自然百景」(2023/9/3, 釧路町, 齋藤武馬研究員, 鳥の生態について)
- ・ NHK「さわやか自然百景」(2023/9/19, 一色干潟の鳥, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)
- ・ NHK「ダーウィンが来た」(2023/9/21, 「生き物たちの恋の作法」, 平岡考専門員, 鳥の分類につい て助言)
- ・ NHK「さわやか自然百景」(2023/9/24, 三陸海岸三貫島, 佐藤文男フェロー, 撮影同行や案内)
- ・ 日本テレビ「ゼロイチ」(2023/10/4, 気になる仕事の新人さん, エトピリカの写真の貸出)
- ・ テレビ東京「所でナンジャこりゃ!？」(2023/10/6, コロンビアの鳥, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)
- ・ NHK「さわやか自然百景」(2023/10/8, 冠島の鳥, 富田直樹研究員, 鳥の生息状況について)
- ・ テレビ東京「所でナンジャこりゃ!？」(2023/10/13, 平岡考専門員, 鳥の種同定確認)
- ・ NHK「NHK北海道」天然記念物 中継地の野付湾で渡り鳥「コクガン」調査 (2023/11/12, 澤祐介 研究員コメント)
- ・ NHK「いわチャン」(2023/11/15, 佐藤文男フェロー, 鳥の生息状況について)
- ・ NHK「にっぽん縦断こころ旅」(2023/11/16, 福岡の鳥, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)
- ・ NHK「さわやか自然百景」(2023/11/21, 北見山地の鳥, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)
- ・ NHK「おはよう日本」"アホウドリ" 資金難で保全計画に危機 (2023/11/22, 水田拓自然誌・保全 研究Dコメント)
- ・ NHK「NHK WORLD JAPAN」Climate change impacts migratory geese (2023/12/1, 澤祐介研究 員コメント)
- ・ NHK「にっぽん縦断こころ旅」(2023/12/7, 山形県寒河江の鳥, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)
- ・ FM御殿場「つねさんの玉手箱」(2023/1/11, 鶴見みや古文化資料Dコメント)
- ・ NHK「沼にハマってきいてみた」(2024/2/24, 野鳥撮影沼, 平岡考専門員, 鳥の種同定確認など)
- ・ NHK大河ドラマ「光る君へ」(2024/2/27, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)
- ・ NHK「おはよう日本」はく製は絶滅したニホンオオカミか 気づいたのは都内の中学生 (2024/2/28, 小林さやか研究員研究成果紹介)
- ・ テレビ朝日「ザワつく!金曜日」(2024/3/4 (オウサマペンギン, 平岡考専門員, 鳥の同定確認)
- ・ フジテレビ「Live News イット!」ニホンオオカミで大発見 ピンときた時は小学4年生 (2024/3/20, 小林さやか研究員研究成果紹介)
- ・ NHK「ニュースで学ぶ『現代英語』」“はく製はニホンオオカミか”中学生が論文 (2024/3/29, 小 林さやか研究員研究成果紹介)

<その他協力>

- ・ スペシャルインタビュー「公益財団法人山階鳥類研究所研究員 小林さやか様」(東京都 沖ノ鳥島・ 南鳥島 ウェブサイト (ネット), 2024/3/27, 小林さやか研究員研究成果紹介)
- ・ オオバの社会貢献活動 (株式会社オオバウェブサイト (ネット), 環境問題への取り組みの一環とし て山階鳥研への支援を紹介)

- ・ デジタル3Dコンテンツ「尖閣諸島の自然」(領土・主権展示館, 平岡考専門員, アホウドリのクイズ・VRの監修)

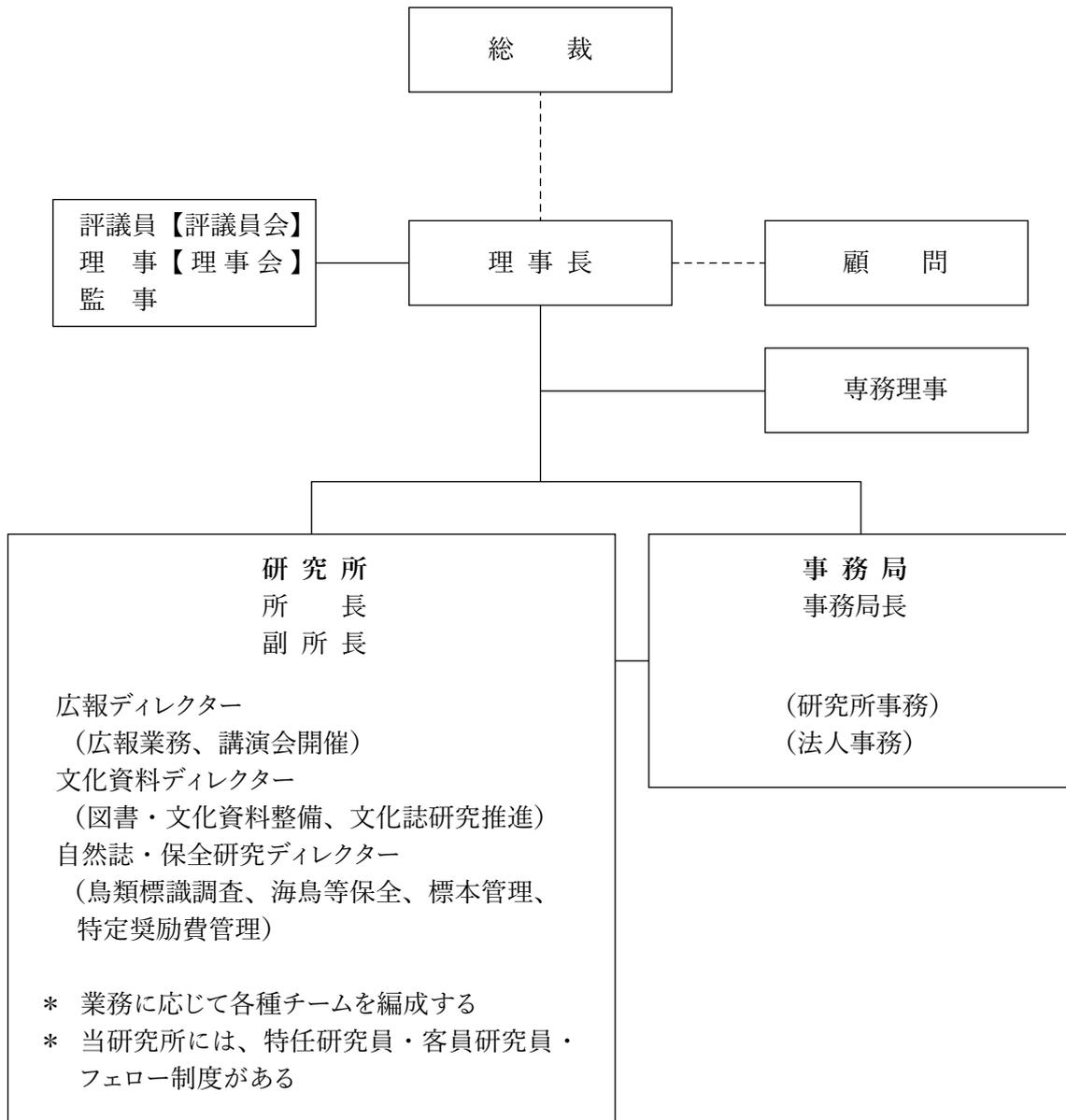
IV
資料編

IV-1

公益財団法人山階鳥類研究所

組織図

(令和6年3月31日現在)



() 内は主な業務内容を表記

当研究所は独立行政法人日本学生支援機構法施行令で指定された研究所等に該当する

IV-2

人員構成

(令和6年3月31日現在)

総裁	秋篠宮文仁	博士（理学）
顧問	島津久永	非常勤
理事長	壬生基博	非常勤、理事
副理事長	(空席)	
専務理事	林 良博	非常勤、農学博士、理事
研究所長	小川 博	非常勤、博士（畜産学）、理事
研究所副所長	尾崎清明	非常勤、博士（理学）、理事
事務局長	棚橋 伸	常勤
シニアフェロー	奥野卓司	非常勤、博士（学術）、理事

●研究所（常勤 15名）

鶴見みや古	文化資料ディレクター	専門員
水田 拓	自然誌・保全研究ディレクター	研究員、博士（理学）
浅井芝樹	研究員	博士（理学）
岩見恭子	研究員	
小林さやか	研究員	博士（農学）
齊藤武馬	研究員	博士（理学）
澤 祐介	研究員	
神保理香	広報担当	
千田万里子	専門員	
富田直樹	研究員	博士（理学）
仲村 昇	研究員	
平岡 考	参与（専門員）広報	
森本 元	研究員	博士（理学）
山岡容子	広報担当	
山崎剛史	研究員	博士（理学）
油田照秋	研究員	博士（環境科学）

●事務局（所属員 常勤5名）

棚橋 伸	局長
菅原眞理	主任 庶務担当
谷部百合子	経理担当
高橋敏之	経理担当

(以下、総裁、顧問、シニアフェローを除く)

●人員数：理事長1、専務理事1、所長1、副所長1、所員20 合計24

●性別：男性16、女性8 合計24

●博士号人員数：専務理事1、所長1、副所長1、所員8
合計11

IV-3

評議員名簿

(令和6年3月31日現在)

現在数9名

	氏名	現職／前職	常勤／非常勤
評議員	徳川齊正	(公財) 徳川ミュージアム理事長	非常勤
〃	鳥井信吾	サントリーホールディングス(株) 代表取締役副会長	〃
〃	柳澤紀夫	(本法人評議員)	〃
〃	赤木 攻	大阪外国語大学名誉教授	〃
〃	小宮輝之	(本法人評議員) (元 恩賜上野動物園園長)	〃
〃	根津公一	(公財) 根津美術館 理事長 館長 (株) 東武百貨店 名誉会長	〃
〃	越智光夫	広島大学長	〃
〃	堀内光一郎	富士急行(株) 代表取締役社長	〃
〃	板東久美子	日本赤十字社常任理事	〃

IV-4 役員名簿

(令和6年3月31日現在)

現在数11名

役職名	氏名	現職名	常勤／非常勤
理事長	壬生基博	森ビル（株）特別顧問	非常勤
専務理事	林 良博	(独) 国立科学博物館顧問 (農学博士)	〃
理事	小川 博	本財団研究所長 東京農業大学名誉教授 博士 (畜産学)	〃
〃	奥野卓司	本財団シニアフェロー 関西学院大学名誉教授 博士 (学術)	〃
〃	尾崎清明	本財団研究所副所長 博士 (理学) (福) かしわ学園代表理事	〃
〃	黒田玲子	中部大学卓越教授 東京大学名誉教授 (理学博士)	〃
〃	進士五十八	福井県政策参与／福井県里山里海湖研究所長 福井県立大学名誉教授・元学長 東京農業大学名誉教授 (農学博士)	〃
〃	高橋 進	(一財) 進化生物学研究所 評議員 「生き物文化誌学会」常任理事	〃
〃	中村浩志	(一財) 中村浩志国際鳥類研究所代表理事 信州大学名誉教授 (理学博士)	〃
〃	山田 健	サントリーホールディングス (株) サステナビリティ経営推進本部チーフスペシャリスト	〃
〃	吉見 俊哉	國學院大学観光まちづくり学部 教授	〃

現在数2名

役職名	氏名	現職名	常勤／非常勤
監事	小宮宗太郎	公認会計士	非常勤
〃	北條政利	元本財団事務局長	〃

IV-5

特任研究員・特任専門員名簿

(令和6年3月31日現在)

特任研究員 (五十音)

氏名	職名	研究テーマ
上田恵介	立教大学名誉教授	鳥類の行動生態学・進化生態学に関する研究
上塚浩司	茨城大学農学部食生命科学科 動物保健衛生学研究室 教授	野鳥の腸内細菌叢の研究
遠藤秀紀	東京大学総合研究博物館教授	鳥類の運動機能に関する比較機能形態学 的研究
岡島秀治	東京農業大学名誉教授	鳥類と昆虫の関係に関する研究
小城春雄	北海道大学名誉教授	海鳥類と水産資源の研究
佐藤克文	東京大学大気海洋研究所教授	水棲動物の生体力学研究
高木昌興	北海道大学大学院理学研究院 生物科学部門教授	鳥類の行動生態学・系統地理学に関する 研究
高田 勝	農業生産法人(有) 今帰仁アグー 代表	地域固有文化と鳥類の多面的関係の 研究
中島 功	東海大学医学部医学科客員教授 星槎大学特任教授	鳥インフルエンザ感染個体のスクリー ニングに関する共同研究
中村浩志	(一財) 中村浩志国際鳥類研究所代表理事 信州大学名誉教授	野生鳥類の生態に関する研究
西海 功	(独) 国立科学博物館 動物研究部研究主幹	鳥類の分子系統地理学・DNAバーコー ディング事業に関する共同研究
長谷川政美	統計数理研究所名誉教授	鳥類の系統に関する研究
長谷川雅美	東邦大学名誉教授	島嶼における爬虫類の進化と生態
福田勝洋	名古屋大学名誉教授 (公社) 日本実験動物協会 会長	1. 鳥類羽毛の微細形態データの集積と 利用法の検討 2. 鳥類血管系の解析
藤巻裕蔵	帯広畜産大学名誉教授	日本・ロシア産鳥類の鳥相、分類、系 統地理学に関する研究
真鍋 真	(独) 国立科学博物館 副館長・研究調整役	古生物学に関する研究
綿貫 豊	北海道大学水産科学研究院教授	海洋性鳥類の生態研究
吉田成	東京工芸大学名誉教授	写真資料の保存とその史科学的研究

特任専門員（五十音）

氏名	職名又は前職	
内山春雄	厚生労働省 卓越技能者 現代の名工 千葉県指定伝統工芸品 楽堂象嵌 我孫子市名誉市民 ほか	バードカービング作成技術の普及及び保全研究・教育への応用
岡村正章	文化放送『朝の小鳥』収録・構成担当	録音・音響関連資料整備についてのアドバイス
北條政利	元（公財）山階鳥類研究所事務局長	事務局長の経験、ビジネス英語力・交渉力を生かした研究者へのサポート

客員研究員（五十音）

氏名	職名	研究テーマ
蘇 雲山	元（一財）環境文化創造研究所主席 研究員	①人とトキが共生できる自然環境・社会環境に関する研究 ②大陸におけるコウノトリ繁殖地・越冬地の情報研究
園部浩一郎	自営	日本の鳥学に係わる鳥類画の調査・整理および研究

フェロー（五十音）

氏名	職名／前職	研究テーマ
岡 奈理子	元（公財）山階鳥類研究所研究員	
黒田 清子	玉川大学教育博物館 外来研究員	カワセミの生態行動調査 グールド鳥類図譜調査 2017.11.1～2027.10.31
米田 重玄	元（公財）山階鳥類研究所研究員	
佐藤 文男	元（公財）山階鳥類研究所研究員	
茂田 良光	元（公財）山階鳥類研究所研究員	鳥類の渡り・識別・分類
吉安京子	元（公財）山階鳥類研究所専門員	

IV-6

文部科学省科学研究費助成金（特定奨励費）

意見交換会 記録

鳥研事5 第18号
令和5年9月28日

公益財団法人山階鳥類研究所 科研費補助金（特定奨励費）総括班
特任研究員、特任専門員、客員研究員、フェロー 各位

公益財団法人山階鳥類研究所
所長 小川博

令和5年度文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）
意見交換会 開催のお知らせ

拝啓

日頃より当研究所の活動にご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

当研究所は平成23年度以降、毎年秋に特任研究員とのカジュアルな意見交換会を開催してまいりました。当研究所全体の研究成果をご報告し研究所の活動に対するご理解を深めていただくとともに、研究の方向性について検討することが目的です。平成27年度からは科学研究費補助金（特定奨励費）総括班メンバーにもご出席をいただいております。私どもにとって大変有意義な会合でありますので本年も同様に下記のとおり実施したいと考えております。この会には当法人総裁秋篠宮殿下もご臨席の予定です。

今回の意見交換会では「特定奨励費」のこれまでの経緯についてご説明し、この研究事業の在り方と次期フェーズで取り組もうとしている広報ならびに人材育成について皆様のご意見をお伺いしたいと考えています。

自然誌・保全研究ディレクター水田拓より趣旨説明をした後、浅井芝樹研究員、澤祐介研究員、山岡容子広報担当の3名が発表いたします。内容については同封の「意見交換会発表要旨」をご覧くださいければ幸いです。

新型コロナウイルス感染症は5類感染症へと移行したことから対面での開催も考えましたが、できるだけ多くの方にご参加いただけるよう、オンラインによる開催といたしました。

ご多忙中とは存じますが、是非ご出席の程よろしくお願い申し上げます。

敬具

記

行事名：令和5年度 文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）意見交換会

日時：令和5年10月6日（金）13：30～16：40 オンライン開催

zoom URLのお知らせ：日程が近くなりましたら配信いたします

以上

意見交換会プログラム

日時：令和5年（2023年）10月6日（金）13:30～16:40（オンライン開催）

全体進行：尾崎清明（山階鳥類研究所副所長）

- 13:30 – 13:35 ご挨拶
秋篠宮文仁（山階鳥類研究所総裁）
- 13:35 – 13:40 開会の挨拶
小川 博（山階鳥類研究所所長）
- 13:40 – 13:45 趣旨説明
水田 拓（山階鳥類研究所自然誌・保全研究ディレクター）
- 13:45 – 14:10 特定奨励費による成果と課題
浅井芝樹（山階鳥類研究所研究員）
- 14:10 – 14:20 —— 休憩（10分） ——
- 14:20 – 14:45 これからの日本の鳥学を支える人材の育成を目指して
澤 祐介（山階鳥類研究所研究員）
- 14:45 – 15:10 鳥学の重要性を幅広い層に伝える広報活動ーウェブサイトと動画の活用
山岡容子（山階鳥類研究所広報）
- 15:10 – 15:20 —— 休憩（10分） ——
- 15:20 – 16:35 総合討論（75分）
司会：水田 拓（山階鳥類研究所自然誌・保全研究ディレクター）
- 16:35 – 16:40 閉会の挨拶
壬生基博（山階鳥類研究所理事長）

※発表の後に質疑応答を含みます。

意見交換会 趣旨説明

山階鳥類研究所における鳥学関連の標本・資料の収集、保存、管理、公開などの研究・事業は、文部科学省科学研究費補助金の「特定奨励費」によって支えられてきました。本年度は、第7フェーズの「鳥の学問を発展させる資料の拡充・管理・公開に関する研究事業」の最終年度に当たります。このフェーズでは、標本、資料の更なる拡充と、適切な管理の下、自然科学はもとより、文化、歴史や芸術なども含んだ幅広い学問領域の研究者や、市井のこれらの分野に関心をもつ人々の利用に供することのできるように公開していくことを目的に進められてきました。これらの目的は、「特定奨励費」による事業において基礎となる事項であります。これらを踏まえ、次フェーズでは山階鳥類研究所がこれまで培ってきた、鳥の学問に関する資料、知識、技術等をいかに次世代に伝えるのか、主に広報と人材育成について焦点をあてて進めていきたいと考えています。

本研究所の活動は、特定奨励費によるもの以外に、環境省、自治体、公益財団法人、企業などから多数の研究助成、業務委託をいただき、様々な研究、調査、社会活動等を継続しています。当研究所の多岐にわたる活動の中で蓄積した、鳥学に関する有形無形の様々な資料、知識、技術等を社会に還元していくことは、公益財団法人である本研究所の使命であると考えます。

特定奨励費による事業は、当研究所の活動の中で大きな意味を持っており、毎年、意見交換会や研究成果発表会を開催して皆様のご意見をいただき改善に努めております。第7フェーズは今年が最終年度でありますことから、その成果発表と総括については研究成果発表会の場でご意見をいただくこととし、今回の意見交換会では「特定奨励費」のこれまでの経緯についてご説明し、この研究事業の在り方と次フェーズで取り組もうとしている広報ならびに人材育成について皆様のご意見をお伺いしたいと考えています。

総合討論では、出席された諸先生方からもご意見やご質問をいただき、ぜひとも所員との実りある意見交換ができますようお願い申し上げます。

今回の意見交換会は、新型コロナウイルス感染症は5類感染症へと移行したことから対面での開催も考えましたが、できるだけ多くの方にご参加いただけるよう、オンラインによる開催といたしました。多くの方々に参加をいただき、心から感謝申し上げます。

2023年10月6日
公益財団法人山階鳥類研究所
所長 小川 博

特定奨励費による成果と課題

浅井芝樹（山階鳥類研究所研究員）

山階鳥研は2001年から特定奨励費の交付を受けてきた。この間に山階鳥研の目的に沿った様々な事業を実施してきたが、当初より一貫して取り組んだのは研究所所蔵の資料類、すなわち標本や組織サンプル、図書や文化資料などの収集・保管管理・公開であった。20年にわたる事業により、標本は16,000点以上を収集管理し、図書の管理数も45,000点を超えるなど大きな成果があった。また、資料類から付随して得られるデータ類も新たな研究の素材として収集対象としたり、人材育成としての実習・講習会の開催、他機関との連携なども事業内容に含めて取り組んできた。現在は申請の第7フェーズとなっており、当研究所が持つ鳥類捕獲技術は散逸すると学術研究の進展に悪影響があるとの判断から、これを継承するために捕獲技術も資料の一つとみなし、捕獲現場の映像資料の収集を始めた。また、標本からの付随データとして安定同位体比データの収集を始めた。今フェーズも順調に成果が得られており、今年度末に3年目の最終年を迎えるが、目標は全て達成見込みである。そこで、現在までの見直しから次フェーズに継続すべき事業と見直すべき事業、新たに取り組むべき事業について検討した。

これからの日本の鳥学を支える人材の育成を目指して

澤 祐介（山階鳥類研究所研究員）

山階鳥研は日本で唯一の民間の鳥類専門の研究所であり、長きにわたり日本の鳥学の発展を支えてきた。その根幹に、標本や組織サンプル、図書などの膨大な資料類を収集、管理し、また鳥類の生態研究・保全の基礎となる捕獲技術等を研鑽してきたことが挙げられる。これらの資料類や技術を維持し、次世代へ継承していくことは、山階鳥研のひいては日本の鳥学の長期的興隆に貢献できると考えられる。

特定奨励費による活動では、2015年度から講習会・実習という形で人材育成を開始し、今フェーズでは、標本製作技術講習会、野外調査実習を実施した。本発表では、これらの成果を概観するとともに、次フェーズにおいて新たに開始するデータロガー装着実習について紹介する。データロガーを装着した行動追跡研究は、近年の技術進歩により急速に拡大している。しかし、安全に装着し適切なデータを得るためには、専門知識と装着技術が必須である。これらを普及するための計画について発表する。

鳥学の重要性を幅広い層に伝える広報活動ーウェブサイトと動画の活用

山岡容子（山階鳥類研究所広報）

特定奨励費を受けて山階鳥研が行う事業は、標本、図書、鳥類の捕獲技術の記録など、いずれも新発見を生み出す研究を下支えする基盤整備で、地味ながら重要な仕事である。この重要性や成果、活動内容をわかりやすく伝えたり、整備した資料等を有効に活用してもらうための周知には、最近ではウェブサイトや動画を活用するのが有効な手段のひとつと考えられる。

動画は、研究所や仕事内容を一般向けに紹介するものから、専門的スキルとして鳥類標本の収集管理、図書の収集整備、DNAサンプルの収集整備、鳥類の捕獲技術など手順やノウハウを次世代に伝えるものまで考えて作成したい。

山階鳥研のウェブサイト全体の構造やデザインも見直し、おのおのの情報が容易にたどりつけるようになれば、特定奨励費で行った成果の利用拡大にも貢献することができよう。

今後ますます重要になるであろうこうした広報活動の計画について発表する。

非公開

IV-7

文部科学省科学研究費助成金（特定奨励費）による研究事業 「鳥の学問を発展させる資料の拡充・管理・公開に関する研究事業」 研究成果発表会 記録

令和6年1月12日

公益財団法人山階鳥類研究所
科学研究費補助金（特定奨励費）総括班
特任研究員、特任専門員、フェロー、客員研究員 各位
評議員、理事、監事 各位
関係者 各位

公益財団法人山階鳥類研究所
所長 小川博

令和5年度文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）による研究事業の
研究成果発表会について

拝啓

時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。平素より当研究所の研究活動にご指導・ご鞭撻を賜り誠に有難うございます。

さて、標記の研究成果発表を下記の要領にて開催したいと存じます。

ご多忙の折誠に恐縮ではございますが、是非ご出席くださいますようお願い申し上げます。資料は追ってお送りいたします。

敬具

記

【研究成果発表会】

日時：令和6年2月7日（水）13：30～17：00

場所：東京大学農学部フードサイエンス棟2F 中島董一郎記念ホール

オンラインと併用いたします。zoom URLは日程が近づきましたら別途メールにて配信します。

目的：特定奨励費による研究事業の進捗と成果を支援者に報告すること

添付

- ・プログラム
- ・事務連絡
- ・返信用紙

プ ロ グ ラ ム

日時：令和6年2月7日（水）13：30～17：00

会場：東京大学農学部フードサイエンス棟 中島董一郎記念ホール

総合司会：尾崎清明（山階鳥類研究所副所長）

- 13：30～13：35 開会挨拶
(5分) 秋篠宮文仁（山階鳥類研究所総裁）
- 13：35～13：40 趣旨説明
(5分) 小川博（山階鳥類研究所所長）
- 13：40～14：05 令和5年度の特定奨励費研究成果および来年度の研究事業計画
(25分) 浅井芝樹（山階鳥類研究所研究員）
- 事業成果活用事例報告**
- 14：05～14：30 鳥学の発展を支える捕獲技術の収集
～安全かつ効率的な捕獲調査の普及を目指して～
(25分) 澤祐介（山階鳥類研究所研究員）
- 14：30～14：40 —— 休憩（10分） ——
- 14：40～15：05 羽ばたき運動の骨格形態指標の模索
—鳥類の羽ばたき運動はいつ始まったのか
(25分) 明田卓巳（名古屋大学大学院環境学研究科）
- 15：05～15：30 総括班意見
(25分) 総括班
- 15：30～15：40 —— 休憩（10分） ——
- 15：40～16：45 総合討論（65分）
司会：水田拓（山階鳥類研究所自然誌・保全研究ディレクター）
- 16：45～16：50 ご感想
(5分) 文部科学省
- 16：50～16：55 ご感想
(5分) 環境省
- 16：55～17：00 閉会挨拶
(5分) 壬生基博（山階鳥類研究所理事長）

研究成果発表会の趣旨説明

この成果発表会は、公益財団法人山階鳥類研究所が令和3～5年の計画で申請し、交付を受けた科学研究費補助金特定奨励費による「鳥の学問を発展させる資料の拡充・管理・公開に関する研究事業」の進捗状況を自己点検するとともに、その成果を支援者に報告することを目的としています。本年度は今フェーズの最終年度であることから、本年度の事業の成果報告だけでなく、今フェーズの総括と次フェーズの紹介も行います。その上で今フェーズの成果と次フェーズの内容に対するご意見等をいただきたいと存じます。

本会では、まず今フェーズの成果の概略と次フェーズについての紹介をいたします。なお、本年度の成果の詳細については資料集をご覧ください。資料の拡充、保守、整理、利用者対応、情報公開、他機関との連携・人材育成など、順調に進んでおります。次に、鳥類標識事業や保全事業、その他各種調査を遂行するために蓄積してきた捕獲技術や鳥の生体を扱う技術・知識もまた鳥の学問を支える資料と考え、映像資料として蓄えて保管していくことを本研究事業に盛り込んでおりますことから捕獲技術に関する発表をいたします。もう一題は、標本データベースを利用した研究成果について、外部の研究者の方にご紹介いただきます。これは、これまで科学研究費補助金特定奨励費により維持管理してきた資料の公開が、鳥の学問をまさに支えている好例であると考えています。

総合討論に先立って、まず、総括班のメンバーから自己点検として事業成果に関する質問や意見をいただきます。総合討論では、上記の発表と総括班のコメントをもとに、自己点検の当事者である総括班、当研究所職員、当研究所特任研究員と、ご出席いただいている当研究所役員および評議員によって、本事業の評価と今後の方向性や取り組みについて議論を進めたいと思います。

その後、当研究所の研究・事業に研究補助、業務委託をいただいている文部科学省、環境省からのご感想をいただき、今後の事業の改善に努めたいと存じます。

最後に、本会にご参加いただいた皆様、本事業をご支援いただいている皆様に、厚く御礼を申し上げます。本会によって、本事業と当研究所の日々の取り組みを皆様にご理解いただくとともに、当研究所の今後の事業推進に寄与できるものと期待しています。

公益財団法人山階鳥類研究所
所長 小川博

資料1 研究事業の目的

【文部科学省提出事業計画調書からの抜粋】

山階鳥類研究所は、創設者である山階芳麿（やましな・よしまろ、1900-1989）が1932（昭和7）年に設立した山階家鳥類標本館を前身とする、アジアで最も古い鳥学専門の学術研究機関である。およそ90年にわたるその歴史の中、当研究所は一貫して鳥の学問を支える多様な資料の収集に取り組み、関連分野の発展を支えてきた。

その中心となる鳥類標本資料については、国内最大の約7万点を有しており、世界の鳥種のほぼ半数をカバーしている（特に日本・韓国・台湾・太平洋地域の標本に富んでおり、この地域産の標本所蔵数は世界最大である）。多数の絶滅種や希少種の標本、新種や新亜種の報告の際の証拠であるタイプ標本をはじめ、ミヤコショウビンの標本やカンムリツクシガモ雄の標本といった世界で当研究所のみが所蔵しているものもある。

世界的な稀観書を含む4万冊を超える図書資料も充実している。例えば、下図は19世紀のイギリスで活躍したジョン・ゲルドの鳥類図譜である。石版印刷で刷られたモノクロの図に職人が1点1点色を塗ることにより、カラーの図譜に仕上げられた貴重なものである。



ジョン・ゲルドの「アジア鳥類図譜」
(1849-1883)より「オシドリ」。

このように当研究所は、鳥に関わるあらゆる学問、自然科学はもとより、人文科学や芸術なども支える基盤として、第一級の重要性を持つ多様な資料を所蔵している。このため当研究所は、鳥の学問を探究する研究者にとって、欠くことのできない研究の拠点となってきた。これらの資料を拡充しながら管理維持し、公開していくことは、当研究所の社会的使命と考え、平成13年度に初めて科学研究費補助金特定奨励費に採択されてから、およそ20年にわたりその任にあたってきた。本事業の目的は、今後もこれらの使命を果たすべく、資料のさらなる拡

充を目指すとともに、それらを適切に管理し、必要とする研究者に供することのできる形で公開していくことである。

これまでの事業では、標本作製に加えて組織サンプルの採取やCT画像のような副次的なデータ収集を積極的に行い、それらを研究者に提供することで、分類学や古生物学などの学問分野で成果を上げてきた。本事業では、さらに標本から安定同位体比のデータも収集することで、鳥類の基本的な生態の解明につながる研究の基盤作りを行う予定である。他方、資料の整備に伴って、所蔵標本の地域的・年代的偏りがあることなども明らかになっており、その是正も課題として挙がっている。本事業では、標本から多様な副次的データの収集を行うことと、標本の偏りを補うべくさらなる収集を行うことで資料を拡充していく（**拡充班**）。また、それらの資料類が将来にわたって受け継がれるよう、これまでの資料同様に適切に管理保管する（**管理班**）。さらに、管理する多様な資料の活用を促進するためにデータを公開する。当研究所が保有する知識や技術を社会へ還元することもまた、鳥の学問を発展させる大きな礎となる。本研究事業を完遂するため、他機関との連携にも積極的に取り組み、幅広い鳥の学問の普及と貢献を目指す（**公開班**）。



絶滅鳥カンムリツクシガモの標本
(雌雄)。手前が世界に1つだけの雄標本。

資料2 研究事業期間を通して行う研究事業の内容

【文部科学省提出事業計画調書からの抜粋】

「2. 研究事業の目的」に対応する3つの研究項目 **(1) 拡充班**、**(2) 管理班**、**(3) 公開班**を設ける。また、**(0) 総括班**を組織し、進捗状況の自己点検と全体の総括にあたらせる。(1)～(3)の具体的な事業内容は以下の通りである。

(1) 拡充班：野外採集、寄贈受け入れ、国内外の博物館等との交換、購入等により、(a) 標本、(b) 組織サンプル(肉片・血液・羽毛等)、(c) 図書および鳥学資料の拡充を図る。(a) 標本の拡充では、野外で鳥類を安全に捕獲する技術が記録されないまま衰退している現状を鑑み、これらの技術を継承する目的で、鳥類の捕獲技術を映像資料として記録し、収集することも試みる。また、所蔵する標本に付随する組織サンプルや羽毛などを活用して、(d) DNA塩基配列で種の同定を行うためのDNAデータバンク登録用データ(DNAバーコードデータ)と、安定同位体比データの収集に取り組む。安定同位体比データは、鳥の体内に含まれる窒素や炭素の安定同位体比を調べるもので、どんな餌を採っているかといった食性の指標となる。当研究所が所蔵する古い標本から得られるデータにより、時代の変遷とともに食性がどう変化しているかを捉えることができると期待される。当研究所は多様な標本を所蔵しているため、種や年代を網羅した形でデータ収集して公開することにより、このような学術分野へ多大な貢献ができる。

拡充班で収集した標本や資料、およびデータは、(2) 管理班で保管管理され、(3) 公開班で公開する。

(2) 管理班：研究所が所蔵する(e) 標本、(f) 組織サンプル、(g) 図書および鳥学資料について、研究者の利用に供するため、管理番号を与えて各資料の情報をデジタル化し、標本庫・冷凍庫・書庫などに配架する。これらの資料の劣化を防ぐため、温湿度管理や清掃などの日常的管理業務に従事する。鳥学資料は、当研究所創設者の山階芳麿の研究資料や、研究者の遺族から寄贈を受けた鳥学研究に関する文書、写真類などであり、唯一無二の資料が多い。これらも研究者の利用に供するために管理番号を与えて写真撮影を行い、状態を記録した上で保管庫に配架する。

標本、組織サンプル、図書および鳥学資料の利用を希望する研究者をサポートする。

(3) 公開班：当研究所が所蔵する資料、データの情報公開を進める。標本については、当研究所が運営するウェブサイト(h)『標本データベース』^{*1}で、標本の基礎的な情報である採集地、採集日などとともに、該当標本とそのラベルの写真を随時配信する。また、標本から得られるデータとして、X線CT画像、走査電子顕微鏡画像、紫外線画像についても標本データベースを通じて公開し、誰もが自由にダウンロードし、研究できるようにする。標本データベースで表記している和名や分類体系は、『世界鳥類和名辞典』(山階, 1986)に従っているが、分類学の進展に伴い最新の学説に合わせることを求められているため、引き続き改訂作業を行う。改訂作業により考案された新和名や分類体系は、山階鳥類学雑誌上にて公表する。また、和名以外にも各分野の研究の進展によって標本データベースで公開された標本情報を改訂できる場合もあるため、随時修正も行う。組織サンプルについては、当研究所ウェブページの(i)『組織サンプルの利用』^{*2}で収蔵状況を公開する。また、拡充班で収集した(d) DNAバーコードデータについては、Consortium for Barcode of Lifeが運営するデータベース『Barcode of Life Data System (BOLD)』^{*3}で公開する。拡充班で収集した(g) 図書および鳥学資料については、(j)『蔵書検索システム』^{*4}で収蔵状況を公開する。

^{*1} <https://decochan.net>; ^{*2} https://www.yamashina.or.jp/hp/hyohon_tosho/soshiki_sample.html;

^{*3} <http://www.boldsystems.org>; ^{*4} <https://jmapps.ne.jp/zhycrkj2/>

当研究所に蓄積された鳥学の知識・技術を社会に還元するため、以下の事業を行う。(k) 学術雑誌『山階鳥類学雑誌』の年2回刊行、(l) 一般向けセミナーの開催と質問窓口の開設、(m) 他機関との連携の強化を目的として、人材育成のための講習会・実習を開催する。連携博物館とのコンソーシアムによるデータベース構築のノウハウなどについて自己評価し、改良を行う。

資料3 研究事業を行う組織

【文部科学省提出事業計画調書から抜粋のうえ一部改変】

研究事業の内容	研究責任者	研究者及び補助者
(0) 総括班	小川 博 (所長)	遠藤秀紀 (東京大学教授) 奥野卓司 (山階鳥類研究所シニアフェロー) 尾崎清明 (山階鳥類研究所副所長) 高木昌興 (北海道大学教授) 林 良博 (山階鳥類研究所専務理事/国立科学博物館顧問) 真鍋 真 (国立科学博物館副館長・標本資料センターコレクションディレクター・分子生物多様性研究資料センター長) 美濃導彦 (理化学研究所情報統合本部本部長) 綿貫 豊 (北海道大学教授) 高橋敏之 (山階鳥類研究所所員・経理事務担当)
(1) 拡充班	水田 拓 (自然誌・保全研究ディレクター・拡充班の統括)	岩見恭子 (標本/同位体データ担当) 小林さやか (標本担当) 森本 元 (標本/図書担当) 水田 拓 (捕獲技術方法の収集担当) 仲村 昇 (捕獲技術方法の収集担当) 澤 祐介 (捕獲技術方法の収集担当) 浅井芝樹 (組織サンプル担当) 齋藤武馬 (組織サンプル/DNAバーコード担当) 鶴見みや古 (図書/鳥学資料担当) 富田直樹 (同位体データ担当)
(2) 管理班	鶴見みや古 (文化資料ディレクター・管理班の統括)	岩見恭子 (標本担当) 小林さやか (標本/鳥学資料担当) 齋藤武馬 (組織サンプル担当) 浅井芝樹 (組織サンプル担当) 鶴見みや古 (図書/鳥学資料担当)
(3) 公開班	平岡 考 (広報ディレクター・公開班の統括)	山崎剛史 (標本データベース担当) 岩見恭子 (標本データベース/講習会担当) 小林さやか (標本データベース担当) 森本 元 (標本データベース/鳥学資料の公開担当/講習会担当) 鶴見みや古 (図書/鳥学資料の公開担当) 浅井芝樹 (雑誌刊行担当) 平岡 考 (セミナー/質問対応担当) 千田万里子 (講習会/質問対応担当) 齋藤武馬 (質問対応担当) 澤 祐介 (質問対応担当) 水田 拓 (講習会担当) 仲村 昇 (講習会担当) 油田照秋 (講習会担当) 富田直樹 (講習会担当)

資料4 事業計画調書の抜粋（上段）と今年度成果（下段）**(1) 拡充班****【事業計画における令和5年度事業の内容】**

【資料の拡充】 (a-1) 標本：野外で捕獲または遺体として拾得した鳥体からの作製で380点の増加を目指す。他機関との交換、購入、寄贈受け入れ等により、さらに増加する場合もある。(a-2) 鳥の捕獲技術の記録：捕獲現場での作業時に動画を撮影し、さまざまな捕獲技術を映像で記録する。(b) 組織サンプル：標本材料として保管している冷凍鳥体からの作製、他機関との交換、寄贈受け入れ等により、400点の増加を目指す。(c) 図書資料：購入、寄贈、他機関との交換等により、1,000点の増加を目指す。ただし、収集目標点数は、特に寄贈資料数によって大きく変動する可能性がある。

【データの拡充】 (d-1) DNAバーコードデータ：分析が比較的容易なDNAバーコード領域の塩基配列をすべての生物について決定してデータベース化することにより、生物種を正確に同定できるシステムの構築を目指す国際プロジェクトBarcode of Lifeに協力する。日本産鳥類をおもな対象として、70点のデータを揃える。(d-2) 安定同位体比データ：炭素と窒素の安定同位体比データを収集する。標本の羽毛を用い、分析は京都大学などの共同利用施設で行う。日本産鳥類をおもな対象として、50点のデータを作成する。

【事業の進展状況及び主な成果】（12月末現在）

【資料の拡充】 (a-1) 標本については、収集した遺体・卵殻からの新規作成と寄贈受け入れにより、2,097点を入手した。(a-2) 捕獲技術の記録として、小笠原諸島における海鳥捕獲方法、織田山1級ステーションでの網場の整備方法等を記録した。(b) 野外採集、冷凍保管遺体からの採取、寄贈受け入れにより、501個体分の組織サンプルを入手した。また、新たに30個体についてDNA抽出を行った。(c) 図書資料については、購入・寄贈・交換により、単行本・雑誌を705冊入手した。この他に、イギリスの鳥類研究者Jhon GouldのThe Birds of Australia, 1848および1969 全8冊の復刻版(Lansdown Press, 1972-1975, Elephant folio)の寄贈を受けた。

【データの拡充】 (d-1) DNAバーコードデータは、年度内に目標通り70点のデータを作成見込みである。(d-2) 安定同位体比データは、目標通り50点のデータを作成した。

資料4 事業計画調書の抜粋（上段）と今年度成果（下段）**(2) 管理班****【事業計画における令和5年度事業の内容】**

【資料の保守業務】 標本庫・書庫について、温湿度管理、害虫・カビの発生状況のモニタリングと発生時の速やかな除去、清掃、破損資料の探索と修理を行う。

【資料の整理業務】 未整理の (e) 標本、(f) 組織サンプル、(g) 図書および鳥学資料（今年度の新規収集品のほか、前年度までの収集品のうち、以下の作業が未完了のもの）について、次の作業(1)～(5)を進める。(1) 資料に管理番号を与える（番号を記したラベルの装着作業等を含む）。(2) 管理に必要な情報（標本資料の場合、管理番号・種名・性別・年齢・採集地名・採集年月日・採集者名・採集方法・標本の種類等の情報）をデジタル化する。(3) 標本と、古文書・古写真・書籍原画等の資料については、写真撮影を行い、資料の状態を記録する。(4) 図書については、既存資料と重複する資料の譲渡・交換・廃棄等を行う。(5) これら一連の作業を終えた資料を保管庫（標本庫・冷凍庫・書庫等）に配架する。令和5年度には、標本1,000点、組織サンプル400点、図書資料1,000点、鳥学資料300点について、これらの作業を行う。

【利用者対応】 国内外の研究者から資料の利用申請を随時受け付け（閲覧または貸出）、速やかに計画を審査し、適切と判断される場合には、利用の許可を与える。また、資料の利用に伴う業務も本班が行う（閲覧の場合は資料の準備、利用状況の監視、後片付け等、貸出の場合は借用書の取り交わし、梱包・発送、返却物の殺虫・殺カビ処理等）。

【事業の進展状況及び主な成果】（12月末現在）

【資料の保守業務】 標本庫・書庫、ともに適切な環境管理を実施した。破損資料の修復については、図書資料124点の修理を行うと共に、破損・劣化が見られた2,483点を適切な管理のために中性紙保存箱や封筒に保存した。

【資料の整理業務】 (e) 標本については、728点を標本収蔵庫に配架した。また、昨年度寄贈された液浸標本848点について専用保管庫に配架した。(f) 組織サンプルについては、501個体分を整理・配架し、30個体分のDNA溶液も整理・配架した。(g-1) 図書資料については、既存図書232点について整理を行うとともに、単行本、雑誌705冊を書庫に配架した。重複図書396冊について処理を行った。(g-2) 鳥学資料（写真、書類など）391点について資料管理データベースへの登録（テキストのみ）を行った。また、373点を撮影してリスト化した。この他に、鳥学者内田清之助鳥学資料1,699点へ登録番号を付与し、廣居忠量写真コレクション6,280点をデジタル化およびリスト化したうえで、それぞれアーカイバル容器等へ収納した。

【利用者対応】 利用者対応として、(e) 標本については、閲覧者は110件（のべ126人）を受け入れた。標本貸出は2件（のべ72点）、標本撮影1件（3点）であった。(f) 組織サンプルについては2件の申請を審査し、1件について提供した（1件は保留中）。(g) 図書資料については、閲覧者は16件（のべ16人）を受け入れた。博物館等2館に写真等3点、鷹狩り研究者に鷹狩り関連画18点を提供した。文献複写依頼22件（130文献）を受け入れた。これらの他に標本データベースデータ60,865点について研究利用申請1件を許諾した。

資料4 事業計画調書の抜粋（上段）と今年度成果（下段）**(3) 公開班****【事業計画における令和5年度事業の内容】**

【資料の情報公開】 (h-1) 標本：ウェブサイト『標本データベース』を運営して1,000点の標本データ（標本の種類（剥製・骨格・卵・巣等）、標本番号、種名、性別、採集地名、採集年月日等のテキスト情報、標本写真、標本ラベル写真）を追加し、適宜修正などを行う。(h-2) 鳥体内部構造のX線CT画像：標本の材料である冷凍鳥体や標本をX線CTシステム（リース品）で150点撮影し、標本データベースに追加する。(h-3) 羽毛の走査電子顕微鏡画像：骨格標本作製時に除去される羽毛を活用して75点のデータを作成し、標本データベースに追加する。撮影は東京大学総合研究博物館の機材を借りて実施する。(h-4) 羽色の紫外線画像：鳥類は紫外線を知覚できるため、紫外線画像は鳥類が見ている世界を理解する一助となる。現有の紫外線画像撮影装置と剥製標本を用いることにより、50点のデータを作成し、標本データベースに追加する。(h-5) 和名の整備：改訂した内容を報文にまとめ、『山階鳥類学雑誌』上で公表する。(i-1) 組織サンプル：当研究所ウェブページの『組織サンプルの利用』に収蔵状況を示すエクセルファイルをアップロードする（更新頻度年1回）。(i-2) DNAバーコード：ウェブサイト『Barcode of Life Data System (BOLD)』に70点のデータを追加し、公開する。(j) 図書および鳥学資料：ウェブサイト『蔵書検索システム』を運営し、1,500点の書誌情報を追加するとともに、管理班で整理作業が済んだ鳥学資料については公開を目指す。

【その他の情報公開】 (k) 学術雑誌『山階鳥類学雑誌』を2回刊行する。(l-1) 一般向けセミナーを我孫子市鳥の博物館（千葉県）にて年8回開催する。また、我孫子市が中心となって11月上旬に開催されるジャパンバードフェスティバルにおいても、同様のセミナーを行う（当研究所かオンラインにて）。(l-2) 一般からの質問を受け付ける窓口（電話・Eメール）を開設する。

【他機関との連携・人材育成】 (m) 人材育成のための講習会等を開催する。(m-1) 野外調査従事者を育成するための講習会については、受講希望者の要望に基づいて開催場所を決定し、開催する。

(m-2) 野外調査実習は、かすみ網による陸鳥の捕獲をテーマにしたものを福島県にて6回、(m-3) 海鳥の捕獲をテーマにしたものを青森県や伊豆諸島で開催する。なお、これらの実習は、平成30～令和2年度の特定奨励費事業と同じ場所・方法で実施される。したがって、この実習で得られるデータは、繁殖モニタリングデータとしての価値を持ち、すべて令和5年度に『山階鳥類学雑誌』の誌面上で報告される。(m-4) 鳥類標本の作製技術を伝える実習は、当研究所と地方にて年2回開催する。

(m-5) 我孫子市鳥の博物館の標本データを『標本データベース』に公開するため、『標本データベース』の改良や修正をする。

【事業の進展状況及び主な成果】（12月末現在）

【資料の情報公開】 (h-1) 『標本データベース』を計画通り運営し、閲覧者数はのべ438,611人であった。年度末までに予定点数の標本データを追加できる見込みである。(h-2, h-3, h-4) X線CT画像データ、電子顕微鏡画像データ、紫外線画像データは年度末までに予定点数を作成して標本データベースに追加できる見込みである。(h-5) カモ目・キジ目の新しい種和名を整理した報文は『山階鳥類学雑誌』に掲載された。また、ヨタカ類について今年度中に投稿予定である。(i-1) 年度末までに組織サンプルの在庫リストをアップロードできる見込みである。(i-2) DNAバーコードデータは『Barcode of Life Data System (BOLD)』上で、年度内に計画通り、70点のデータを配信開始予定である。(j) 『蔵書検索システム』を計画通り運営し、閲覧者数はのべ208人であった。公開データ(OPAC)は年度末までに目標点数を登録できる見込みである。

資料4 事業計画調書の抜粋（上段）と今年度成果（下段）

【その他の情報公開】(k)『山階鳥類学雑誌』の第55巻第1号と第2号を発行した。J-Stageで公開された全文PDFへのアクセス数は16,483件であった。(l-1)新型コロナウイルス感染の恐れから、オンラインで6回開催した。2024年1、2、3月もオンライン開催を予定している。11月には、ジャパソナードフェスティバルで同様のセミナーを対面で実施した。(l-2)一般からの質問246件に対応した。

【他機関との連携・人材育成】(m-1)野外調査従事者を育成するための講習会については、2024年3月に山階鳥類研究所で初心者向けに対面・座学形式で開催する予定である。また、ガンカモ類等大型水鳥類の捕獲技術講習会を2023年11月に秋田県大潟村で開催し、5人が受講した。(m-2)陸鳥を対象とした野外調査実習は、南相馬市及び飯館村の2地点において5月～8月に各6回計12回の捕獲実技講習を実施し、のべ26人が参加した。(m-3)海鳥を対象とした野外調査実習は、青森県八戸市のウミネコ繁殖地で5月に2回開催し、のべ6人が受講した。今後、2024年2～3月に伊豆諸島鳥島の海鳥繁殖地で実習を行う予定である。(m-4)標本作製講習会は、2023年4月3日、4日に長崎大学水産学部の学生1名をインターンで受け入れ、山階にて実習を行ったほか、学生2名を対象に早稲田大学人間科学部にて2023年10月27日、28日の2日間海鳥の解剖及び標本作製実習を行った。さらに10名を対象に神奈川県立博物館で2023年3月30日に実施を予定している。(m-5)我孫子市鳥の博物館の標本データについては『標本データベース』に組み込まれているため、『標本データベース』の運営管理の中で維持管理した。

資料5 科研費事業の効果**【資料の維持管理・拡充・公開により今年度発表された研究業績等一覧】****【論文】**

1. Aoki D, Matsui S, Esashi M, Nishiumi I, Nagata J, Takagi M (2023) Population genetics of recent natural colonization by the bull-headed shrike (*Lanius bucephalus*; Aves) suggests the importance of recurrent immigration on remote islands. *Biological Journal of the Linnean Society*: blad105.
2. 今村知子・高倉昌哉・齋藤武馬 (2023) DNA 分析および外部形態に基づいて同定されたニシオジロビタキ *Ficedula parva* の国内記録. *日本鳥学会誌* 72(2): 247-254.
3. Mizumura H, Kubota K, Nishiumi I, Imanishi S, Mochizuki M, Higuchi H (2023) Hybridization and backcrossing between the endangered brown shrike (*Lanius cristatus superciliosus*) and the common bull-headed shrike (*L. bucephalus bucephalus*). *Biological Journal of the Linnean Society*: blad117.
4. Tada S, Tsuihiji T, Matsumoto R, Hanai T, Iwami Y, Tomita N, Sato H, Tsogtbaatar K (2023) Evolutionary process toward avian-like cephalic thermoregulation system in Theropoda elucidated based on nasal structures. *Royal Society Open Science* 10: 220997.
5. Tatani M, Yamasaki T, Tanaka H, Nakata T, Chiba S (2023) What makes the diverse flight of birds possible? Phylogenetic comparative analysis of avian alula morphology. *Biological Journal of the Linnean Society*: blad085.
6. Wu S-M, Worthy TH, Chuang C-K, Lin C-H (2023) New Pleistocene bird fossils in Taiwan reveal unexpected seabirds in East Asia. *Acta Palaeontologica Polonica* 68(4): 613-624.
7. Yamamoto Y, Asai S, Saitoh T, Kobayashi S, Hiraoka T, Momose K, Urano E, Ohta N, Kakizawa R, Yamagishi S (2023) Complete genomes of endangered Japanese birds. *Journal of the Yamashina Institute for Ornithology* 55(2): 103-113.
8. 山崎剛史・亀谷辰朗 (2023) カモ目・キジ目の新しい種和名. *山階鳥類学雑誌* 55(2): 137-151.

【一般向け解説記事(雑誌など)】

9. 小林さやか (2023) 所員エッセー 80 年前の手紙から紐解くハワイ・ビショップ博物館との交流. *山階鳥研 NEWS* 35(3): 5.
10. 山崎剛史 (2023) おすすめの本 目に見えない多様性を見る. *BIOSTORY* 40: 110.

【書籍】

11. Yamasaki Y, Gunji M, Masuda Y, Fukuhara A (2023) Biological Mechanisms. In: Suzumori K, Fukuda K, Niiyama R, Nakajim K (eds) *The Science of Soft Robots –Natural Computing Series*: 39-58. Springer, Singapore.
12. 山階鳥類研究所著 (2023) *山階鳥類研究所のおもしろくてためになる鳥の教科書*. 山と溪谷社, 東京.

【学会発表等】

13. 岩見恭子・富田直樹・兵藤不二夫・武山智博 (2023) 鳥類標本の学術的価値を維持した羽試料の採集方法の検討. *日本鳥学会 2023 年度大会* (9 月 15 日~18 日, 金沢大学).

資料5 科研費事業の効果

14. 岸本直子・和田大地・玉山雅人・岩見恭子・富田直樹・池田忠繁・棚橋美治・片桐一彰 (2023) ウミネコ剥製の風洞実験. 第61回飛行機シンポジウム (11月15~17日, 北九州国際会議場).
15. 小林さやか (2023) ビショップ博物館所蔵の書簡からわかった80年前の標本交換. 日本鳥学会2023年度大会 (9月15日, 金沢大学).
16. 小林さやか・岩見恭子・加藤ゆき (2023) 第5回標本集会 江戸時代の鳥を知ろう. 日本鳥学会2023年度大会, 自由集会 (9月15日, 金沢大学).
17. 西田澄子・鶴見みや古・北村亘 (2023) 大正・昭和期における籠抜け及び意図的放鳥による飼鳥の野外への逸出. 日本鳥学会2023年度大会, ポスター発表 (9月15日~18日, 金沢大学).
18. 齋藤武馬・西海功 (2023) 「2. 掲載予定種の分類の検討結果」目録編集委員会 みんなで作ろう! 目録8版 (その4). 日本鳥学会2023年度大会, 自由集会 (9月15日, 金沢大学).
19. 高橋佑太・池田忠繁・棚橋美治・和田大地・玉山雅人・岩見恭子・富田直樹 (2023) ウミネコの3Dプリンタ模型の横風特性解析. 第61回飛行機シンポジウム (11月15~17日, 北九州国際会議場).
20. 山崎剛史・江田真毅・杉田典正・西海功 (2023) 鳥島のアホウドリは未記載新種か? 日本鳥学会2023年度大会 (9月17日, 金沢大学).
21. 山崎優佑・山崎剛史 (2023) 飛べないクイナが非対称の風切羽を持ち続ける理由. 日本鳥学会2023年度大会 (9月17日, 金沢大学).

【展示会への協力】

22. インターメディアテク特別展示「極楽鳥」(2023年1月20日~5月7日, インターメディアテク).
23. 領土・主権展示館企画展「近代日本の夜明けと離島の編入 | 明治日本のフロンティア」(2023年1月24日~4月9日, 領土・主権展示館).
24. 国立科学博物館企画展「科博の標本・資料でたどる日本の哺乳類学の軌跡」(2023年4月25日~2023年8月16日, 国立科学博物館企画展示室).
25. 北九州市立自然史・歴史博物館2023年度夏の特別展「恋するいきもの展」(2023年7月3日~9月18日, 北九州市立自然史・歴史博物館).
26. 沖縄県立博物館・美術館企画展「みんなの進化展~命はつながっている」(2023年6月21日~9月3日, 沖縄県立博物館・美術館).
27. 豊橋市自然史博物館第37回特別企画展「カイジュウ博2023-海で暮らす仲間たち-」(2023年7月14日~9月3日, 豊橋市自然史博物館).
28. 三重県総合博物館第35回企画展「鳥のひみつ調べ隊! ~みて・きいて・ふれて~」(2023年10月7日~12月10日, 三重県総合博物館企画展示室).
29. 領土・主権展示館地方巡回展「近代日本の夜明けと離島の編入 | 明治日本のフロンティア」(2023年10月9日~10月15日, 川口総合文化センター・リリア).
30. 茨城県立歴史館企画展3「音楽家・松平頼則(よりつね)とその時代」(2023年10月28日~12月7日, 茨城県立歴史館).

資料 6 昨年度科研費事業の進捗状況に対する科研費審査部会の所見

令和4年度科学研究費助成事業「特定奨励費」
進捗状況の確認に係る所見

団 体 名：公益財団法人山階鳥類研究所

研究事業名：鳥の学問を発展させる資料の拡充・管理・公開に関する研究事業

本研究事業については、事業計画が十分に実施されていることが確認できる。特に拡充班では想定を超える数の標本・DNA 資料が登録され、アーカイブ資料の充実が認められる。また、着実な標本データベースの運営、学術雑誌の刊行、人材育成についても計画通りに進められていることを確認した。さらに、採択時の審査結果の所見における指摘事項にも対応した取組が実施されている。

問題点として挙げられている、資料を拡充・管理し研究利用する人材の育成や、管理するための知識・技術の継承について引き続き取り組むとともに、事業計画に沿って着実に研究事業を実施していくことが望まれる。

科学技術・学術審議会学術分科会
科学研究費補助金審査部会

発表要旨

令和5年度の特典奨励費研究成果および来年度の研究事業計画

浅井芝樹（山階鳥類研究所研究員）

山階鳥類研究所は平成13年から特定奨励費の交付を受けてきた。この間に当研究所の目的に沿った様々な事業を実施してきたが、当初より一貫して取り組んだのは研究所所蔵の資料類、すなわち標本や組織サンプル、図書や文化資料などの収集・保管管理・公開であった。現在は令和3年度から実施している7回目の事業となっている。現在の事業計画も主要な取り組みは同様であるが、当研究所が持つ鳥類捕獲技術は特定奨励費の事業対象である「散逸すると学術研究の進展に悪影響がある」ものの一つであるとの判断から、捕獲技術も資料の一つとみなして捕獲現場の映像資料の収集を始めた。また、標本からの付随データとして安定同位体比データの収集を始めた。今年度も順調に成果が得られており、今年度は3年の事業計画の最終年であるが、目標は全て達成済みあるいは見込みである。来年度の事業計画は既に申請済みであるが、新しい事業計画では、公開情報について、研究者ではない一般の利用者にわかりやすくすることにより重点をおき、また人材育成を重視して講習会や実習をより多く取り入れた。

発表要旨 資料活用事例報告

鳥学の発展を支える捕獲技術の収集 ～安全かつ効率的な捕獲調査の普及を目指して～

澤祐介（山階鳥類研究所研究員）

鳥類の捕獲を伴う研究では、足環などの標識を装着し個体識別に基づいた基礎的な生態研究が古くから行われてきた。近年は、科学技術の発達により、小型の発信器やデータロガーを用いた応用研究が目覚ましい発展を遂げているほか、捕獲時に鳥体の一部を非侵襲的に採取することで、遺伝子解析や安定同位体分析、寄生虫やウィルスの伝搬に関わる研究など、多岐にわたる研究が展開されている。これらの研究を遂行するためには、鳥を傷つけず安全に捕獲すること、研究対象種を効率よく捕獲することが重要である。

山階鳥類研究所では、半世紀以上もの間、日本における鳥類標識調査をけん引しており、その捕獲技術はトキやアホウドリなどの希少種の保全をはじめとして、日本の鳥学の発展に寄与してきた。これらの捕獲技術を可視化し、次世代に継承していくことが鳥学の今後の発展に不可欠であると考えている。2021年度から2023年度の3年間では、山階鳥類研究所で実施している鳥類標識調査の調査地を中心に、かすみ網や無双網などを用いた捕獲技術、海鳥の集団繁殖地における捕獲技術等の映像資料の収集を行った。

羽ばたき運動の骨格形態指標の模索—鳥類の羽ばたき運動はいつ始まったのか

明田卓巳（名古屋大学大学院環境学研究科）

羽ばたき運動をする動物は、空圏や水圏でニッチを獲得しており、その多くが広い分布域で知られている。中でも鳥類は、陸上二足歩行性の恐竜から進化する過程で羽ばたき運動を獲得し、さらに滑翔や遊泳のようにその様式を多様化させた分類群である。また、この系統は化石記録が比較的豊富なことから、羽ばたき運動能力の獲得とその形態進化の関係を明らかにする上で関心を集めている。この状況を踏まえ発表者は、羽ばたき運動のカギとなる骨格形態の解明を目的とし、羽ばたき運動の主要となる筋肉が付着する骨格の強度や、骨格に残る羽ばたき筋の付着領域形態に着目して研究を行っている。その過程で、山階鳥類研究所が所蔵する鳥類骨格標本と、本研究所の標本データベースから取得できる鳥類CT撮像データのうち、それぞれ約100標本を活用してきた。今後は、得られた知見をもとに化石種の羽ばたき能力を復元することを目指して、より詳細な骨格標本の観察や、デジタル3次元空間を活用した骨格形態の比較が求められる。本発表では、山階鳥類研究所所蔵の標本を活用した研究に至る過程と、その研究内容について紹介する。

非公開

V

令和5（2023）年度決算資料

V-1

貸借対照表

令和6年3月31日現在

(単位：円)

科目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	214,944,863	203,308,211	11,636,652
有価証券	1,000,000	1,000,000	0
未収金	31,312,083	35,266,986	△ 3,954,903
前払金	1,527,218	1,250,612	276,606
前払費用	330,880	312,169	18,711
流動資産合計	249,115,044	241,137,978	7,977,066
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
普通預金	3,249,475	3,249,443	32
有価証券	571,757,366	571,675,113	82,253
土地	134,000,000	134,000,000	0
建物	138,098,653	148,619,241	△ 10,520,588
建物附属設備	1,189,445	1,342,815	△ 153,370
構築物	2	2,577	△ 2,575
標本	78,906	75,557	3,349
貴重図書	128	128	0
基本財産合計	848,373,975	858,964,874	△ 10,590,899
(2) 特定資産			
退職給付引当資産	31,418,706	29,102,688	2,316,018
大規模修繕積立資産	2,466,259	1,466,243	1,000,016
アホウドリ保護支援資金積立資産	27,532,953	4,555,855	22,977,098
特定資産合計	61,417,918	35,124,786	26,293,132
(3) その他固定資産			
土地	352,000,000	352,000,000	0
建物	41,039,791	41,039,791	0
建物減価償却累計額	△ 30,678,423	△ 29,926,088	△ 752,335
建物附属設備	3,053,480	3,053,480	0
建物附属設備減価償却累計額	△ 1,425,061	△ 1,219,028	△ 206,033
車両運搬具	2,956,180	2,956,180	0
車両運搬具減価償却累計額	△ 2,956,179	△ 2,956,179	0
什器備品	133,535,069	130,693,501	2,841,568
什器備品減価償却累計額	△ 122,126,296	△ 121,482,424	△ 643,872
什器備品(リース)	16,940,000	16,940,000	0
什器備品(リース)減価償却累計額	△ 8,646,458	△ 6,528,958	△ 2,117,500
図書	395,478	322,842	72,636
ソフトウェア	1,591,953	1,033,702	558,251
ソフトウェア減価償却累計額	△ 983,007	△ 843,674	△ 139,333
長期前払費用	249,898	9,550	240,348
その他固定資産合計	384,946,425	385,092,695	△ 146,270
固定資産合計	1,294,738,318	1,279,182,355	15,555,963
資産合計	1,543,853,362	1,520,320,333	23,533,029
II 負債の部			
1. 流動負債			
預り金	1,321,286	1,153,403	167,883
補助金預り金	2,849,027	1,301,096	1,547,931
前受金	1,193,063	2,358,815	△ 1,165,752
未払金	0	45,276	△ 45,276

科目	当年度	前年度	増減
未払費用	5,429,020	3,720,476	1,708,544
未払消費税等	2,268,100	2,351,900	△ 83,800
未払法人税等	778,000	827,100	△ 49,100
賞与引当金	3,298,021	2,976,800	321,221
流動負債合計	17,136,517	14,734,866	2,401,651
2. 固定負債			
預り敷金	3,160,000	3,160,000	0
リース債務	3,102,000	3,894,000	△ 792,000
退職給付引当金	34,795,641	34,451,507	344,134
固定負債合計	41,057,641	41,505,507	△ 447,866
負債合計	58,194,158	56,240,373	1,953,785
Ⅲ 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
寄附金	27,534,953	4,555,855	22,979,098
指定正味財産合計	27,534,953	4,555,855	22,979,098
(うち特定資産への充当額)	27,532,953	4,555,855	22,977,098
2. 一般正味財産	1,458,124,251	1,459,524,105	△ 1,399,854
(うち基本財産への充当額)	848,373,975	858,964,874	△ 10,590,899
(うち特定資産への充当額)	33,884,965	30,568,931	3,316,034
正味財産合計	1,485,659,204	1,464,079,960	21,579,244
負債及び正味財産合計	1,543,853,362	1,520,320,333	23,533,029

V-2

正味財産増減計算書

令和5年4月1日から令和6年3月31日まで

(単位：円)

科目	当年度	前年度	増減
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
【基本財産運用益】	19,921,053	19,921,053	0
基本財産運用益	19,921,053	19,921,053	0
【受取会費】	10,764,000	10,435,000	329,000
受取会費	10,764,000	10,435,000	329,000
【受取寄附金】	52,308,370	50,919,938	1,388,432
受取寄附金	52,045,916	50,919,338	1,126,578
指定正味財産からの振替額	262,454	600	261,854
【事業収益】	82,659,283	84,691,772	△ 2,032,489
受託・請負事業収益	66,020,620	69,211,772	△ 3,191,152
不動産賃貸事業収益	16,638,663	15,480,000	1,158,663
【受取補助金等】	77,994,315	73,258,454	4,735,861
受取補助金	56,000,000	56,000,000	0
受取助成金	21,994,315	17,258,454	4,735,861
【受取利息】	2,507	2,349	158
受取利息	2,507	2,349	158
【雑収益】	4,645,785	4,667,328	△ 21,543
有価証券運用益	16,400	16,400	0
雑収益	4,563,639	4,650,928	△ 87,289
為替差益	65,746	0	65,746
経常収益計	248,295,313	243,895,894	4,399,419
(2) 経常費用			
【事業費】	239,407,839	229,548,755	9,859,084
役員報酬	1,404,000	1,404,000	0
通勤費（役員）	36,756	33,228	3,528
人件費 注1	116,469,213	108,394,838	8,074,375
業務費 注2	78,045,165	79,359,937	△ 1,314,772
物品費	13,367,296	11,402,610	1,964,686
修繕積立金	1,900,800	1,900,800	0
支払利息	204,600	204,600	0
減価償却費	16,172,303	16,527,346	△ 355,043
賞与引当金繰入額	3,217,650	2,897,146	320,504
退職金共済掛金	2,642,004	2,774,004	△ 132,000
退職給付引当金繰入額	2,962,376	2,031,801	930,575
賃貸管理費	1,320,000	1,320,000	0
支払助成金	1,603,560	1,204,473	399,087
支払負担金	62,116	93,972	△ 31,856
【管理費】	9,256,827	8,056,162	1,200,665
役員報酬	156,000	156,000	0
通勤費（役員）	4,084	3,692	392
人件費 注1	3,156,288	2,776,632	379,656
業務費 注2	4,114,017	3,474,718	639,299
物品費	374,142	229,522	144,620
減価償却費	1,067,653	1,068,095	△ 442
賞与引当金繰入額	80,371	79,654	717
退職金共済掛金	117,996	105,996	12,000
退職給付引当金繰入額	65,776	41,353	24,423

科目	当年度	前年度	増減
支払負担金	120,500	120,500	0
経常費用計	248,664,666	237,604,917	11,059,749
評価損益等調整前当期経常増減額	△ 369,353	6,290,977	△ 6,660,330
評価損益等計	0	0	0
当期経常増減額	△ 369,353	6,290,977	△ 6,660,330
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
【その他経常外収益】	3,349	805	2,544
その他経常外収益（標本）	3,349	805	2,544
経常外収益計	3,349	805	2,544
(2) 経常外費用			
【固定資産除去損】	9	523,439	△ 523,430
建物除却損	0	507,215	△ 507,215
什器備品除去損	9	16,224	△ 16,215
【その他経常外費用】	255,841	290,089	△ 34,248
図書評価損	255,841	290,089	△ 34,248
経常外費用計	255,850	813,528	△ 557,678
当期経常外増減額	△ 252,501	△ 812,723	560,222
税引前当期一般正味財産増減額	△ 621,854	5,478,254	△ 6,100,108
【法人税等】	778,000	827,100	△ 49,100
法人税・住民税及び事業税	778,000	827,100	△ 49,100
当期一般正味財産増減額	△ 1,399,854	4,651,154	△ 6,051,008
一般正味財産期首残高	1,459,524,105	1,454,872,951	4,651,154
一般正味財産期末残高	1,458,124,251	1,459,524,105	△ 1,399,854
II 指定正味財産増減の部			
【受取寄附金】	23,241,552	500,042	22,741,510
受取寄附金	23,241,500	500,000	22,741,500
受取寄附金利息	52	42	10
【一般正味財産への振替額】	△ 262,454	△ 600	△ 261,854
一般正味財産振替寄附金	△ 262,454	△ 600	△ 261,854
当期指定正味財産増減額	22,979,098	499,442	22,479,656
指定正味財産期首残高	4,555,855	4,056,413	499,442
指定正味財産期末残高	27,534,953	4,555,855	22,979,098
III 正味財産期末残高	1,485,659,204	1,464,079,960	21,579,244

注1：人件費内訳 給与手当、賃金、賞与、法定福利費、福利厚生費

注2：業務費内訳 委託費、旅費、交通費、通信運搬費、修繕費、印刷製本費、光熱水料費、借料及び損料、保険料、諸謝金、租税公課、会議費、交際費、雑費

V-3

財産目録

令和6年3月31日現在

(単位：円)

貸借対照表科目		金額
(流動資産)		
	現金	2,983,795
	預金	211,961,068
	有価証券	1,000,000
	未収金	31,312,083
	前払金	1,527,218
	前払費用	330,880
	流動資産合計	249,115,044
(固定資産)		
基本財産		
	普通預金	3,249,475
	有価証券	571,757,366
	土地	134,000,000
	建物	138,098,653
	建物附属設備	1,189,445
	構築物	2
	標本	78,906
	貴重図書	128
特定資産		
	退職給付引当資産	31,418,706
	大規模修繕積立資産	2,466,259
	アホウドリ保護支援資金積立資産	27,532,953
その他固定資産		
	土地	352,000,000
	建物	41,039,791
	建物減価償却累計額	△ 30,678,423
	建物附属設備	3,053,480
	建物附属設備減価償却累計額	△ 1,425,061
	車両運搬具	2,956,180
	車両運搬具減価償却累計額	△ 2,956,179
	什器備品	133,535,069
	什器備品減価償却累計額	△ 122,126,296
	什器備品（リース）	16,940,000
	什器備品（リース）減価償却累計額	△ 8,646,458
	図書	395,478
	ソフトウェア	1,591,953
	ソフトウェア減価償却累計額	△ 983,007
	長期前払費用	249,898
	固定資産合計	1,294,738,318
	資産合計	1,543,853,362
(流動負債)		
	預り金	1,321,286
	補助金預り金	2,849,027
	前受金	1,193,063
	未払費用	5,429,020
	未払消費税等	2,268,100
	未払法人税等	778,000
	賞与引当金	3,298,021
	流動負債合計	17,136,517
(固定負債)		
	預り敷金	3,160,000
	リース債務	3,102,000
	退職給付引当金	34,795,641
	固定負債合計	41,057,641
	負債合計	58,194,158
	正味財産	1,485,659,204

VI

ご寄附・賛助等に関する資料

令和4(2022)年度・令和5(2023)年度 寄附金及び賛助会員増減数一覧

令和6年3月31日現在

<公益目的事業会計(一般) 寄附金>

種別	令和4年度		令和5年度		比較増減額 金額(円)	対4年度 増減率 % 比率(%)	比較増減数 件数	備考
	金額(円)	件数	金額(円)	件数				
寄附金(法人)	3,684,736	11	8,914,387	23	5,229,651	142%	12	(令和4年度大口)(一社)霞会館1,500,000円 (令和5年度大口)我孫子市ふるさと納税2,993,000円、(一社)霞会2,000,000円
寄附金(個人)	2,704,602	29	4,701,529	34	1,996,927	74%	5	(令和4年度大口)高木文子1,000,000円 (令和5年度大口)村上信1,150,000円、高木文子1,000,000円
計(a)	6,389,338	40	13,615,916	57	7,226,578	113%	17	

<公益目的事業会計(一般) 賛助会費>

種別	令和4年度		令和5年度		比較増減額 金額(円)	対4年度 増減率 % 比率(%)	比較増減数 件数	備考
	金額(円)	員数	金額(円)	員数				
法人賛助会員	45,530,000	182	39,430,000	173	△6,100,000	△13%	△9	令和5年度入会5件、令和5年度未継続・退会14件
地方自治体	2,700,000	12	3,250,000	12	550,000	20%	0	令和5年度 我孫子市増額 550,000円
団体賛助会員	464,000	12	464,000	12	0	0	0	
個人賛助会員	6,271,000	530	6,050,000	497	△221,000	△4%	△33	令和5年度入会20名、会費前納4名(R5収入はないが件数に入れる)、令和5年度未継続・退会57名
計(b)	54,965,000	736	49,194,000	694	△5,771,000	△10%	△42	
合計(a)+(b)	61,354,338		62,809,916					

<法人全体の寄附金>

種別	令和4年度		令和5年度		比較増減額 金額(円)	対4年度 増減率 %	比較増減数	備考
	金額(円)	員数	金額(円)	員数				
アホウドリ保全事業 (使途指定寄附)	500,000	1	23,241,552	25				令和4年度 絹村光代500,000円、 令和5年度 百瀬淳子20,000,000円、絹村光代500,000円、 アホウドリマンスリーサポート2,741,552円
計	500,000	1	23,241,552	25				

* 金額は年度合計額。 賛助会員数は期末時点における員数。

* 法人賛助会員はP/L上寄附金扱いとなっている(除くサントリー1,000,000円。サントリーからの申出により賛助会費扱いとなっている。)

令和4（2022）年度・令和5（2023）年度 県別 賛助会員数一覧

各年度末 3月31日現在

	法人		地方自治体		団体		個人	
	令和4年度	令和5年度	令和4年度	令和5年度	令和4年度	令和5年度	令和4年度	令和5年度
北海道							15	16
青森県							2	4
岩手県							3	2
宮城県	2	2					4	4
秋田県							4	3
山形県							1	0
福島県							4	4
茨城県	7	7	3	3			32	30
栃木県	1	1					2	2
群馬県							1	1
埼玉県	2	2					21	19
千葉県	8	8	5	5	8	8	81	75
東京都	73	67			2	2	96	93
神奈川県	3	2					33	33
新潟県			1	1	1	1	9	9
富山県							0	0
石川県							3	3
福井県	1	1					0	0
山梨県							1	1
長野県	1	1	1	1			19	16
岐阜県	1	1					4	4
静岡県	1	1					3	3
愛知県	1	1					34	28
三重県							3	2
滋賀県							4	4
京都府	11	10					6	6
大阪府	28	28					19	18
兵庫県	2	2	1	1			13	14
奈良県	2	1					1	1
和歌山県	1	1					1	1
鳥取県					1	1	2	2
島根県	2	2					5	5
岡山県	2	2					3	3
広島県	6	6					48	43
山口県							5	6
徳島県	1	1					1	1
香川県	1	1					3	2
愛媛県	12	12					16	15
高知県	1	1					2	2
福岡県	1	1					5	5
佐賀県							0	0
長崎県							2	2
熊本県	10	10					9	7
大分県							2	2
宮崎県							1	1
鹿児島県	1	1	1	1			2	2
沖縄県							4	3
アメリカ合衆国							1	0
合計	182	173	12	12	12	12	530	497

賛助会員の集い 地区別・年度別 開催状況一覧

令和6年3月31日現在

	東日本 (東京)	東日本・中部 (東京)	中部・名古屋 (名古屋)	関西 (大阪・京都)	四国 (愛媛)	中国 (広島)	九州 (熊本)	中部 (長野)	中国・四国・拡大 (広島・岐阜 他)	中国・四国
平成21年度							H22.2.9			
平成22年度	H22.6.23							H23.2.14		H22.12.7 (広島)
平成23年度			H23.12.1	H23.7.4			H24.2.7			
平成24年度	H24.7.3								H25.1.23	
平成25年度			H25.11.8	H25.7.10			H25.3.5			
平成26年度	H26.7.15				H27.2.18					
平成27年度			H28.1.20	H27.7.2		H27.4.6				
平成28年度	H28.7.13				H29.2.1		H28.4.25 熊本地震の為中止			
平成29年度						H29.4.12				
平成30年度		H30.7.2								H31.3.6 (愛媛)
平成31年度				R元.12.18						
令和2年度		COVID-19 感染拡大防止の為中止								
令和3年度				COVID-19 感染拡大防止の為中止						
令和4年度										
令和5年度										

※ 令和2年度～令和5年度 COVID-19 感染拡大防止の為、集いは開催されなかった

令和5（2023）年度 公共機関賛助金一覧

令和6年3月31日現在

(区市町村名)	(賛助員入会年度)	(賛助金) (単位：円)	(担当課等)
我孫子市(千葉県)	昭和 60年度	1,700,000	鳥の博物館
柏市 (〃)	平成 4年度	400,000	教育委員会生涯学習部文化課
松戸市 (〃)	平成 4年度	500,000	街づくり部みどりと花の課
野田市 (〃)	平成 4年度	50,000	都市部緑と水のまちづくり課
千葉県	平成 2年度	200,000	環境生活部自然保護課
稲敷市 (茨城県)	平成 20年度	50,000	市民生活部環境課
牛久市 (〃)	平成 5年度	50,000	牛久自然観察の森
利根町 (〃)	平成 6年度	50,000	政策企画課
軽井沢町(長野県)	平成 17年度	50,000	環境課野生鳥獣対策係
新潟市 (新潟県)	平成 4年度	50,000	福島潟みらい連合
豊岡市 (兵庫県)	平成 5年度	50,000	コウノトリ共生課
出水市 (鹿児島県)	平成 5年度	50,000	出水市ツル博物館
	合計	3,200,000	

令和5年度 賛助法人リスト（法人賛助員及び継続寄附の法人を含む）

（五十音順）
令和6年3月31日現在

(有) アート企画
(公財) 旭硝子財団
(株) 旭屋書店
穴吹興産 (株)
(一社) 我孫子ゴルフ倶楽部
我孫子市国際交流協会
我孫子市
我孫子野鳥を守る会
アブダビ石油 (株)
ALSOK (株) 茨城支社
アルファクラブ武蔵野 (株)
(宗) 安養院
(宗) 安養寺
(株) イーストネットワーク
(株) イープレス
イカリ消毒 (株)
出水市
(株) イズミヤ
(株) 泉屋商店
出雲大社
(学) 市川学園
巖島神社
(株) 一保堂
(株) いとや
稲敷市
今治造船 (株)
上野製菓 (株)
(有) 上野剥製所
牛久市
(株) えがお
(株) エコリス
(株) NHKエンタープライズ
(株) NYK西日本
(株) 江ノ島マリンコーポレーション
(株) 愛媛銀行
愛媛パッケージ (株)
(株) 応用生物
大阪ガス (株)
大崎電気工業 (株)
(株) オオバ
(株) 大林組 大阪本店
(株) 大林組東京本店
(株) オービックビジネスコンサルタント
オカモト (株)
小川香料 (株)
おべ工業 (株)
鹿島建設 (株)
鹿島神宮
柏市
(一社) 霞会館
カトーレックウエスト (株)
軽井沢町
川北化学 (株)
関西電力 (株)
キッコーマン (株)
(株) 紀文食品
キャノン (株)
(株) キューネット
(株) curioswitch
キョーラク (株)
(株) キング
近鉄グループホールディングス (株)
月桂冠 (株)
ケネディクス (株)
(株) 建設環境研究所
(一財) 建設経済研究所
(株) 亘徳 東京支店
鴻池運輸 (株)
(株) コーエーテクモホールディングス
(株) コーセー
(株) 国際文献社
コクヨ (株)
黒龍酒造 (株)
寿精版印刷 (株)
高野山真言宗総本山金剛峯寺
佐藤製菓 (株)
サラヤ (株)
山九 (株)
三徳電機 (株)
サントリーホールディングス (株)
三宝電機 (株)
(株) シアーズホーム
(株) シー・アイ・シー
(株) シグナル交通
四国建設コンサルタント (株)
(株) 資生堂
澁谷工業 (株) 関西営業部
清水建設 (株)
(一財) 住環境財団
(学) 修道学園
(株) ジュンアシダ
(株) 聖護院八ツ橋總本店

(一社) 昭和会館
 新和印刷 (株)
 (株) 親和技術コンサルタント
 住友化学 (株)
 セイコーグループ (株)
 (株) セキュリティエヒメ
 (株) セルモ
 セレモアホールディングス (株)
 全国農業協同組合連合会
 (学) 洗足学園
 (株) 仙波工業
 (学) 君が淵学園 崇城大学
 ソニーグループ (株)
 ソニー生命保険 (株)
 ソフトバンク (株)
 (株) 第一製版
 ダイキン工業 (株)
 (株) 大正クエスト
 大日本印刷 (株)
 (一社) 大日本猟友会
 宝ホールディングス (株)
 (株) 竹中工務店
 (株) 玉越
 千葉県
 中央学院大学
 (株) 中国新聞社
 鶴崎商事 (株)
 (株) ティーワイリミテッド
 (公財) 摘水軒記念文化振興財団
 テラル (株)
 (株) テレビ熊本
 (一財) 電力中央研究所
 東京エレクトロン (株)
 東京海上ホールディングス (株)
 (公財) 東京動物園協会
 東京戸張 (株)
 東西化学産業 (株)
 (株) 東伸
 (宗) 東大寺
 (株) トーセ
 東レ (株)
 常磐神社
 (株) トサトーヨー
 TOPPAN (株)
 利根町
 (株) 友清白蟻
 豊岡市
 長野朝日放送 (株)
 NISSHA (株)
 (株) 日清製粉グループ本社
 日本管財ホールディングス (株)

日本航空 (株)
 日本生命保険 (相)
 日本たばこ産業 (株)
 日本鳩対策センター (株)
 一般社団法人日本鳩レース協会
 日本野鳥の会 茨城県
 (宗) 如宝寺
 野田市
 はごろもフーズ (株)
 パナソニックホールディングス (株)
 (株) 林事務所
 林常王冠 (株)
 (株) 樋口松之助商店
 (株) ヒライ
 広島信用金庫
 (株) ひろ写真
 (有) 廣瀬石材店
 福岡ソフトバンクホークス (株)
 福島潟みらい連合
 富士急行 (株)
 (株) 藤交通
 (株) フジシール
 不二熱学工業 (株)
 (株) フジワラテクノアート
 星企画 (株)
 (公財) ホシザキグリーン財団
 (株) 堀場製作所
 松戸市
 (独) 水資源機構
 (株) 三井住友銀行
 三菱商事 (株)
 (医) 天真会南高井病院
 (株) 南日本銀行
 (株) 源吉兆庵ホールディングス
 村田機械 (株)
 (宗) 明治神宮
 森ビル (株)
 (株) 森ビルホスピタリティコーポレーション
 (株) 安井建築設計事務所
 山科電気工事 (株)
 (株) ユー花園
 (株) ユニオン
 吉田機電 (株)
 (株) 鈴
 (株) リン・ドス
 レンゴー (株)
 (株) ロッテホールディングス
 (株) YSトレーディング
 和多田印刷 (株)
 渡辺パイプ (株)

山階鳥類研究所 年報

令和5（2023）年度

令和6（2024）年8月31日発行

編集・発行 公益財団法人 山階鳥類研究所

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115

TEL: 04-7182-1101

FAX: 04-7182-1106

<https://www.yamashina.or.jp/>